奔放のメイジ

騎志丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奔放のメイジ

【Ｎコード】
Ｎ５４０８Ｌ

【作者名】
騎志丸

【あらすじ】
ネギま！のちょい役、近衛詠春の弟である青山影春が何故かゼロ魔の世界へと転生してたぶん原作介入する話。オリジナル主人公が嫌な方は読まない方が良いかも。たぶん最強物になるかもですし、不定期更新ですし。

主人公の口調を関西弁に統一しました。そのために多少話や主人公の性格が変わってたりしますが、流れは基本的に同じなので読み直さなくても大丈夫かと思います。

プロローグ　その世界での最後（前書き）

小説は初めてという訳ではないですけど、ここに投稿するのは初めてなのでよろしくお願いしますよ。

まあ幼稚な文章なんで、よほど寛大な方しか読まないと思いますけど（笑）

プロローグ　その世界での最後

月夜が差し込む森の中で、一人の男が血だらけになって仰向けに倒れていた。

その体は左腕が肩からばっさり斬られたように存在せず、同じように左足も何かに抉り取られたように膝下から無くなっており、右の脇腹からもばっくり切り裂かれ、それぞれの痕からはおびただしい程の真っ赤な血液が流れ出ている。

しかし、それでもその男は生きていた。まだ存在し、だが切り傷だらけのその手には、自分の身長をかるく超える長さ――――――二メートルはあろう野太刀を我が血と返り血の二つで染めながらもしっかりと握り締めている。

男はまだ戦う意思を棄ててはおらず、明らかに満身創痍のその体で何かと戦おうとしている。

その何かは男の周りをよく見れば、木々の間からその眼光を光らせているナニかが三六〇度から男の様子を伺っているのがわかる。

しかもそれらは明らかに人の形をしておらず、明らかな異常にして異形、その姿はまさに鬼と言っても過言ではない姿形をしている。

そう、彼らは鬼。まごう事無き鬼と呼ばれる存在。その数はざっと見渡すだけでも三桁は軽く超えている。

だがそれは見える範囲なだけで見えない所も含めれば四桁、いや五桁はいるかもしれない万の鬼の軍勢。一人で相手をするには多過ぎた。

（まったく、たった一人殺んのに何匹おんねんって話やな……。どうせこの怪我じゃ奇跡でも起こらんと助からんやろし、最後の一暴れといこかな）

男は出血のせいで血が足りないのか、顔を青くして力無く薄く笑い、満身創痍の体を無理して上体だけを起こすと、無い左肩から血が噴出してビチャっと地面を濡らす。

（これが兄貴やったら、掠り傷ぐらいで勝ってまうんやろなぁ。結局、兄貴には勝てんかったか）

力が入らず震える自分の右手を上げて野太刀を構えて自嘲する。

男はただ、この世で一番近しく、そして尊敬していた男を超えたかっただけだ。

けれどもその男は西の異文化の男達と共に広い世界へと飛び立って彼の前から姿を消し、今も尚いろんな世界を飛び回っては『この世界』でその名を轟かせている。

兄は世界へ飛び立ったが、それなら自分はこの小さな島国でまず自分の名を刻ませ、そして世界へと行こうと、兄に胸を張って会えるようにと幾日、幾月、幾年と努力を怠った事は無かった。

しかし、その考え方自体が男のいる組織――関西呪術協会では異端だったがために、こうして身内の手で殺されようとしているのだが。

（まあ、ええわ。最後にこんな大舞台……いや、皆身内やけども、派手に散らせてくれるんは剣士の誉や！）

男は虚空を見ながら犬歯を剥き出しにしてカカッと笑う。

既に死に体の男のその体からブワッとオーラのようなモノが溢れ出してその身に纏うと、ぷるぷる震えていた右腕がスッと静止し、それでいて左肩と左足、そして右脇腹から溢れ出した血液が止まる。

それは気と呼ばれる存在であり、東の呪術師や剣士は大概が使える生命エネルギーのようなモノである。

ちなみに周りの万の鬼達を召喚したのも同じく気を使ったモノだったりする。いや、似て非なる魔力かもしれないが。

「神鳴流剣士、青山影春！ただでは散らさへん！かかってこいや、化け畜生共がぁっ！！」

男――――いや、影春がそう叫ぶと、周りにいた鬼達が一斉に影春に飛び掛った。

「神鳴流……」

鬼達に囲まれそうになった影春だが、その中で透き通るように影春の声が聞こえ

「百花繚乱(ひゃっかりょうらん)っ！！」

次の瞬間には囲みかけていた鬼達を、座ったままで一瞬の間に繰り出した百の太刀で細切れにし、血溜まりを作る。

影春はそれを一瞥(いちべつ)して片足が無い状態で立ち上がる。

いや、別に立ち上がった訳ではない。浮遊術と呼ばれる宙に浮かぶための術を使って無理矢理自身を立たせているだけに過ぎない。

「ほな、行くでぇ……！！」

影春は荒く息切れしながらも、剣を振りかざして鬼達に突撃して行った。

その後、影春は万の軍勢を五分の一程までその剣で斬り崩してこの世を去った。

影春を討ち取った鬼と術者は、ほとんど原型を留めなかった影春の死体だが、なんとか少しだけ顔を確認する事ができ、満足そうに笑っていたそうだ。

しかし誰も気づかないし、わからない。いや、予想しなかったし、できなかった。更に言えばそんな事が起こるなんて考えが浮かぶ筈も無いだろう。

影春の旅はこれから始まると言う事に。

プロローグ　その世界での最後（後書き）

ちょいと短いですかね？まあ、プロローグなんで見逃してくださいな

第一話　その世界の始まり（前書き）

そうそう。どうでも良い事ですが、私ってもともと一人称で書いてたのですが、この作品は三人称の練習って事で書き始めました。ホントにどうでも良いですがｗ

第一話　その世界の始まり

影春は最後の最後まで己の全力を持って戦い、満足して死んでいった。いや、人生そのものに対しては悔いはあるけども、剣士としては満足していると言った方が良い。

そんな影春は今――。

「おー、おまえがわしの子か」

「我がエンドリス家の誉れある貴族となるのですよ？」

「おぎゃ……（なんやねん、この現状……）」

気がつけば赤ん坊になって髪の色はダークブラウンで髪型はオールバックの顔の彫りが濃い中年太りの男性と、美しいブロンドの長い髪にキリっと目つきが鋭くどこかヒステリックっぽい女性の二人に囲まれて、影春は色んな意味で泣いていた。

（なんで俺が赤ん坊になっとんねん。ありえへんやん？　視界もぼんやりとしか見えんし、手とか足とかホンマ動かし辛いし、泣き止まんし、うっとしいわぁ、赤ん坊って）

赤ん坊になった影春はそう思いながらも、赤ん坊故に短い手足をじたばた動かしながらベッドの上でわんわん泣いている。

（両親共日本人離れな容姿しとるし……いや、はっきり見えんけど。もしかしてここ、欧州かどこかかいな？）

と、心の中で付け足しながら。

それは輪廻転生と呼ばれるモノ。人は生まれ変わり、死に変わり、車輪がぐるぐると回るように生死を繰り返すこと。

だが、生まれ変わるとは言え、生まれ変わった存在に本来は前世の記憶などは無く、記憶どころかちゃんとした意思を持ってること自体が異例であり、異常だった。

しかし元々聡明ではない影春は、そんな事も気づかずにただのう

のうと日々の思い出を作っていたりする。嫌な思い出ばっかりだが。
例を挙げるのならば、おねしょやおしめを代える時とか母乳を与えられてる時か。幸運だったのは未だに目がはっきりと見えなかったことだったりする。いや、それはそれで目隠しプレイみたいで内心ドギマギしていた。
所詮は見た目は赤ん坊、中身は純情まっしぐらな青年であった。

この世界に誕生してから五ヶ月程度経ち、影春はこの家について色々と気づいたことがある。
第一に、それはこの家はかなりデカイ――否、阿呆みたいにバカデカイという事だ。いや、貴族だから当たり前だろうとは思うだろうが、影春は当時転生直後でパニくっており、自分が貴族の家に生まれたとは知らなかったのだ。
第二に、ルストレオ・ロファー・ド・エンドリス…と言う長ったらしい言葉の羅列（らレつ）みたいなのが新しい影春の名前だと言う事。
第三に、ここは地球じゃないかもしれないと言う事。ここはハルケギニア大陸のトリステインの中のド・エンドリス領という場所であること。
（ハルケギニア大陸なんて地球では聞いたことのない大陸やし、魔法世界（ドゥス・マギクス）にそんな名前の大陸あったっけ？　いや、日本から出たことないから俺ぁ知らへんけど。基本、関西呪術協会は西洋魔法使いの事嫌いやからなぁ。調べようにも魔法使いの事は調べられるけど魔法世界まではなぁ。それに月は二つあるし、魔法世界って月が二つあるもんなん？）
影春は毎夜ぼやけた視界で見た赤と青の光を思い出しながらそう思慮（しりょ）する。
話を戻して第四に、両親は驚く程に自分達の子供に関心が無いと言う事だ。忙しいからなのかもしれないが、一日に一度顔を出せば良い方であり、ほとんどが乳母のリンダと使用人のダリスが影春の世話をしているのである。

もし影春が本当の赤ん坊であるならば、ダリスとリンダが両親と勘違いしているかもしれないぐらいだ。

ちなみに父の名前がルガンド、母の名前はジルデと言うらしい。

正直、影春はダリスとリンダの会話で出でて来なければ両親の名前はわからなかっただろう。本当の赤ん坊なら知らないのは当然なのだけれど。

「はい、坊ちゃん。ご飯ですよー？」

（嫌やー！？）

片方の乳房を露出させて差し出してくるリンダに、嫌だと言いたくても言えなく、ただおぎゃあおぎゃあと泣き喚く事しかできない影春。

その仕草がリンダには早くご飯が欲しくてたまらないようにしか見えないのは当然である。

赤ちゃんプレイが好きな人にはたまらないシチュエーションだろうが、あいにくと影春にはそんな性癖はないどころか剣のみを極めようとしていたために独身で、初めてすらまだで、更に言えば恋愛すらする事も無いまま身内に殺されたのだ。

そういうのに耐性がある筈も無く、どこまでも初心なのが影春なのだ。

（あぁ、今日も今日とてなんか人として大事な尊厳っちゅうやつを失ってくんやね……）

と、母乳を嫌々ながらもちゅーちゅー飲みながらさめざめと心の中で涙を流して、順調に幼い頃の黒歴史を着々と刻んでいく影春だった。

第一話　その世界の始まり（後書き）

やっぱ短いなぁ。でも赤ん坊の時ってあんまり書くこと無いですから、おそらく次は少しは長くなるかもしれないですね。

第二話　初めての魔法（前書き）

ちなみに私の小説はその場のノリで書いています。故に矛盾とか見つかるかも（苦笑）

第二話　初めての魔法

生まれてから年月もだいぶ経ち、黒歴史も自前の気力で乗り――超えられなかったために自分の記憶から頑張って無かった事にし、相変わらずの両親は影春――ルストレオにあまり関心が無かったが、色々なイベントがあった。

例えばルストレオが二歳になった頃に両親が新たに子供を作った。自分の子供に関心が持てない癖に二人目作ってんちゃうぞワレ！？と声を大にして言いたい――というかそれとなく言ってみたところ。

「おまえが魔法を使えるようになったら相手をしてやろう」

という素敵な言葉を父――ルガンドから頂いた。育児する気、一切無し。

この事を使用人のダリスに聞いてみたところ、エンドリス家はトリステインきっての名門らしく、最低でもトライアングル以上の魔法使い――メイジを産出しているため、礼儀作法や座学は他人に任せて直々に魔法を教えるだけのようである。

訳は名門故に魔法が貧弱では話にならないため、他から呼んだ家庭教師よりも自分達の方が優秀だからだからとか。

つまり、両親は魔法が優秀な子供が欲しいようだ。自分達の体裁を守るために。親としてそれで言いのだろうか？と、問いたくなるが、両親は自分の子供よりも体裁を取る人種である。

ちなみにトライアングルと言うのはメイジの強さを表す言葉だ。下からドット、ライン、トライアングル、スクウェアと言って、それぞれ火、水、風、土の四系統の属性を足せる事によって変わる。

まあ、三系統を足すメイジはおらず、二系統足した後にその二系統の内の一つを重ねがけ――風・風・水と言った感じに威力を増せ

るのがトライアングル以上のメイジだ。当然、全て同じ系統で重ねがけする事も可能だ。

それからルストレオが、自分のよく知る西洋魔法使いと存在そのものが違うと確信したのはメイジと言う呼び名と先の魔法の仕組みである。

で、その結論がここどこやねん？　であった。

話を戻して、できた妹の名前はイザーリア。髪の色は父親ゆずりの可愛らしい女の子だ。ちなみにルストレオ自身は母親譲りの金髪である。

皆はルストレオの事をルスト、イザーリアの事をイザリーと家族内では呼ぶようになったが、両親はイザリーですら関心がないようだった。

（ホンマに親なんか？　親ってもんは理屈抜きで子供が可愛い筈やろ。……はっ！　まさかこれが噂のドメスティックバイオレンス！？　にしては別に暴力振るわれた訳でもないしなぁ。ほんじゃあ、育児放棄？　でもダリスとかリンダが育てて……ってちゃうやろが！）

などとこの頃は一日一回はそんな事を思っていたルスト。しかし現在では既に諦めていたりする。

そしてルストが六歳になった頃、とうとう魔法を使う時が来た。その前に何日もかけて契約して自分専用の杖を作成した。

杖の形状は一般的な短い杖（ワンド）で、ルスト自身は剣を杖としたかったので、進言すると。

「馬鹿者が！　剣なんぞ下賤（げせん）な平民が使う物だ！　高貴なるエンドリス家の者が剣を使いたいとは何事だ！？　恥を知れ！　恥を！」

と、父に怒鳴られたあげく、グーで頬を殴り飛ばされた。六歳の

子供を、である。
　トリステインの貴族は他の国よりプライドが高くて傲慢らしく、魔法を使えない者を軽んじると言うか、蔑むと言うか、とにかく劣悪種のごとく扱うのである。
　更に言えばエンドリス家は名門中の名門故に生粋のトリステイン貴族だったためにその傾向がやたらと濃かったりする。
　そんな事にもめげず――と言うよりもルストは痛みに慣れているために何事もなかったかのように、魔法の練習が始まった。もはや自然公園の一種とも呼べそうな程に広い庭先で。
「このわしが系統魔法の初歩をそれぞれ教えてやる」
「系統魔法の初歩ですか？　父上が風系統で、母上が水系統やねんからそのどっちかとちゃいますのん？」
「どうでも良いがその訛はどうにかならんのか？」
　ルガンドが尊大な態度で腕組みしたまま、対面しているルストへと訝しげな視線を送る。実はルスト、生前使っていた関西弁が抜けずに関西弁っぽい訛になってしまうのだ。ちなみに使用人達は変だと思いつつも黙認してそういうものなんだと思ってしまってたりする。
「無理ですわ。なんやもう矯正もできへん程に慣れ親しんだと言いますか……」
「フン、どっちでも良い。ではまずは火系統からだ」
（どっちでもええんやったら突っ込まんといてぇや……）
　頭を垂れるルストに無理矢理先を促して火系統の初歩――発火と呼ばれる名前通りに杖の先から断続的に発火する魔法を試す……が、何も起こらなかった。
「何も起こりませんけど？」
「貴様には火の才能がないようだな。なれば水はどうだ？」
（ばっさり言うなぁ……）
　ルガンドの辛辣な言葉にため息をつくが、次に進められた水系統の初歩――凝縮と呼ばれる大気中の水蒸気を液体へと変える魔法を試

す……が、何も変わらない
「フン、水もか。なれば風だ」
そして次は風系統の初歩――風（ウインド）と呼ばれるこれまた名前通りのそよ風を巻き起こす魔法を試す……が、やはりダメだった。
「貴様、本当にわしらの子か？」
「一応その筈やけど……」
「仕方ない、次が最後だ」
そして最後の土系統の初歩魔法――錬金（イル・アース・デル）と呼ばれる物質そのものを別物へと変える魔法だ。やってる事は凄いが何分この魔法はメイジの腕によって変換できる物質の種類が増減するというものだ。そして――
「む？石ころの形が少し変わった？　……どうやら土系統のようだな。ハッ、地味だな」
（いや、一応適正がわかってんから褒（ほ）めるなにして欲しいとか思うんやけども）
成功したと言うのに相変わらずなルガンドの態度にため息をつくルスト。
名門中の名門であるエンドリス家ではできて当然と言わんばかりにルガンドは課題を出した。
「まずは錬金の練習で、石ころを青銅に変えろ。このぐらいなら風系統なわしでもできることだ」
「いや、父上。流石に適正がわかっただけで石の形を変えるだけでもに必死やのに何を言ってはりますのん？」
「貴様もエンドリス家の一員なれば、そのくらいやってみせろ」
「んな無茶な！？」
と、ルストは勢い良く反論するがルガンドは聞く耳を持たない。
（いやいや、初めて魔法使う人間に対する態度とちゃうやろ？　ホンマはこの人、俺のこと嫌いなんとちゃうか？）
とか思いながらもなんだかんだで魔法の練習を始めるが、結局失敗続きで今日の練習は――

「とりあえず、青銅ができるようになるまで屋敷に入る事は許さん。それが嫌ならさっさと使えるようになることだ」
「えぇ！？　いきなりは無理やって、父上！？」
終わらなかった。
だが、言いたいことを言った父は魔導書らしき物をその場に置いて、問答無用で屋敷に入って鍵を閉めてルストを家から閉め出す。
（あの人何考えとんの！？）
この後ルストは必死になって錬金の練習をし、深夜と呼べる時間帯（当然、夕食抜き）でなんとかできるようになった。
だが、時間も時間なために屋敷は寝静まっていてこれどうやって家に入んの？　って事になり、ぶち壊す事も考えたのだが、ダリスに勝手口を開けてもらって入った。
「ご苦労様です、坊ちゃん」
「うん。……ホンマにご苦労さんや」
ダリスから受け取ったタオルのようなモノで汗をふき取りながら返事する。

気の感覚はなんとなくわかっているのだが、魔法なんてモノは使うのすら初めてなのだ。いや、今の肉体では気すら使えないが、気と相反する魔力――この世界では精神力を感じ取るのだけでも結精一杯だったためにかなり疲弊（ひへい）していたりする。
「何故だろう？　目から汗が滝のごとく流れ出るよ、母上」
それから自室へと戻ったルストはそう呟いて枕をルスト曰（いわ）く汗で濡らして、眠りにつくのだった。だがルストは母親も父親と同じ人種だと言う事を忘れていた。

第二話　初めての魔法（後書き）

まだ短いかな…？

長さがよくわからないけど。まあ、テキトーで良いでしょう（笑）

第三話　その男、劣等（前書き）

ちょっと話がアクセル全開でかっ飛ぶ勢いで進んで行きます。

ていうかただ、はしょり過ぎなだけな気がしますけどね。

第三話　その男、劣等

初めて魔法を使った日から二年の年月が流れ、ルストが八歳になった頃にはメイジとしてはまずまずの土のドットになる事ができた。

ルガンドの鍛錬はもはや自主鍛錬の域で、なんのアドバイスもなくいきなりやってみろと言われてもできる筈がない。

しかしできなければできないで――

「この程度もできんのか？　わしがおまえぐらいの頃はこの程度は楽に使えていたぞ？」

と、自慢混じりの嫌味を言われる始末。

だから、暇な時は魔導書、または教科書を読み漁っている。もう完全に予習しておかなければついていけないからだ。

それから妹が六歳になり、魔法を教えてもらっていたが、一日で風系統の初級魔法を全て覚え、次の日にはルストと同レベルの魔法までやってのけた。

それお見ていた父は――

「流石はわしの子だ。どこかの愚息（ぐそく）とは大違いだ！　ワッハッハッ」

うそん……と打ちひしがれるルストの隣で嬉しそうに笑っていた。

母も母で、魔法をちゃっちゃと修めたイザリーの方を可愛がり、既にルストの方には見向きもしない。

（普通の子供やったらグレるか自殺してると思うんやが？　まあ、グレようが自殺しようがあの両親が関心持つとは思えへんけどな……）

最近、父すらも話かけても返事をしない事を思い出してため息をつく。

それから更に時が経ち、十二歳になった今のルストはいつの間にかもう死んだ者とされ、他の家には既に病気で亡くなったとされて

いた。ホント、いつの間にか。酷い話であるが、理由が十二歳のルストがドットのままなのに対してイザリーが十歳でラインに辿り着いてしまった事が原因である。

だが、別に死んだ者とされたからとていきなり家を追い出された訳では無く、一応エンドリス家の屋内で匿われている。まあ、ただの情報漏洩を防いでるだけなのだが。

現に家の中で父や母に話しかけても完全に無視である。

十歳になったイザリーはまだ話かけてくるが――

「まだこの家にいらしたの？　お兄様（仮）」

という始末である。昔は「お兄たま～！」とトテトテと走ってきて飛びついてきたのが懐かしく思える。

「絶対あの人等の影響やろ。あの可愛いかったイザリーが何故あんな高飛車になってもうたんや……」

自室のベッドで寝転びながらそう嘆くルスト。ほんの二年前まではルストにとってイザリーは癒しだったのだ。

今はやけくそ気味に、部屋にある両親がほったらかしにしている魔導書や政学等の本を――家庭教師も来なくなったために暇過ぎて――読み漁ったり、平民に変装して――ダリスとリンダの二人に手伝ってもらって――外へと抜け出しては近場の森で魔法の練習と、錬金で作った剣――ドットレベルなために粗悪品――を片手に影春としての感覚を取り戻すために剣の鍛錬と、気を取り戻すために精神修行をしている。

両親も外に出るのはルストだとバレなければ良いらしく、別に何も言ってはこない。

（髪まで染めた甲斐があったってもんやなぁ）

ベッドの上で自分の髪を弄りながらそう思う。ちなみに色はやはり日本人にとって馴染み深い黒にした。ハルケギニアでは珍しい色らしいが、ルストはそれをあえて選択した。

ルストは、両親が自分を見なくなった時から、強いて言うなら既に自分が死んだ者とされている事を知った時から両親と思わなくな

った。当然である。

それからルストは陰鬱な気持ちを霧散させるようにガバッとベッドから起き上がる。

そしていつもの変装をして、自らの杖をズボンの裾にねじ込んで部屋から出る。

「あら？　どこに行くのかしら？　お兄様（仮）」

部屋を出るときらびやかなドレスを着たイザリーが腕を組んで挑発するように笑いながらルストを見下すように見てくる。当たり前だ。このハルケギニアにおいての貴族社会はメイジの力量によって変わる。トライアングル以上になれば出世街道まっしぐらだ。故にルストは未だにドットでイザリーは既にラインなのだから、上下関係も決まってくる訳である。まあ、大体のメイジはドットかラインで生涯を終える事が多いのだけれど。

「……君には関係無やろ？　俺はもう、君の兄やないんやから」

ルストはイザリーを一瞥すると、一瞬悲しそうな表情をしてからそう言ってそそくさとその場を立ち去った。

ルストとしてはかなり気まずかっただけなのだ。

そんなルストを呆然と眺めてからイザリーは

「もう、お兄様のばか」

イザリーは組んでいた腕を外してがっくりとしながらそう呟いた。

実はイザリー、まだ兄に甘えたいのだが、何分あの父や母とよく一緒にいるため、ルストに対しての態度がこれが当然なんだと思い込んで高飛車な態度をとっているだけなのだ。

実際はまだ十歳の少女――見ようによっては幼女――なのである。

「はあ、どうしたらまた仲良くなれるのかなぁ？」

イザリーはため息をつきながら自室へと戻って行く。これから家庭教師が来るからである。

イザリーの憂鬱は続くのだった。

所変わってルストは屋敷を出ようとしてダリスとダリアに呼び止められている。
「坊ちゃん。今日の夕食はいかがしますか？」
「ダリア。俺はもう坊ちゃんやないよ？」
夕飯をどうするか聞くために。当然あの両親がルストのために豪華な料理を振るうどころか同じ食卓に居る事自体を許さない徹底振りである。そのため、ダリアが使用人やメイド用の賄い品を振舞っているのである。
ちなみにルストも手伝う事もある。紛いなりにも今は平民扱いなのだから。
「私にとって坊ちゃんはいつまでも坊ちゃんですよ」
「まあ、その心遣いは嬉しいけどなぁ？　あ。後、夕食は皆に任せるわ。んじゃ、行ってきます」
ルストはハハッと苦笑いして厨房にある勝手口から出て行く。正面玄関から出ると目立つためにいつもここから外に出るのだ。
それからズボンから杖を引っ張り出して呪文（ルーン）を唱える
それは、風系統のフライという自身を宙へ浮かべる魔法をかけて目の前の城壁のような塀（へい）を飛び越えるために飛び立つ。
土のドット故に不安定で長時間は無理だが、この塀を飛び越えるぐらいなら可能だ。
塀を飛び越えた後、そのまま道なりに歩いていくと、村から少し離れている森へと歩いて行く。

森に入ると、うっすらと苔（こけ）が生（お）い茂（しげ）っていたり、チチチと鳥達の囀（さえず）りが聞こえる。
この場所は京都の山奥にある関西呪術協会の周りにある森の中にある、兄と一緒に修行した場所を彷彿（ほうふつ）とさせるので、エンドリス領内ではルストのお気に入りの場所だ。
この場で思い出すのは不愉快な現両親ではなく、かつて共に修行した兄の姿。

追いついたと思っても、自分の予想を遥かに超える速さで上達して自分の遥か先を歩んだ兄の背中を思い出す。

ルスト自身、自分でも酷いブラコンだとは思ってはいる。だが、実際は違うのだ。

兄は強大過ぎたために、ルストは――いや、影春はいつかは越えてやろうと目標にしていたのだ。

故にこれはブラコンでは無く、同じ剣士としての憧れなのであり、むしろメジャーリーガーに憧れる野球少年と同じである。

それからしばらく森の自然を堪能(たんのう)しつつ歩いて行くと、切り開いたような広い場所に着く。

こここそがルストの鍛練場なのである。

ルストはそのまま中央まで歩いて行き、ズボンから杖を引っ張り出してから正座する。所謂、瞑想と言う奴だ。

切り開いた場所の中央にどっこいせと腰を下ろして座禅を組む。

目を閉じて己の神経を極限まで研ぎ澄まし、耳で音を、鼻で臭いを、肌で気配を感じとり、自身と世界を同化させていき――

(なんや……?)

突如、異物を感じとって止めた。

ルストはカッと目を見開いて、立ち上がり、杖を取り出して辺りを警戒する。

先程まで鳥等の生命で賑やかだった音が途絶えているのだ。

(これは何かある……やないな、何か森の動物達を脅(おびや)かすようなもんがおると考えた方がええな)

ルストはそう結論付けて、目を細くして、先程の瞑想と同じくらい神経を研ぎ澄ます。ただし、辺りを探るように。

杖を構えたまま微動だにしない。してはいけない。

もし、この現状を作ったのが敵と呼べる存在ならば、どこから来るかわからないこの状況で隙を作ればそれはただの自殺行為にしかならない。

そんなルストに痺れを切らしたのか、ズシッズシッといかにも重そうな足音を響かせて
「ブホッ！　ブホッ！」
何か臭いを嗅いでいる脂肪か筋肉かわからないが、丸々と太らせた人型であり人では無い何かが姿を現す。

それはオーク鬼と呼ばれる存在。その名の通りの強さでオーク鬼は一匹で人間の戦士五人分の戦力を持つと言われている魔物である――にも関わらず、少数で群れを作るとされている。
故にそれが六匹、ルストの前に敵として現れた。

第三話　その男、劣等（後書き）

やっと小説らしくなって来たかな？特に後半。

まあ、こんな感じでグダグダやって行きますよ。

第四話　夢（前書き）

今回はグダグダと書き過ぎましたね。

全然、進んでないですよ（苦笑）

第四話　夢

ルストの目の前には二メートル――二メイルほどの身長と人間の五倍の体重、まるで豚を無理矢理人型にさせた魔物――否、亜人が六体ブホブホと、何やら興奮したように佇んでいる。

（オーク鬼って呼ばれとる奴やったっか？　確か前に本で読んだ事があるで…。手だれの戦士五人に匹敵する戦闘力を持っており、知能は低いが鬼の名の通りに人を喰らう亜人って種族やったな）

ルストはオーク鬼について思い出しながらジリジリと摺り足でオーク鬼との距離を離す。

正直、ドットのルストでは話にならない程の相手である。気が使えればまた違っただろうが、未だ気は満足に使えていないため、少しどころかかなりピンチである。

（さて、それが六匹かいな。今の俺にゃあちょいと荷が重いかなぁ……。でもまあ、やらなあかんのかもしれへんけどな。弱点ぐらいあるやろ。逃げられへんかったら様子見やな）

勝てないとわかっていながらも、ルストの中ではこの現状をどうやって切り抜ける、あわよくば倒せるかを思案する。

ルストが使える魔法はコモン・マジック全般に土系統の基本である錬金にアース・ハンド、クリエイト・ゴーレムの三つである。他の系統のも使えるが、実戦で使える物でもないため、今はその事を考えていない。

ちなみに錬金は物質を作り換える魔法と言うべきか、土で鉄を作ったり、土や石の形状を変えたりと応用性のきく魔法のような感じで、石から剣を作りだす。科学的に言うと原子配列変換をしているのだが、ルストはそんな原理を知らない。現代っ子なのに。

アース・ハンドは名前の通りの魔法で、地面に土でできた手を生やして対象の足を掴んで動きをとめる、といった魔法である。

クリエイト・ゴーレムは簡単に言えばゴーレムを作り出す魔法である。ゴーレムはＲＰＧに出てくるアレとほぼ同じと思ってもらっていい。

ゴーレムには手動操作（マニュアル）、自動操作（オート）、半自動操作（セミオート）の三つがあるが、ルストは半自動である。命令をすればそれに従って動くが、自分で動かす事もできる。

それらをどう駆使して、目の前の敵達を打倒するかを考えたが良い案が浮かばない。

当たり前だ。ルスト――影春はもともとあれこれ考えて計算して罠をはったりする戦略家タイプの人種では無く、剣を持って真っ先に真っ向から敵陣に斬り込む武士（もののふ）タイプなのだから。

十二歳の子供が、肥満体とは言えど2メイルもある巨躯（きょく）に逃げ延びれる訳が無い。しかし勝てる要素もない。

だからと言って諦めるルストではなく、とりあえず――

「イル・アース・デル」

錬金の呪文（ルーン）を唱えて一振りの刀――ドット故に粗悪品だが――を錬金して構える。

刀だけで決して勝てはしないが、それでも――――

「諦めきれるかいなぁ！！」

ルストはそう叫んでオーク鬼に向かって全速力で駆け出すと、当たり前だがオーク鬼がこちらに気づいて振り向く。

粗悪品の刀に気休め程度の気を纏わせる事でやっと普通の剣の耐久度と切れ味を持った刀でオーク鬼に斬りかかるが、オーク鬼はそれを自身が持つ無骨な棍棒で受け止める。

「くっ…！？」

ルストが棍棒すら断ち切れない事に憎々しげに顔を顰（しか）める。

「っ…！？」

他のオークが揃って動き出し、ルストを囲もうとしたが、なけなしの気を足に集中して地を蹴って瞬動と呼ばれる範囲7メイル先ま

で直線的に移動できる歩法術で後方に下がって距離をとる。
（まさかあの程度の棍棒すら斬られへんとは……めっちゃ腕落ちとんなぁ。にしても瞬動連発したら逃げ切れんちゃうか？思ったより動きとろいし……でも、ここで逃げたらあの人達はともかく領の村人達に迷惑がかかるやろうし、やっぱやらなアカンかな、さて、今の俺がどこまでやれるか、やな）
ルストは右手に刀、左手に杖を持って構えてそう思う。
なんだかんだ言ってルストは今の力で自分がどれだけ通用するのか知りたいのだ。
「俺の剣が通用せぇへんなら、やっぱ魔法しかないやんなっ！」
ルストは左手の杖を振って錬金を唱える。
「ブヒァ！？」
ルストが使った錬金でできた地面から生える槍がオーク鬼の胸を貫く。
咄嗟（とっさ）に思いついたのは、前世で珍しい土属性の魔法使いと戦った事があるからそれを真似ただけに過ぎない。
ここの魔法はイメージが具体的であればあるほど魔法の精度があがる。真似た魔法は障壁突破石の槍（ト・ディコス・デ［illegible］ネ・）という。まあ、ルストは呪文や名前は覚えていないが、イメージだけは鮮明に覚えている。
それをオーク鬼に放っただけだ。そして放たれたオーク鬼は胸に石の槍が突き刺さったまま絶命する。
「「「「「「ブオォオォオォオォオォオォオォオォオッ！！！」」」」」」
それを見たオーク鬼達が一斉に怒り出してこの辺り一帯が殺気で充満する。
ピリピリした雰囲気がルストに襲い掛かるが、ルストが感じたのは恐怖ではなかった。
（懐かしいわぁ。この殺気、陰鬱とした空気、神経を研ぎ澄まさずにはおられへんこの雰囲気。これぞまさしく戦場や…）
ルストは歯を剥き出しにして笑う。ああ、懐かしの戦場！生前の

青山影春だった時のことを思い出してルストはただ笑う。
ただ笑っていたルストにオーク鬼達が一斉に襲い掛かる。残り五匹のオーク鬼達が。
一番前にいたオーク鬼がルストへと棍棒を振り下ろすが、ルストはそれを一瞥して軌道を詠み、二歩右に移動しただけで避ける。しかし、棍棒を振り下ろした風圧でルストの髪が乱れる。
がら空きになってる胴体に右下から左上へと斜めに刀を振るうと、左脇腹から右肩を切り裂くつもりが心臓に届く前に刀がパキンッっと折れる。
「イル・アース・デル」
間髪いれずに錬金の呪文(ルーン)を唱えて石の槍作り出して目の前のオークを貫いて絶命させる。残り四匹。
殺した余韻(よいん)に浸らせること無く他のオーク鬼が接近して拳を振るうが、ルストは瞬動――足に気を纏って七メートル程度の距離を直線で高速移動する歩法術である――を使い、すでにその場にはいない。
距離をとると同時に更に錬金を唱えて再び刀を作り出す。しかしそれは先程のような粗悪品の刀ではなく、どこまでも生前に使っていた愛刀をイメージしたもの。戦場の空気を思い出して鮮明に自分が使っていた刀を思い出せたからである。
そこまでしたところで背後に気配を感じてできたてホヤホヤの刀をおもいっきり振るうと、棍棒を振り下ろしていたオーク鬼を棍棒ごと断ち斬り、おびただしい程の量の臭い血がルストへと降りかかり、その身を血に染めながらも嬉しそうに笑う。残り三匹。
刀を振り切った状態で、刀を持ってる手の逆方向にオーク鬼の棍棒が真横に薙ぎ払われる。
「グゥッ……！！？」
ルストは避けれないと判断して咄嗟に左腕にありったけの気を込めて防ぐが、気を纏っているとは言え素体は十二歳の子供。左腕からゴキャッと骨が砕ける音がして顔を顰(しか)める。

「カハッ……！？」

そのまま力任せに棍棒を振るわれて吹き飛ばされ、ルストは背中から木にぶち当たる。

背中に走る激痛を無理矢理抑え込んで、現状を確認する。

左腕は本来なら有り得ない方へとひん曲がっており、更に肋骨の方にも鈍い痛みが走ることから何本かイったのだろう。だが、気を纏っていなければ即死で挽肉（ひきにく）決定だった。

しかも残念な事に左手に持っていた杖を先程の一撃で落としてしまっている。

（魔法はもう無理かいな……。後は右手にある一本の剣で片付けるしかあらへんなぁ、畜生め）

そうルストが思考してる間にもオーク鬼がブヒヒと笑いながらこちらに近づいてくる。

それを確認したルストはゆっくりと背中を木に預けたまま立ち上がる。ルストが思い出すのは生前最後の戦い。左腕と左足を失って尚戦い抜いて死んだ戦い。

あの時よりも明らかに自分の能力も下がり、敵の数も少な過ぎるが状況があの時と酷似していた。

左腕を失っても、この右手にある刀は手放さない。それが微妙な剣だとしても武士の誇りであり、剣士の魂だからだ。

（なんて言ったっけ？　既視感（デジャブ）やったっけか？またこんなとこで死ぬんか？　俺はまだやりたい事があるんや。例えば、世界を……見て回……る……）

そこまで考えて――――いや、思い出して目を見開く。

（そうや……、なんで忘れてたんや……。俺には夢があったんや。世界を旅するって夢があったんやないか！）

オーク鬼がゆっくりと迫る中、ルストは影春だった時の夢を思い出す。憧れた兄のように広い世界へと飛び出したい。そう思って前世は全力で努力していた。

だが、影春は死に、ルストとなってこの夢は叶えられないと思っ

た。いや、思い込んだ。

（考えてみりゃ、地球や魔法世界（ムンドゥス・マギクス）やなくたって、ハルケギニアって世界がここにはあるやんか。俺は世界を旅してみたい。世界は違くても俺は――）

「ブォオォォォォォォォォォォォォォッ！！！」

ルストはいつの間にか目の前に立っているオーク鬼が棍棒を振り上げながら鳴き声を発した事で思考を中断する。

しかし、その光景をルストは冷静な目で見ている。ルストには非常に遅く、緩慢過ぎるように見えた。

「神鳴流……」

その呟きは小さくとも何故かこの辺りに響き渡る。

「斬岩剣っ！！」

オーク鬼が棍棒を振り下ろすよりも前に岩をも切り裂く斬撃がオーク鬼とその棍棒を真下から襲い、棍棒ごとオーク鬼を真っ二つに断ち切る。

それぞれ両側にバタリと倒れ、その切り口から噴水のように血が噴出してルストはそれを全身に浴びる。後、二匹。

「そうやんなぁ、世界に出るんやったらこいつ等程度に躓（つまづ）いてる場合とちゃうやんなぁ……？」

ルストは呟きながらダラリと両腕を下げて、やや前屈姿勢なために前髪でその瞳が見えないが神鳴流独特の白黒逆転状態なために不気味に目を光らせながら、ゆっくりと残りのオーク鬼へと向かって歩く。

しかもその体からは微量ではなく、生前とほぼ同量の気がゴォッと溢れ出している。

忘れていた生前の夢、情熱。これが――目標があったからこそ影春はその強さを手に入れた。

気は己の感情次第で強くも弱くもなる。ルストはあの家に生まれてからは両親の愚痴を言うだけで情熱も夢も無く、ただ生きていた。これでは気も微量なのも当然である。

だが、ルストはそれらを取り戻した。故に気が生前とほぼ同等になったのである。

「あの人らも、自ら貴族って言う鎖を俺から断ち切ってくれた訳やし？　夢を叶えるんやったらこれ程絶好なチャンスはないよなぁ……」

ルストは右手の刀を地面に突き刺して顔についた返り血を拭い、更に前髪を掻き上げると、髪についた血のおかげでオールバックの状態で固定される。

「これでよう見えるわ。さあ、来いや、見た目通り豚のような悲鳴を上げさせたらぁな！！」

突き刺した刀を引っこ抜いて切っ先を残りのオーク鬼に向けながらニヤッと笑う。

それを見たオーク鬼達が二匹同時にルストへと重たい体を無理に早く動かしてズシンズシンと足音を響かせながら走ってくる。

「世界にはおまえらよりも強い存在がうようよおるし、おもろい奴や凄い奴、ムカつく奴かっておるかもしれへん。せやから、ホンマにおまえら程度に苦戦してる暇はないんよ」

ルストが刀を構えながらそう呟いてる間にオーク鬼達がそれぞれルストの斜め前までやってきて棍棒を振り上げる。

「神鳴流……」

その光景を見ながらもルストはゆったりとした動作で刀を振りかぶる。

「百花繚乱っ！！」

本来は気を直線状に放って吹っ飛ばす技だが、ルスト――影春は違う。いや、基本は一緒だが繰り出す速度が並みの神鳴流剣士の比ではないのだ。

その速さ、刹那と呼べる時間に百度殺せる速さでその技を繰り出して連撃を行い、二匹のオーク鬼を細切れの肉片へと変えて行く。

この技があったからこそ生前、万の鬼の軍勢と渡り合える事ができたのだ。神鳴流・百花繚乱が影春の最も得意な技である。

ルストがバッと指揮者のように刀を真横に振るって百の斬撃は止まった。オーク鬼がいた場所には大量の血が小さな池を作っていた。

「って、腕キッツゥ～！　やっぱ筋力足りへんな。ガキの筋力じゃ、己の力も満足に使われへんのかいな……。体力的にもキツイし、こりゃ本格的に鍛え直さなアカンな」

今の自分の体の貧弱さを嘆き。明日は筋肉痛やな、と呟いてため息を吐いた。

すると、今まで振るっていた刀が役目を終えたと言わんばかりにパキンと折れた。実際はルストの技に耐え切れなくなっただけだが。

「とりあえず今日はもう帰ろか。折れた左腕の治療もせなアカンし」

折れた刀をその場に捨てて、地面に転がっていた自分の杖を回収し、水の秘薬残ってたっけかな?という呟きと共に節々が痛む身体を引きずりながら自分が作った惨殺空間を後にした。

第四話　夢（後書き）

戦闘だけで一話使うって……

しかも今までで一番長いですし、なんだか腑に落ちないなぁ。

第五話　旅立ち（前書き）

なんかポンポン話が進み過ぎているような気がするようなしないような？

第五話　旅立ち

ルストが屋敷に帰ると当たり前だが騒ぎになった。
なんせ、オーク鬼の返り血のせいで全身血だらけな上に酷い臭いにおいがプンプン――どうやらオーク鬼の体液は腐敗臭のような酷い臭いがするようだ――し、更に左腕が変な方に曲がったりしてるどころかプラプラしてるのだ、ダリスとリンダ以外の使用人達も大騒ぎである。
やっぱ、オーク鬼の血の臭いを落としてから帰ってくるべきだったか、と今更ながらに後悔しているが、体中の痛みで余裕もないのも事実である。
それからダリスに手当てとして、ルストの自室に置いてあった水の秘薬を使って骨折した左腕を治療してもらい、井戸から汲んできた水で返り血を落としてくれた。
「さぁ、坊ちゃん。何があったんですか？」
「うーん、なんと言ったらええか……」
ダリスはすべての作業を終え、ルストをルスト自身のベッドに寝かしてからなんでこんな大怪我をしたのか訳を聞くが、ルストは言いづらそうに言いよどむ。
「……えっと、簡単に言えばな？　オーク鬼に襲われたんよ」
「あのオーク鬼にですか！？」
ルストの訳を聞いてダリスは驚愕する。
当たり前だ。力あるメイジならともかく、力ない平民が出会えばまず殺されるか食われるからだ。ダリスも力ない平民に位置するために出会えば間違いなく――そう考えて顔を青くする。
「……よく生きてましたね、坊ちゃん」
「まあな。よく生きてたもんやと思うよ」
ルストは神鳴流や実は剣を扱えるんです、ましてや生前の記憶があるんですよ、なんて言ったら色々と面倒なので逃げてきたことに

――――
「じゃあ、なんで返り血なんて浴びてたんです？」
「え〝……そ、それは……」
できる訳がなかった。
（やっべー。なんて言えばええやろ？　実は自分には隠された力があって、それが覚醒したんです……ってアホか！？　有り得へんやろ！？　……いや、ある意味その通りやけどさ。……うーん、通りかかったメイジが助けてくれた……で、ええかな？俺みたいに勘当同然の貴族が旅してたり賞金稼ぎみたいな生活してる奴もおるやろし）
「どうかしたんですか？　坊ちゃん」
「ああ！　いや、別に！　何も！　助けてくれたメイジの事を思い出してんよ」
色々考えた結果、ルストは平然と嘘をつくことにした。心配してくれた皆に申し訳ないが。
「……助けてくれたメイジ、ですか？」
「うん。風系統のメイジやったよ？　オーク鬼をスパって切り裂いとったし」
少し訝しげにしてたダリスだったが、ルストが咄嗟（とっさ）に思いついた事を言い放つ。
自分でもよう思いついた、と心の中で自画自賛するルスト。

確かに風メイジには風の刃で切り裂く魔法がある。名をエア・カッターと言う。
風メイジは汎用性が高いため、数多くの魔法が存在する。
例えば風を不可視のまま質量を持たせて殴り飛ばすエア・ハンマーや、遠くのモノを見る遠見、ルストも使った空を飛ぶ魔法のフライ等、攻撃も補助使えるのが風系統だ。
故に、風こそが四系統最強！と提唱（ていしょう）する風系統至上主義みたいなメイジも存在したりする。

「どんな方だったんですか？」
「えっとなー……マントというかローブを着とって、フードもすっぽりかぶっとったから口元の髭しかみえんかったわ」
更に質問してくるダリスにルストは多少考えながらもはきはきと答える。
このルスト、よくもまあこれだけ嘘を並べ立てられるものである。
「なるほど。それはよかったですね、坊ちゃん」
「う〝……うん」
だから今度こそダリスはルストの言葉を信じた。
ダリスのやんわりと邪気のない笑みを見て、非常に後ろめたさ全開になるルスト。しかし言ったところで信じられない話なのも事実なので、その後ろめたさをぐっと堪える。
「では、何かあったら御呼びください。それまでは安静にしていてくださいね？」
ダリスはそう言ってから一礼し、ルストの部屋を出て行った。
（そういえば俺が旅に出たらダリスやリンダと別れなアカンのか。それはちと寂しいかなぁ）
ルストは自分の部屋の天井を見ながら漠然とそう思った。
それから戦いで疲労が溜まっていたのか、段々と瞼（まぶた）が重くなり、ルストはそれに抗う事もせずに眠気に身を任せた。

「坊ちゃんの様子はどうだい？」
「大丈夫。確かに左腕の骨折は酷かったけど、水の秘薬のおかげで三日あれば完治すると思う」
ダリスはルストの部屋から出ると、廊下で待ち構えていたリンダにルストの容態を聞かれて正直に答える。
「それはよかった……。他には何か言ってたかい？」
「通りすがりの風メイジに助けられたって言ってたけど……」
リンダが心底安心したようにホッと胸を撫で下ろしてから更にダ

リスに聞き、ダリスはそれに対して少し考えるそぶりをしながら呟く。

「言ってたけど？」

「嘘だな。嘘をつく時の右上を見る癖が出てたし」

リンダは先を促し、ダリスはそれに自信をもって答える。

実はルストが咄嗟についた嘘はとっくに看破されていたようだった。

それは当然で、ダリスはリンダと一緒にルストが生まれた時からずっと世話をしてきたのである。癖の一つや二つ、十二年一緒にいて気づかない方がおかしい。

「何か言いたくない……言えない何かがあるのかもしれないねぇ？」

「だな。それなら俺達は坊ちゃんが自ら話すまで待っているだけさ」

リンダが薄く笑ってダリスに言うと、ダリスはそれに頷いてニカッと笑う。

それから二人は一緒に歩き出し、夕飯を食べるために厨房へと歩き出した。

「リンダ、結婚しよう。俺はバツイチでも大丈夫」

「バカ言ってんじゃないよ」

と、まんざらでもないような表情をして軽口を叩き合いながら――

――――

アレから一年が経ち、相変わらずな生活を送っていたが、ルストはどこか変わった。

厳密には変わったのではなく戻った、なのだが今のルストは両親の事など気にならないような素振りで過ごし、日に日に愚痴が減っていった。環境を変えたければまずは自分を変えろとはよく言ったものである。

ルストは自分の夢――世界を旅するための下準備として森の中をランニングして体力作りから筋トレ、そして使えはしないだろうが全系統の呪文を暗記した。何故なら、もし旅の途中で出会ったメイ

ジが敵対した場合、相手が唱えている呪文（ルーン）を知ってるか否かで生存率が変わってくるからである。

それから、あのオーク鬼との戦いからルストは晴れてドットからラインになっていた。それはあの時昔の愛剣をイメージしてできた剣を見ればわかることだが。

だが、この事を両親には言わない。言ったからといって何かが変わるとは思えないからだ。

ルストは既に社会的に死んだ身であり、今更ラインになったと言ったところで生き返る訳でもなく、二歳下の妹と同じ舞台に立っただけで親が再び相手にしてくれるとは思わなかったのもある。

だが、そんな事よりもルストはもっと重大な壁にぶち当たっていた。

それはダリスとリンダである。別れるのは寂しいのは当たり前だが、あの二人を説得するのも一苦労だろう。

どう説得するか、ひいてはどう話を切り出すかを考えていた。

「坊ちゃん、昼食ですよ」

が、リンダの呼びかけに思考を中断して、昼食を食べるために本――魔導書を机の上に閉じて席を立ち、リンダに連れられて厨房へと向かった。

厨房にはリンダやダリスだけでなく、コックや使用人達が集まって昼食を食べる。平民はメイジと違って力が無い代わりに結束力は強いのだ。それでもメイジには逆らえないが。

「今日はビーフシチューだからね」

「ありがとうな、リンダ」

それから食べる準備をしたらブリミルへの祈りを奉げてから食べ始める。このハルケギニアは貴族だろうが平民だろうが関係無くブリミル教徒だからだ。だがもちろん身分による格差は存在するが。

食事中は普通にしゃべりながら和気藹々（わきあいあい）と過ごす。別に貴族のようなマナーなんてものは平民には必要ないからだ。

ルストは一応マナーは身につけてはいるが、郷に入れば郷に従えという言葉の通りにルストもその雰囲気に既に呑まれている。影春の時にもこんな食事をしていたから、それはとても自然だった。
「で、坊ちゃん。何か言いたい事でもあるんじゃないですかい？」
「え……？」
しかしその和やかな雰囲気はダリスの一言で粉々に砕け散り、ルストは素っ頓狂な声を上げるしかない。
「いや、坊ちゃんがこの頃何か言いたそうにしてましたからね」
「……」
ダリスの言葉に沈黙することしかできないルスト。だが――――
（これはチャンスや。アカンって言われても、生前からずっと追ってた夢なんや！　いや、一年前まで忘れてたけど）
ルストはバッと顔を上げて決意を固めた。
「実は……」
そしてここにいる皆に話す。
こんな自分にもあの時――オーク鬼に襲われた時にそんな夢ができた――正確には思い出した――事。
その夢は世界を見て回りたい、この世界はどんな物があるのか？どんな奴がいるのか？世界には可能性があるから、それを見て回りたい事。自分の想いを皆に伝えた。
「なるほど、男の子らしい良い夢ですね、坊ちゃん」
ルストの夢の感想にダリスが代表して応える。他の皆も同じ考えなのか、優しく微笑んでいる。
「自分の道は自分で決める。それが坊ちゃんの選んだ道なら誰も文句はありませんよ。俺だって、リンダだって、ジョネスにパーシー、他の皆だって悩んで自分で決めた道を歩いてるんだから、それを止めたり変えたりする事は俺達にはできないです」
ダリスは他の皆の顔を見渡しながら、微笑んで言う。
そう、いつだってどんな時だってルストの傍には彼らがいた。ルストの考えをちゃんと受け止め、そして導いてくれる存在が。

そして今も尚、ルストの想いをちゃんと受け止めた上で笑って背中を押してくれようとしている。それがルストにとってとても嬉しかった。

「じゃあ、ルスト坊ちゃんの旅立ちを祝してパーティーでもしましょうぜ？」

「良いですね！　やりましょうよ！」

そんな中、ジョネスと呼ばれたコックが提案すると、パーシーがパンッと手を叩いてその提案に乗る。

それからあれよあれよとパーティーがする事になった。

そんな中……

「ありがとう」

ルストの感謝の言葉がこの厨房に響き渡る。ルストにとっての親はこの人達なんだと再認識した。

「あり、がとう……」

嬉しくて涙を流しながらの再びの感謝に、厨房の皆がへへへと笑う。

「男がいちいち泣いちゃいけませんぜ？」

「そうそう、嬉しいのはわかりますけどね？」

嬉し涙を流しているルストの肩をバンバン叩いて言うジョネスとパーシー。

そんな二人にルストは涙を服の裾（すそ）で拭（ぬぐ）う

「……そうやね。これ程嬉しい事はないわ」

ルスト――いや、影春は世界を旅したいという考えそのものを関西呪術協会に封殺され、誰も認めてはくれなかった。

だが、ここには肯定するどころか背中まで押してくれる。それが嬉しいから、とてつもなく嬉しいからルストは今までで最高の笑顔を浮かべた。

その日の夜、ルストの旅立ちパーティーが開催された。

平民故にそれほど豪華ではない。だが、そこに身分は無く、皆が皆、この宴を楽しんでいる。

こうして、ルストのエンドリス家での最後の夜が過ぎていった。

その翌日、早朝から平民の格好をしたルストと、今手が空いている者達に育ての親のダリスとリンダが見送りに来てくれていた。

ちなみに旅立ちの準備は昨日のパーティーの前に終えている。

「お嬢様にはお別れの言葉を告げたのですか？」

「いや。イザリーは俺の事を兄とは思ってへんし、別に良いやろ」

「……作用ですか」

ダリスが聞いてきたために、ルストは苦笑いしながら答える。

「これ以上長引かせては別れが辛くなります、いってらっしゃいませ、坊ちゃん」

ダリスが代表して皆の前に立ち、頭を下げて礼をする。その目からは別れを惜しむ涙が流れている。

「ああ、行って来るわ。……世話んなったな、皆」

ルストはその意志を汲み取ってザッと翻(ひるがえ)して歩き出す。ちゃんと金もある。昨日部屋にあるもう使わないだろう物を売ったからだ。当分は食って生けるだろう。

（さあ、世界はこの俺に何を見せてくれるんやろなぁ？）

まだ見ぬ世界に想いを膨らませながら、平坦な道を歩いて行く。

（世界は違うけど、それでもやっと同じ舞台に立てたわ。なぁ？兄上）

未だ世界を旅しているのかどうかはわからないが、かつての兄を想い、その足を進める。

これからルストがどんな道を進むのかは誰も知らない。

何故なら旅は今始まったばかりなのだから。

第五話　旅立ち（後書き）

今回は最長記録更新ですね。
ホントは旅立った後のイザリーの反応も書きたかったですが、あえてやめときました。
これでやっとタイトル通りに奔放になりましたよ。

第六話　相棒との出会い（前書き）

毎回ですが、何やらグダグダしてるような……。
指摘があれば言ってくださいな。

第六話　相棒との出会い

ルストは薄っすらと暗い森の中を歩いていた。
まずはどこに行こうか？　やっぱ自国のトリステイン？　実力主義のゲルマニア？宗教国家のロマリア？　大国のガリア？　いや、浮遊国のアルビオンなんていいなぁと、ルストは期待を膨らませて考えて――――
（うーん。やっぱルストレオはマズイよなぁ？　やっぱ今まで通りルスト？　でも前世からの夢だから影春？　いや、でもハルケギニア語で影春て言いにくいねんなぁ、キャゲハルーンみたいな発音になってまうし…あえて前の名前を英語にしてみるとか？　英語ならまだ発音しやすいし。なら影春・青山（シャドウスプヴルダマウンテン）？　アホか、長過ぎやっちゅーねん）
いなかった。
自分がこれから名乗る名前という少しズレた事を考えながら適当に道を歩いて行く。
ルストは目的地なんてものは決めておらず、とりあえずどこでもいいから気ままに行こうと楽観的に考えていた。
（まあ、名前は置いといてや。にしてもこの森はなんか暗くあらへん？　絶対ここって盗賊とか潜んでそうやん。まあ、俺なら襲われても大丈夫やけど……）
ルストは頭をポリポリ掻きながら今更な事を木々のせいで少ししか射さない光を見て考える。
「ッ――――――」
その時、タイミングを計ったかのように男――おそらく中年から老人の悲鳴が響き渡る。
ルストは、やれやれ初っ端から騒動かいな、と思いながらも悲鳴が聞こえた方へと走り出した。

馬車――幌馬車（ほろばしゃ）に色々と荷物を積み、それを操作している御者は小太りに側頭部と後頭部は毛が生えているのに頭頂部には一切毛が生えていない老人で、ただの商人だ。

ちなみに幌馬車とは幌を張って、ある程度雨風をしのげるようになっている馬車であり、荷馬車にカテゴライズされる。

この先にある小さな町で祭りがあり、その祭りに参加するためにその老人はこの薄暗い森を抜けなければならなかった。

もともとこの森は薄暗いため、当然ながら盗賊――よりも夜盗に狙われやすい。

しかも祭りがあるとわかっているのなら祭りのために商人が集まってくるため、そこを襲えばうまく行けばがっぽり儲けられる。

だが、商人ならそれは承知の上なので、大概の商人は護衛を雇うものなのだが、この老人は雇っていなかった。

故に――――

「おい、爺さんよぉー？　荷物置いて消えれば命だけは助けてやんぜぇー？」

盗賊に襲われていた。

盗賊の男はナイフ――よりも長いし一回り大きいため、ダガーだと言える物を商人の老人に切っ先を向けていた。

それに老人はたじたじである。

老人が何故護衛を雇わなかったのか、それは――――

（ま、マズイ……。まさかホントに盗賊に襲われるとはのぅ……襲われる筈がないと高を括って、護衛をケチるんじゃなかったわい……）

ただケチなだけであった。

見た目的にも動揺し、内心も後悔でいっぱいいっぱいの老人は、ダガーを突きつけられてガタガタ震えるしかなかった。

しかし、その恐慌状態からかはわからないが、老人の脳裏に選択肢が浮かび上がる。

1、まさかの内なる力が発動！盗賊達をなぎ払う。

2、誰かが主人公（ヒーロー）のように現れて盗賊達から救ってくれる。

3、現実は残酷である。盗賊達に殺される。

4、現実は残酷だが受け入れ、積荷を放り出して逃げる。その場合、すぐに野たれ死ぬ。

といった具合の選択肢な訳だが――

（わしなんかに内なる力なんざある訳がない！　二番じゃ！　二番！）

非常に他力本願な老人だった。しかも三番と四番を無かった事にしている。

「ハッ！　度胸あるなぁ、爺さん。じゃあ、死んどけ！」

「嫌じゃあー！？　わしはまだ死にとう無いわい！！？」

「じゃあ、さっさと積荷をよこさねぇか！！」

ダガーを持った盗賊が老人の態度を鼻で笑い、そのダガーを少し引いて一気に突き出すが、老人のいきなりの絶叫に思わずピタリと動きを止めてしまう。

そんなダガーの男の代わりに傍にいた斧を持った男が老人に怒鳴る。

「この積荷を渡したら、わしが食っていけなくなる！　どちらにしろ死んでしまうわい！」

「ならここで死ねよっ！！」

斧の男に老人が反論すると、斧の男が老人に近づいて斧を振り上げる。

しかし、この老人との会話をした時間が、盗賊達の失敗だった。

いきなりヒュンッと風を切る音がしたと思ったら、斧の男が振り上げた腕にハルケギニアでは見たこともない形のナイフ――クナイがぶすりと腕に突き刺さり、斧を取り落としてしまう。

その一瞬で平民の格好をした少年が斧の男と老人の間に割って入

り、右手に持つレイピアのような剣――レイピアにしては長過ぎるが――を目にも留まらぬ速さで腕を振るって斧の男の首を胴体から斬り離す。

その光景を見ながら老人は――――

（やっぱ二番じゃったか。てか、わし凄くね？）

と、うんうん頷きながらそう思っていた。助けが来た瞬間余裕が戻った老人だった。

ルストは悲鳴が聞こえた方へと向かって走って行くと、数人――気配からして五人に囲まれている老人がいた。

それを見たルストは、咄嗟に杖を引き抜いて地面にあった手ごろな大きさの石を蹴り上げて錬金を唱えると、その石はクナイと呼ばれる日本の投げナイフのような物に姿を変え、それをさっと杖を持っていない方の手で掴んでそのまま投擲（とうてき）する。

すると、斧を振りかぶっていた男の手に突き刺さり、斧を手から離して地面にガランと落ちる。

そのままルストは更に錬金を唱えてかつての愛刀を模した刀を作り出し、それをガッと力任せに掴み、同時に進行させていた気を足に溜め、瞬動を行（おこな）って一気に斧を持っていた男と老人の間に割って入り、勢いを殺さないまま刀を持った腕を振るって斧を持ってた男の首を斬りおとす。

ルスト自身、前世でそれなりに西洋魔法使いを殺した経験があり、更には最後の戦いでは関西呪術協会の同胞さえこの手にかけている。

今更人を殺したところで何も思い浮かばないし、思い浮かべる必要もない。

この剣は自分を貫き通す信念であればそれで良いのだから。

「ここは退いてくださいませんか？　でなければ、俺はあなた方を

斬らねばなりません」
「所詮はガキだろう？　殺れ」
ルストの提案にダガーの男は即座に却下して自分の部下に命令する。
すると、さっきの斧の男もそうだったが、ボロボロのひび割れた鎧を大体の相手が着込んでいる――おそらくどこかの敗残兵だったのだろう――が、自分の獲物――剣やらナイフやらハンマー等――持った奴らがジリジリと間を詰めて来る。
ルストはその光景を目を細めながら見てため息をつく。
「そうですか。……残念だ」
ルストは左手に持っていた杖を掲げる。
「んなっ!?　メイジだと!?」
「イル・アース・デル」
杖を見た盗賊が驚くのを尻目に、ルストは呪文を唱えると、ジリジリと歩み寄っていた三人の盗賊の眼前にボコッと地面が盛り上がった後、石の槍が生えて三人の胸部を貫く。
それぞれ驚愕の表情を浮かべたまま石の槍にもたれかかって事切れる。
ルストは再び錬金を唱えて石の槍を土に還すと、三人の死骸はいらなくなった人形を捨てたようにドサリと倒れこむ。
「テメェ！　よくも三人を!?」
その光景を見たダガーの男が激昂して斬りかかってくる。ルストはそれを己自身の刀で受け流し――――
「なら、退けばよかったんだ！」
そう言い返しながら刀を数回振るう。
その速度は全盛期より遥かに遅い。それは子供の筋力の限界なのだと悟ってわざと遅くしている。
確かに全盛期と同じ速さで振れない事は無いが、それをすれば確実に間接が外れたりその後に物凄い筋肉痛が襲い掛かるためだ。
だが、遥かに遅いと言ってもそれは全盛期と比べてだ。百花繚乱

を繰り出す速さが刹那と呼べる時間に百度なら、今は刹那に三十度が限界だ。

それでも常人には早過ぎるが。

「ガバッ……」

自分の体が一瞬で三回も斬られた事に目を見開いて内臓器官を斬られた事により口からドバッと血を吐き出しながらドサッと倒れ伏すダガーの男。

そして残りの残党達を一睨みすると、蜘蛛の巣を散らしたように散り散りに逃げていく。

ルストは逃げる敵をわざわざ追って斬り捨てるほど殺人狂ではないため、錬金を唱えて持っていた刀を土に還してから襲われていた老人に向き直った。

「大丈夫でしたか？」

ルストは前世でそうしたように敵であろうが味方であろうが初対面の年上に敬語で話す。

「これはこれはメイジ様！ありがとうございます」

平民は貴族――ひいてはメイジには逆らえないため、流石のこの老人も腰を低くして礼を言う。

そんな老人にルストは手で制して――

「いやいや、困った時はお互い様ですよ。それより大荷物ですね？何かあるんですか？」

「ええ、この先の町でちょっとした祭りがありましてね。出店を出そうかとお思いまして……」

笑いかけて老人に言うと、老人はゴマを擂るように手を擂り合わせながらへこへこ説明する。

「祭りかぁ」

ルストは祭りと聞いて腕を組んで考える。そういやこっちに来てから祭りに行った事ないなぁ、と。

「興味がおありでしたら乗っていきますか？助けてくれたお礼でさぁ」
「それは願ってもないことだ。お願いしても良いですか？」
「ええ、言いだしたのはわしですからの」
老人の提案にルストは心の中でガッツポーズをとる。
この薄暗い森を早く抜けたかったとか、歩くのが疲れたとかそんなものではなく、ただ、旅の途中で誰かにこうやって車に乗せてもらったりしたかったのである。
ここでは馬車だが、逆に旅してるって感じがしてルストはこっちの方が嬉しかったりする。
「ではでは乗ってくだせされ」
「お邪魔しまーす」
老人が馬車に乗って手綱を握ってルストに催促すると、ルストも老人の隣に乗り込み、ゆっくりと薄暗い森を抜けるために動き出した。

ルストは老人に今までどんな事があったのか――とある町で大儲けできたとか、また大損してしまったりとか、オーク鬼に襲われそうになったとか――と、世間話をしながら馬車に揺られる。
それでいつの間にかこれから行く町でどんな物を売るのかと言う話になり、ルストは老人に許可を貰って荷台の方に移って物色し始める。わからないのがあれば老人に聞くといった具合に。
「これは……！？」
そしてルストは運命的にもそれを見つけてしまった。それがルストを主と見定めたように。
「どうかしたかい？」
ルストの驚いた声を聞いて幌の外から老人の声がかかる。
それを手にしたルストは幌から出て老人にそれを見せる。それはハルケギニアの剣にしては細長く、反りのある一振りの剣――いや、

野太刀。
　なんの装飾もない無骨なそれは明らかに殺す事のみに特化し、斬ることも突く事も可能のハルケギニアにはまったく持ってない概念の剣。
　それは当然、ハルケギニアのには突きに特化したレイピアや、重さで斬るような片手剣（ブロードソード）や両手剣（バスターソード）のような物しかない。種類を上げればまだまだ一杯あるが。
「おお、これかい。友人の商人が見つけたんじゃがな、見てくれが長い割りに細いからすぐに折れそうとか客に言われてまったく売れなかった代物じゃよ。で、友人に押し付けられたんじゃが、やっぱりまったく売れんのじゃよ」
　老人の説明を聞いてルストはスルッと鞘（さや）から少し刃を抜いて見ただけでもわかる。
　これは名刀だと。
「気に入ったのかい？　やろうかいの？それ」
「え……？」
　見惚れたように刀身を見るルストに老人がやんわりと微笑みながら言うと。ルストは素っ頓狂な声を上げた。
「いやいや、頂けませんってこんな高価な物…」
「それ、それほど高価な物かいの？　どう見ても一度打ち合っただけでポキンと逝っちまいそうな剣だと思うんじゃが？」
　ルストはかつての自分の愛刀よりも下手すると高価な物かもしれない野太刀をあわあわしながら返そうとするが、当の老人はこの野太刀が高価な物とは気づいていない。
「ふむ、じゃあこの馬車を町まで護衛してくれんかの？　御代はそれで結構ですじゃ」
「……」
　老人の手綱を操りながらの言葉に絶句するルスト。
　いや、確かにそんな事でこの野太刀が手に入るのなら安過ぎる。
逆に安過ぎて悪いくらいだ。

だが、ルストにはそれ程の金は無い。いや、買えるかもしれないが、一気に旅の資金が底を尽きる事になるかもしれない。
しかし、この野太刀は欲しい。それは新しいおもちゃが欲しい駄々っ子並みに。
「えっと、わかりました」
故に答えた。欲しかったのだ、それ程までに。
「じゃあ、護衛頼みますぞ？メイジ様」
「はい！」
ルストは貰った野太刀を握りしめながら返事をした。
（まさか、あの脆そうな剣で護衛をしてくれるとは、安いもんじゃ。……にしても変な訛をするメイジ様じゃのう）
老人が内心でそんな事を思いながら手綱を操るが、実際はまったくもって逆なのだが。
そんなこんなでルストは町への道中、こんなに安く野太刀を譲ってくれた事に負い目を感じ、仕事だけは完璧にしようと神経を研ぎ澄ませて見張りをしたのだった。

第六話　相棒との出会い（後書き）

相棒とは野太刀の事だったり。

第七話　収穫祭（前書き）

なんか収穫祭とは別物になってますがね。

第七話　収穫祭

ルストが町に着いたのはあれから二時間後だった。
その町は町というおりも村に近い感じだが、木で作られた家々と周りに幾つもある畑がどことなくのどかな雰囲気を醸し出していた。
確かにこの町は農業やらが多く、それなりに発展していて人口が多いため、祭りの準備もあるだろうが町を行き交う人々には活気があり、笑顔が溢れている。
その祭りは明日だと言うことで、今日はこの町で宿を取る事にした。
「お世話になりました。コイツもありがとうございます」
「いやいや、こっちこそ護衛してもらったからの。わしの出店に立ち寄った時には冷やかしでもいいから声をかけてくれよ？」
「わかったわ」
祭りの準備があるからとその場で老人と握手して別れ、遠ざかっていく馬車を見送りながら貰った野太刀を握り締める。
それからルストは貰った野太刀を一瞥した後、宿を探すために歩き出した。
そこらにいる町人に宿屋の場所を聞いて活気のある町並みを見ながらゆっくりと教えられた道を歩く。
（こんな活気があるって事は、ここを治める上のもんの手腕がええ証拠やね。うちんとこ……あー、エンドリス領は収穫とかはええねんけどあまり活気がええもんとちゃうからなぁ。なんつーか、恐怖で支配しとるというか、腐っても名門やから何があろうと何も言わせへん力を持っとるからか。いつかは向きあわなアカンのかもな。……まあ、死人に口無し状態やから向き合えるかどうかも知らんけど）
自分がいた領を思い出しちょっとブルーになりながら歩いているとやっと宿屋に着く。

宿屋の扉を開いてみるとどうやら一階は酒場も兼用しているようで、バーにあるようなカウンターに丸テーブルが乱雑に数台ならんでいる。

「おや、客かい？」

カウンターでコップを磨いていた立派な髭を生やしたがたいの良い男が声をかけてきた。

「まあ、明日の祭りを見たいんで一泊……いや、二泊ほどしたいんやけど？」

「ほう、収穫祭に参加するのかい？」

いつまでも入り口に突っ立ってる訳にもいかないのでカウンターまで歩み寄りながら用件を言うと、バーテンが再び聞いてくる。

「収穫祭？」

「収穫祭を知らない？収穫祭って言ったら大概の村や町で行われているだろう？」

疑問を持ったルストが小首を傾げると、バーテンが色々と説明してくれた。

収穫祭とは作物を無事に収穫したことを祝う祭祀行事（さいしぎょうじ）だ。

農村全体が一団となって大規模に行われるものから各農家で行われる小規模のものまで存在するが、この町は前者だ。

また、農産物の出荷組合なるものが存在し、他の町や村からも参加する商人達のコミュニティの場で、自分達の生産物を宣伝、販売するためという商業的な色合いが濃いものもある。と言うか今回のがまさにそれの様だ。

「このドゥルク領は隣のエンドリス領やモット領よりかは平民の活気はあると自負しているよ」

「へ、へぇ、そうなんや……。その二つってなんで活気が無いんかわかります？」

バーテンの言葉にいきなり自分の出身領の名前が出てきて苦笑い

しつつ、他の領の平民から見たエンドリス領の感想というものを聞きたくておそるおそる聞いてみる。
「簡単さ。二つとも税が高いんだよ。エンドリス領はまだマシだが、モット領はダメだな。あそこの住人は目が完全に死んでる。それにモット伯は大変女癖が……って坊主にこの話は早いか。かと言って移住なんてそうそうできるもんじゃないから最悪の環境なんだよな。それに引き換えここの領主はまだ常識人さ。税もその二つに比べたら安いし、環境ものどかで良い。おそらくトリステインの中でも良い方だと思うぜ？」
「なるほどな……」
バーテンが身振り手振りで説明してくれる。
ルストはモット領って一体……と思いつつ、バーテンの説明に頷く。
「そういや長々と話しちまったけど確か泊まってくんだったよな？一泊１００ドニエだ」
「ああ。二泊お願いしたいんで２００ドニエやな」
「まいどありってな。つか、変な訛だな。どこの出身だ？」
「い、一応トリステインや。辺境過ぎてわからんとこ」
「ふーん……。二階の奥の突き当たりの部屋だ。ほら、これが鍵だよ」
「どうも」
財布代わりの皮袋から２００ドニエ取り出して払うと、バーテン――というより宿主らしい――が出身について訝しげな表情をしたが訳ありか何かだろうと深く追求せずに素直に鍵を渡してくれた。
ちなみにハルケギニアの単価は銅貨（ドニエ）、銀貨（スゥ）、金貨（エキュー）と言う。
ドニエが価値基準とすれば、１０ドニエが１スゥ、１０００ドニエが１エキューと言った具合だ。
必然的に１００スゥが１エキューとなるし、新金貨と呼ばれるものもあり、これの単価は７５０ドニエとほぼ同じという中途半端な

額である。
この宿は平民向けの宿屋であるためこの額だが、貴族向けとなると一泊するのにエキューを使う事になるのだ。

ルストは階段を上って突き当たりの部屋に鍵を差し込んで開けるとこざっぱりした部屋が視界に入る。
個室なためか、ベッドは一つで古ぼけた机と棚があるだけだ。
ルストはベッド近くの壁に野太刀を立てかけて、ベッドにゴロンと寝転がるとギシッとベッドが軋む。
（やっぱ旅って言ったら宿屋やんなぁ。野宿ってのもいいけど、野宿は前世の修行ん時に腐る程経験したからなぁ。やっぱええなぁ）
ホクホク顔でそんな事を考えてる内に瞼が重くなって眠ってしまったのだった。

ルストが眠ってしまってから一時間、もう夕食と呼べる時間にルストが泊まった宿の扉が開かれる。
「いらっしゃい」
「一室空いてるか？」
やって来たのは男みたいな言葉遣いの女。
年の頃は十五歳ぐらいで赤い髪のボブショートに切れ長の目、皮のジャケットに短パン、そして脛（すね）あたりまであるブーツと動きやすさを重視した格好をしているが、腰に備えられている使い古された短剣がただの平民とは思えない雰囲気を醸し出している。
「空いてるよ。一泊１００ドニエだ」
「わかっているさ。ほら、これでいいだろう？」
宿主の言葉に１００ドニエをバラバラと出す女。
「へい、まいどあり。二階の奥から二番目の部屋でさ」
「どうも」
宿主から鍵を受け取った女はさっさと二階へと上がって自分にあ

てがわれた部屋に入り、短剣を腰から外して机の上に放り投げてベッドに寝転がる。

（モッド伯。しつこい奴らだった……。ああいう人種は吐き気がする。ただでさえモット伯は女癖が悪いという噂を聞くのに何故私があんな奴を奉公しなければならない？　私が平民の若い女だからか？　ただモット領を歩いていただけなのに？　まったく、追手を撒くのに疲れたな。流石にここまでは追ってはこないだろうけど）

女は先程までの事を思い出してため息をつく。

そう、女はただ旅の途中でモット領を立ち寄っただけで、何かした覚えはないのだが――強いて言うなら馬車に乗っていたモット伯とすれ違うぐらいだけだったのだが、そのモット伯に見初められて――と言ってもただ仕えろ、しかも夜の相手という事なのだが、それが嫌で即刻逃げだしたところ、部下のメイジ達に追われたのだ。

森の入り組んだ木々を使って逃げ切ったが。

（流石の私もメイジ複数を相手に立ち回れないし、弓も壊れてしまった。武装が短剣だけなのも限度ってものがある。メイジを複数相手にするならまだ遺跡の罠（トラップ）を相手にする方が遥かにマシだ）

女はベッドから起き上がり、鞄から数枚のドニエを取り出す。

（そろそろ夕飯にするか。……下に頼りになりそうな奴がいればいいな。盾にできるようなの）

さり気なく黒い事を考えながら女は部屋を出て空腹を満たすために酒場へと降りていった。

ガヤガヤと騒がしい音と共にルストが目覚め、一体なんだ？と窓の外を見ると、数々の出店が並び、行き交う人々で町が賑わっていた。

日も昨日寝た時よりも高い位置にあるため、いつの間にか翌日になってしまったらしい。夕食食べてないのに。

ルストは起き上がって全身を一気に伸ばして血行を良くして体の

目を覚まさせる。
（朝飯どうしよかな？　いや、出店やってんねんから出店で食えばええやろ。なんや気分は地元の夏祭りみたいやなぁ）
そう思いながらルストは近くの壁に立てかけた野太刀を手にとって部屋を出て、一階へと降りていく。
「よお坊主、ぐっすり眠れたかい？」
「ああ。正直寝すぎてもうたわ」
宿主の言葉にルストはアハハと苦笑いしながら頭を掻く。
「そういや、夕飯食いに来なかったなぁ。まさかあれからか？」
「まあ、そのまさかやで？」
宿主が思い出すように聞き、ルストは恥ずかしそうに答え、すると宿主はガハハと大笑いする。
「寝る子は育つからなぁ。なんか飯でも食ってくかい？」
「いえ、出店で何か買おうか思っとってな」
「なるほど。じゃあ、行って来な」
「おう。行って来ますー」
宿主との受け答えが終わり、宿屋を出ると部屋にいた時よりも騒がしく、「こっちの野菜は新鮮だよ！」と、声を張り上げて客引きをしたり、また「この剣は名匠が鍛えた剣で……！」と、収穫祭とはまったく関係ない代物を売ってる者もいる。
おそらくこの祭りを見ようと立ち寄った旅人を標的にして売り込んでいるのだろう。もはや収穫祭とは言えない祭りになりつつある気がしてならない。
「さて、何から見て行こかなぁ？」
祭りの雰囲気に当てられて楽しそう呟くルストだったが。祭りの騒音に掻き消され、その雑踏へと歩き出してその一部に加わった。
まだ、祭りは始まったばかり。

第七話　収穫祭（後書き）

ハルケギニアの単価ってこれであってたっけかな？

あと、物価がまったくわからなかったり（笑）

第八話　助太刀（前書き）

ちょっと間空いてしまいました。

まあ、マイペースで行こうと思ってますのでご容赦を！

第八話　助太刀

ルストはガヤガヤと喧(やかま)しく行き交う人ごみの中を童心に戻ったようにニコニコと笑顔で突き進んで行く。

その間に露店で売っていたホットドッグのようなサンドウィッチのようなとにかくパンでサラダや何かの肉を挟んだような物を買って、それを朝食として食べる。

（やっぱ祭りはええよなぁ。なんつーか、ここには争いや格差ってもんがない。皆、いい笑顔しとるわぁ）

ルストは祭りを楽しんでる人々を見ながら野太刀を脇に抱えて朝食をガブリと一齧(ひとかじ)りする。

おそらくこの町で採れた野菜を売ってるだろう店があったり、あるいはそれらを使った料理を販売している店もある。

そして収穫祭とは無縁な武器や鎧を売ってる店も少なからず存在している。それらは立ち寄った旅人を対象にしているのだろうが。

そういえば野太刀をくれた爺さんも武器とか鎧とかを荷馬車に積んでたなぁ、とルストは思い出し、キョロキョロと周りを見回して爺さんを探すが見つからない。

その代わりに焼き鳥のような物を売ってる店を見つけてそれを購入し、買った物を齧(かじ)って肉を串から抜き取り、味わうようにして食べる。

（鳥肉やな。うん、生前の世界にゃなかったタレやけど美味いなぁ）

その後もルストは目に留まった物から買って昨日夕食を食べ損ねた分を取り戻そうと食べまくる。

そんな事をしていると――

「おや、メイジ様じゃないですか」

と、声をかけられて振り向くと、昨日の野太刀をくれた爺さんが露店を構えて笑いかけてきた。

その露店を見ると剣(ソード)や斧(アックス)等の近接格闘系の武器や、槍(ランス)に槍斧(ハルバート)と言

った長柄武器に弓（ボウ）やボウガン等の射程武器、皮や鉄できた鎧に盾まで品揃えが豊富である。

収穫祭だと言うのにここまで武器や武具を図々しく揃えているのはこの露店ぐらいだろうとルストは苦笑いする。正直度胸があり過ぎだろうこの爺さん。

「あー、メイジ様はやめてくれへん。俺、魔法使うよりも剣の方が強いんやから」

「ほー、魔法よりも剣の方が強いメイジ様ですか。珍しいですなぁ。では、なんとお呼びすればいいかいの？」

ルストが苦笑いしながら爺さんに近づいて言うと、爺さんはおどけたように笑いながら返す。

「ルスト、と」

「わしはチェルスと言いますじゃ」

ここにきて初めて自己紹介した二人。

それから爺さん――チェルスとルストが――

「祭りは楽しんでおるかいの？」

「楽しんでるでー。目新しいものばっかりやし……」

と雑談を始めたところで辺りが祭りとは違う意味で騒がしくなる。

遠くの方で「待てや！」とか「逃がすかよ、女ぁ！！」等と怒声が聞こえたためにどうやら女が複数の男達に追われているのだろう。

チェルスはまあ祭りでは稀にあることじゃな、と我関せずだ。

しかし、そんなチェルスとは裏腹にその野太い怒声が近づいてくる。

そこで姿を現したのは赤いボブショートな髪型に鋭い目つき、皮のジャケットに短パンとブーツ、と言った比較的動きやすい格好をした女――いや、まだ少女と呼べる年齢だ。

その少女はルストと同じ宿に泊まっていた少女だった。

（面倒だな……）

と、少女は心の中でため息をつきながら素早いフットワークで行き交う人ごみ縫（ぬ）うように駆け抜ける。その表情は誰もが認める程に

不機嫌だった。
そんな少女を人ごみにのまれながらも追走する安っぽい皮の鎧と片手剣（ブロードソード）を装備した男達。しめて十人程。
何故少女がこんな状況になったかを説明するには数十分程戻さなくてはならない。

それはルストが宿を出た後、同じその宿の別の部屋でむくっとベッドから起き上がる目つきが鋭い――というか寝惚け眼で悪くなってる少女。
そこでフと外が行き交う人ごみで騒がしい事に気づいてため息をつく。
（完全に寝過ごしたな。全く、昨日の命がけ……というか貞操（ていそう）をかけた追いかけっこで疲れたか？）
少女はやれやれと頭を左手で押さえてそう思った。
それからしばらくしてグッと体を伸ばしてほぐしてシーツをバサッと取っ払う。
そこから現れた少女の姿は一寸たりとも何も身につけていない。
つまり真っ裸。
少女以外は部屋に誰もいないため、シーツすら纏わず堂々とベッドから降りて布を局部へと巻いてふんどしのような物を作った後、昨日と同じ短パンを履く。

ちなみに平民には貴族が着用しているような下着は平民では買えるような代物ではない。
主にかぼちゃパンツのような物を着用しているが、そんな物を履いて戦ったり罠を掻い潜ったり等の激しい運動ができる筈もなく、大概の女性は下着を着用しない。
が、冒険者等を生業（なりわい）としている女性は、この少女のようにふんどしのような帯状の物を自分で作成する。さすがにノーパンで乗馬は

色々マズイだろうし。

それから少女は皮のブーツを履いて簡単に脱げないようにベルトで固定する。

机の上に投げ出していた皮のジャケットを何も身につけていない上半身にそのまま羽織ってボタンで前を閉じる。

そのせいで大きくも小さくもない胸部は、身体を守るための分厚い皮のせいで押し潰れて通常よりも小さく見える。かと言ってこの少女はそんな事を気にしていないのだけれど。

最後に同じく机の上にある短剣を短パンについているベルト型のホルダーに納めてチェックアウトして宿を出た。

少女は面倒そうに行き交う人々を眺め、とりあえず空腹を満たすためにそこらの露店で食糧を買い、はむはむと小動物のように食べながら町の外へと歩いて行くが――

「見つけたぜぇ～」

そんな声が聞こえたために振り返るといかにも小物そうな眼帯を付けた薄汚れた容姿をした男を筆頭に、十人程の男達が立っていた。

「だな、この人相書きにそっくりだ」

「コイツをモット伯に引き渡せばたんまり金が貰えるって訳だ」

男達が口々にそう話している中で、少女はモット伯という名前を聞いて眉間にシワを寄せて不機嫌顔になる。

（女にがめついと聞いてはいたが、まさかここまで追手を寄こしてくるとは正直鬱陶しい。……だが、短剣一本でこの人数を切り抜けるのも一苦労だ。なら……！）

少女はそこまで思考すると、男達を完全に無視して再び町中へと全速力で駆け込む。行き交う人ごみを使って撒こうと考えたのだ。

その少女を追いかけるために走り出す野郎共。

それから町中を駆け回る鬼ごっこに発展して現在へと至る訳だっ

た。

そして現在、件（くだん）の少女が全力疾走で人ごみを軽やかなステップで避けながらこちらへと向かってきている。

その後ろには憤怒の表情の男達が追走してくる。

「これでもくらいやがれぇ！！」

男達の一人がスローイングナイフを取り出して振りかぶる。

「バカ！　そんなもんここで使ったら……！？」

別の男がそれを止めようとするが、制止も空しく少女へと向かって投げられる。

その出来事に射線上にいる人々が表情に恐怖を浮かべながら慌てて飛び退き、少女へと直進する。

が、それは少女がひょいっと右へとステップを踏んだ事で簡単に避けられた。

「ぎゃーーーー！！？」

だがその代わりにチェルスの顔の横に吊り下げられた皮袋に突き刺さり、涙を噴水のように噴出しながら悲鳴を上げるチェルス。

「む？」

「ん？」

そんなチェルスにルストは苦笑いした後、再び少女に視線を戻すと二人の視線が交じり合う。

しかしすぐに少女の視線が横にずれて何かを見つけたように目を見開き、本格的にこちらへと向かってくる。

「店主！　これらを貰うぞ！　代金は奴らから巻き上げ……ふんだくってくれ！」

「ひょ！？」

（別に言い直さんでも意味は同じなんちゃうん？）

少女がチェルスの店の前で立ち止まると、大型の弓と矢筒（やづつ）を引っ掴んで男達に向けて弓を構えて矢筒を肩に掛け、そこから矢を一本

引き抜いて構えるとチェルスが素っ頓狂な声を上げる。
その横でどうでもいいことを思ってしまうルスト。
「ちょ！？　待てよ！？　周りにどれだけ人がいると思って――――！？」
しかし、少女はチェルスの返事や眼帯の男の言葉を待たずに矢を男達に向かって射る。
その矢は寸分違わず男達の内の一人――たった一言で形容するなら臭そうな男の足に――しかも重心をかけている途中の足に当たったために転がるように倒れる。
（ふむ。少し違和感はあるが問題ないだろう。やはりあの時弓をダメにしてしまったのが痛かったな）
少女は弓を射た一秒にも満たない余韻の中でそう思い、再び矢を手にとって弓を引く。ちなみにあの時と言うのはモット伯の部下の傭兵メイジ達から逃げている途中の事だ。
さっきのとは別の男に命中させたところで残りの男達は散会して物陰に隠れたり路地裏のようなところへと飛び込んで矢の射線上に入らないようにしている。
「……流石にそうするか」
少女は舌打ちしながらそう呟いて気を抜かずに弓を構えて男達がそれぞれいる場所を見据えている。
そして完全無欠に置いてけぼりのルストは周りを確認して呆れてため息をつく。
（完全に町の人ら巻き添えくってんなぁ。つーか、いきなり事件に巻き込まれるのも旅っぽくてええねんけど、こうも状況がわからんかったら何もできへんなぁ）
「ルスト殿！　早くこちら側に！」
ルストがぼーっとしているとチェルスに腕を引っ張られて強制的に出店の中に入る。
確かにチェルスの出店は剣や鎧等の武具があって巻き添えをくった時に身を守る場所としてはそれなりに機能するだろう。

まさかこれを見越して図々しくこんな店を？　と、ルストは感心してチェルスを見る。
「ヒィ！？　なんでわしゃ、こんな目にあうんじゃーー！？」
横で頭を抱えてガタガタ震えてるチェルスを見てルストは感心を金繰り捨てて前言撤回した。
「ギャーー！？」
そんな中でも状況は動いていたらしく、少女に近寄って剣を振りかぶっていた男がほとんど零距離で矢の餌食になる。撃たれたのは足だが。
「大人しく捕まれって！　所詮一人で何ができるってんだ！？」
「嫌だな。何故、私がジュール・ド・モットの屋敷で奉公しなければならない？　お前達こそさっさと帰れ！」
「ここで帰ったらモットの野郎に殺されるだろうが！　退けるかよ！？」
果物が入っている木箱に背を預けている眼帯の男と少女が物々しい雰囲気で言い合いを始める。
二人の会話でなんとなく話が見えてきたルスト。しかしわからないこともある。
（ジュール・ド・モットって誰やねん？　どっかで聞いた事あんねんけどなぁ……）
「ジュール・ド・モットかぁ。えらいのに目ぇつけられたのう、あの嬢ちゃん」
「知ってるんですか？」
ルストがその誰かわからない名前の事を考えるが思い出せない。
しかし、平静を取り戻したチェルスの呟きにルストはちょっと驚きつつチェルスに訊ねる。
「当然じゃとも。つか、このドゥルク領の隣にあるモット領の領主じゃよ。非常に女癖が悪くてな、自分の領の女だけじゃ飽き足らず、他の領への視察を建前に美しい平民の女をほとんど強制的に屋敷へと連れて行ってメイドにし、夜の営みの相手にしてしまうんじゃよ」

「よ、夜の営み……！？」

チェルスの説明に羞恥で顔を真っ赤にしてしまうどこまでも純情なルスト。

生前は二十台前半ぐらいだが、その手の話には免疫が無いどころか経験すら皆無だったためにこういう話には非常に弱い。こういうところは兄の詠春にそっくりだ。

「ムホッ？　ルスト殿もそのようなお年頃でしたか」

「え！？　なぁ！？」

ヒョホホとひょうきんに笑うチェルスのからかい混じりの言葉に羞恥で絶句するルスト。

この二人、ここが戦場という事を忘れているような気がする。

「っ……！？」

ルストは我慢ならないと話題を変えようとして少女達の戦いに目を向けると、少女が弓を左手で持って、腰から引き抜いた短剣を右手で逆手に持ち、四人目の男を斬ったところだった。

しかしその背後にある家屋の屋根から二人の男が飛び降りて少女に斬りかかるのを目撃してしまう。しかも少女は男達に気づいていないようだった。

その時にはこの状況の訳がどうのだとか、どっちが悪いのかとかそんな考えが吹っ飛んで出店から飛び出して瞬動を使って少女と男達の間に入る。

「ルスト殿！？」

チェルスの叫び声を無視し、ルストは目つきを細くして屋根から飛び降りてくる二人の男を見据えてからチェルスに貰った野太刀を抜刀して常人には見切る事のできない速さで野太刀を振るう。

気づいた時にはルストはキンッと甲高い金属音と共に野太刀を鞘（さや）に戻し、そのままルストを通り過ぎて着地した二人の男は少女に何をするでもなく――いや、何もできずに持っていた剣と鎧を一瞬で砕かれて倒れ伏す。

ルストが行ったのは、高速斬撃と峰打ちでの高速殴打。

飛び降りてきた二人の男は空中にいて、浮遊術かフライの魔法を使用するかしないと体勢を変える事すらできない。

だから空中で剣を振り下ろしている二人の男よりも地に足をつけているルストの斬撃の方が速く、二人の男が振り下ろすどころか着地するまでの間に野太刀を十回程振るった。

一太刀目で片方の男の剣を砕き、二太刀目でもう片方の剣を砕く。この間に一秒すら経っておらず、続け様に次々と八太刀目で二人の鎧が完全に砕け散り、最後の二太刀で刃を反(かえ)して二人の胴を思いっきり殴打して意識を刈り取った。

ただそれだけの事。だが、それだけの事が非常に難しい。

「なんだテメェは!?」

「おまえは……？」

「助太刀したるわ」

眼帯の男の怒声と驚いている少女の質問を無視して少女に自分の用件だけを伝えるルスト。

「……そうか、助かる。できれば近くに来た敵を相手にして欲しい」

「承知したわ。祭りの場をこれ以上血で汚したくないし、素直に退いてくれたこっちとしても嬉しいんやけどな？」

「ハッ！　退けるかっつーの！　退いたらそこで俺たちは終わりなんだよ！」

少女が少し警戒したままだがそう答えて指示すると、ルストは返事をしながら少女の前に立って抜刀術の構えをとりつつ残りの男達に忠告する。

が、眼帯の男の一言に切り捨てられ、二人の男がそれぞれルスト達の左右から飛び出して襲いかかる。

少女が迎撃しようと弓を左の男に向けるが――

「しゃあないなぁ……」

ルストは呟きと共に抜刀して神速の斬撃を放ち、左右の男の剣と鎧をバラバラに粉砕した。

（コイツ……!?）

その光景に少女が弓を構えたままの状態で目を見開いて驚く。
「二度目は警告。三度目は……ないで……？」
ルストは何事も無かったかのように野太刀を鞘（さや）に納めながら静かに男達に向けて言い放つと、男達に動揺が走る。
「だ、誰が退くものか！　何度も言っているだろうが！　俺達は退いても後が無いんだよ！？」
が、いち早く復帰したリーダー格の眼帯の男が代表して宣言した。
（得体のしれない男だが、助太刀してくれるのなら心強い）
少女は平静を取り戻して冷静に状況を分析し、そう結論する。
ルスト達の周りには無傷の男が二人、そして傷つきながらも戦線復帰した者達が四人。残りは再起不能。
「行くぞ、野郎共！！」
「「「「「うおぉオォォォォッ！！」」」」」
眼帯の男が剣を掲げながらそう言い放つと、周りの復帰した男達が雄叫びを上げる。
「迎撃する！」
「行くで！」
少女が弓を男達に構え、ルストが野太刀を納刀（のうとう）――鞘に納めたまま構える。
こうして互いに名前も知らない二人の共同戦線が始まった。

第八話　助太刀（後書き）

ちょいと長かったですかねぇ。

収穫祭、まだ続きます。

次回くらいで終われば良いのですけど。

第九話　その女、無情（前書き）

どうもお久しぶりです。大体一ヶ月ぶりぐらいかな？
遅くなった言い訳はしません。個人的な事なので。
まあ、知ってる人もいるにはいるけどね。

サブタイトルはそれ程関係無いです。

第九話　その女、無情

とある少女と共同戦線を張ったルストは改めて戦況を見回してみる。

相手は全部で六人。それぞれ剣や斧、ナイフ等を持ち、それなりに値がはりそうな鋼鉄の鎧を着込んでいるのがリーダー格らしい眼帯の男。それ以外は安物そうな鉄製の鎧や皮の鎧に身を包んでいる。

今、この通りにはルストと少女、そして男達（戦闘不能になった者達も含む）だけだ。

本来、収穫祭で賑わっていた人達は少女が男達に向けて矢を放った時点で蜘蛛（くも）の巣を散らしたように全力で逃げ出している。

チェルスの姿も見えないがおそらく既に逃げ出しているだろう。

（巻き込まれてめっちゃ涙流しとったし）

ルストは内心苦笑いしながら、そう結論付けて。

そんな結論を出したルストはいつでも動けるように全神経を研ぎ澄ませて、男達の動きに対応できるようにしている。

この事件の中心人物である名も知らぬ少女はルストの後ろで弓を構え、それを避けるように男達が屋台を壁にして隠れ、ルスト達の様子を伺っている。

この両者の状態はまさに膠着（こうちゃく）と呼べるだろう。誰からも動かず――いや、一度動き出せば止まらない事を理解しているからこそ、どちらも動けはしないのだ。

だが、こうしているだけで人の精神は磨り減るもの。敵はどう動くか？　何を仕掛けてくるのか？　考えられる事だけでも色々ある。

それはやがて疑心となり、恐怖となる。そんな人間がまともに動けるだろうか？　まともな判断ができるのだろうか？

それは否。その心境は初陣にて視界の悪い密林で、どこから敵が

来るのかわからない状況で発狂するのと同義だ。
「うわぁあぁぁあアァァァァァァァァァァッ！！！」
静かだった戦場にいきなり絶叫がこだまする。
絶叫したのは、見ただけで新鮮だとわかる程に青々としている野菜を取り扱っている屋台を盾にしている皮の鎧を着込んでナイフを持った男だ。ただ、野菜のせいで少々青臭くなっているが。
その男がそんな発狂しそうな雰囲気を放っている人物――未だ十三歳の少年であるルストへと向かって血走った目を大きく開き、口の端から汚らしく涎を垂らしながら右手に持つナイフを振り回しながら走っていく。死に急ぐように。
「あの馬鹿野郎がっ！！　止まれっ！　リコール！」
それを眼帯の男が舌打ちしながら呼び止めようとするが、発狂している男には聞く耳もたずにルストへ一直線だ。
（確かにリコールは俺達の中じゃ、気の弱い奴だった。だがそれでもそれなりに場数を踏んできたんだ……）
眼帯の男はそう思いながら苦々しい表情をしてルストを睨みつける。
（だってのに……あんなクソみたいな戦場の雰囲気を醸し出すあのガキは一体なんだってんだ！？）
そして眼帯の男は仲間を助けるために隠れている屋台から飛び出していく。
本来、傭兵である彼らに仲間意識なんてものはない。足を引っ張ったり、負傷した者は問答無用で見捨てるものだ――が、眼帯の男は仲間を救おうと走り出す。
何故なら――――
（もう十年来の付き合いなんだから今更見捨てられっかよ！）
友だからだ。
そういう部分が残っているため、眼帯の男の性根はまだそれ程腐ってはいないのだろう。戦闘者としてはどうかと思うが。
そしてルストはルストでただ精神を研ぎ澄ましているだけなのだ

が、無意識に体から気がわずかに放出され、得体の知れない戦場の空気を作ってしまっていた。まあ、そのせいでリコールが発狂してしまった訳だが。

リコールがルストへと向かってナイフを振りかぶるが、それよりも出出(でだ)しが遅かった筈のルストは既に抜刀してリコールを殴打している。そう、斬っているのではなく殴打だ。峰でリコールの腹を真一文字に思いっきり殴り倒している。

やっぱ祭の最中で血生臭い事なんてごめんや、と思うルストであった。

ルストが、納刀(のうとう)しながら泡を吹いて地に伏しているリコールから目を離すと次々に男達が屋台から飛び出してくるが、少女の弓矢によって次々と撃ち抜かれている。しかも普通に胸や肩に当たっているところから完全に殺す気で射(い)ている。この少女、この場にいる誰よりも容赦(ようしゃ)がないのかもしれない。

ルストもそんな少女を苦笑いして一瞥(いちべつ)する。

「何だ?」

「いや、なんもあらへん」

少女はそんなルストに眉をひそめながら聞くが、ルストはサッと男達に視線を戻して何事もなかったかのように振舞う。

(この嬢ちゃんおっかないなぁ)

内心そう思いながら。ルストは見た目十三歳だが、中身(精神)はそろそろ――いや、既に三十代なおっさんである。この少女を嬢ちゃん扱いするのもおかしくはない――筈だ。

「屋台を使って右から回り込め! 所詮はガキ二人だろが! カッツは俺と一緒に左から行くぞ!」

眼帯の男が指示を飛ばし、リコールとその他四人の男が一気に脱落したために残りの四人が二手に分かれてこちらに向かってくる。

「私が眼帯の男の方をやる。おまえは――」

「わかってるって」
少女が言い終える前にルストは適当に頷いて眼帯の男がいない方へと野太刀片手に突っ込んで行く。
視界の端でチラッと捕らえた男達の足の速さを無意識の内に計算し、わざわざ屋台の中を突っ切って奇襲を仕掛ける。
「んなっ！？」
「ちょっと寝とけ」
ルストは抜刀せずに瞬動で一気に近づいて皮の鎧を身に纏ってる男の顔面を殴り飛ばすと、皮の鎧の男はグシャッと鼻骨が潰れた音と共に屋台も何も無い道にゴロゴロズザザっと吹き飛んで転がって倒れこむ。
もう一方の明らかに鋼鉄製の鎧を身に纏っている男――見る限りはおそらく最年長の男だろう。わずかに髪が白くなっているし、顔の皺も濃い。初老と言えるような年齢だ。
その初老の男はナイフの刃のように切れ長い目を更に細め、ルストを油断無く睨みつけて剣を構えている。
その構えは当然のように隙がない。
（このおっちゃん、できるなぁ……）
ルストはそう思って薄く笑い、いつでも抜刀できるように構える。
「見かけん剣術だな？」
一言で言えば年齢に相応しい渋い声が静寂した戦場の中でやけに大きく聞こえる。
明らかに目の前の初老の男が発した声だろう。
「やっぱわかる？東方の剣術なんよ」
ルストは悩む素振りすら見せずにそう言い放つ。

このハルケギニアはヨーロッパの地形と良く似ている。というのがまだ親に見捨てられる前に世界地図を見た時のルストの感想だ。
世界地図とは言っても東――前の世界で言うアジアの方はサハラ

と呼ばれる巨大な砂漠が存在し、渡った者はいないそうで、地図はトリステイン、ガリア、ロマリア、一応アルビオンの四つと申し訳程度のサハラしか描かれていない。
だがそれは、砂漠を渡れないのではなく、そこに住み着いている種族が問題だ。

その種族はエルフ。

平民の数倍の戦闘力のあるメイジの更に数十倍の戦闘能力があるらしい。どないなデタラメ種族やねん、とルストが嘆息するのも無理はない。
それはともかく、言いたいのはもしかしたらサハラの向こう側には日本や中国と似たような国と文化が存在しているんじゃないかと勝手に結論付けているだけだ。

「ほう、東とな。その訛も東のものなのか？いや、それ以前に何故御主のような小僧が東方の事を知っておるか、気にはなる――が、ここは戦場（いくさば）、己の剣（つるぎ）を持って任務を果たし、それからゆっくりと聞き出してやろう」
「それはなかなか。……せやけど、それはできたらの話やろ？」
「ふん、抜かせ小僧っ！！」
初老の男が言い終わると同時に二人同時に駆け出し、初老の男は持っていた剣を振り下ろし、ルストは一瞬で剣を抜刀して真横に振るう。
互いの剣が激突して。キンッと甲高い金属音が辺りに響き渡る。
（むう、遠目から見るより間近で見た方が剣速が速い。この小僧、存外にやりおるわ）
鍔迫（つばぜ）り合（あ）いをしながら初老の男は感嘆（かんたん）したように目だけで笑う。
（このおっさん、重い一撃放ちよんなぁ。ハッハァッ！　おもろい

やんけ！）

ルストは表情では苦々しい事この上ないが、内心では強敵に笑っていた。

（む？）

ギシッと、ルストが踏ん張る足の重心を移動させた事で初老の男は瞬時にルストの思考を読み取る。速度で負ける相手なら、相手の思考を読んで先手を打つしかない。

「っ……！！」

その瞬間、ルストがスッと足を引いて初老の男の体勢を崩す――つもりだったが、初老の男の体勢は崩れずにカッと目を見開いて逆に追撃しようと再び剣を振りかぶっている。

（読まれた！？　やけど……）

そこでジャリっと重心を移動させた足を軸にして回転し、初老の男の斬撃を避け、その慣性を利用して剣を真横に薙ぎ払う。

「ぬおっ！？」

その斬撃を初老の男は無理矢理仰け反って避ける。目の前を高速で通過する刃に冷や汗が流れ、そのまま転がるようにしてルストから距離を取る。

「やるな、小僧。我が名はガルツ。小僧、名は？」

「ルスト、や」

初老の男――ガルツは地面から立ち上がり、ルストも抜刀したまま片手で下段に構える。

「ルスト、か。良い名だ」

「それはどうも」

ガルツはルストの礼に一瞬だけ柔らかく微笑んだ後、凛々しく剣を突き出すように構える。

「礼なら全力で来い。まだ出しておらんのだろう？」

その体勢からピタリとも動かずにそう言い放つガルツにルストは一瞬目を見開くがスッと目を閉じた後、カッと目を見開くと同時に莫大な気の噴流が溢れ出す。

その光景を見たガルツはこれか、と嘆息する。
（これがあの妙な雰囲気を作り出しておった原因か。こうも真っ向から向き合うと、勝てる気がしないな）
そんな気持ちとは裏腹に剣を持つ手に力が篭もる。
（だが、だからとて――）
そしてガルツはルストへと向かって走りだす。
「負ける訳にはいかんのだよっ！！」
その一撃はガルツのがたいの良い筋肉質の体の全体重を乗せた一撃をルストへと放つ。
しかし――
「そうやな、こっちも……」
ルストが下段にしていた剣をそのまま肩と水平になるように持ち上げる。
「負けられへんのや」
そこから刃を返して瞬動を使い、ガルツの懐へと一瞬で潜り込む。
（こっ、こやつ……！？）
全体重を乗せた一撃と言うことは、急な方向転換が利かないと言う事。その隙をついたルストの瞬速の斬撃がガルツの鋼鉄製の鎧を完膚なきまでに砕き、そのまま上空へと吹き飛ばす。
「神鳴流……」
ルストは剣――野太刀を振り切った状態で膝をついたままポツリと呟き、するすると野太刀を鞘へと納めようとする。
「斬岩剣」
そしてキンッと野太刀を鞘へと納めると同時にドガッと傍にあった屋台の屋根を突き破ってガルツが白目を向いて落ちてきた。
「やっぱ祭ん時に人殺すんは嫌やからな」
ルストはポツリと呟いた後、ガルツを一瞥してから少女の下へと向かった。
ガルツの砕かれた鎧の下に見える素肌は青黒く腫れてはいるが、斬られた様子は全くない。更にはガルツの胸部が上下に動いてる事

から息はしている。
　要は今の斬撃は峰打ちだった。

　一方、ルストがガンツと戦っている間に眼帯の男達は少女に追い詰められていた。
（おいおいおいおいおいおいっ！！数人のメイジから逃げ果(おお)せる実力があるとは言え、まさか追い込む筈の俺達が――っと、うおっ！？）
　眼帯の男が冷静になろうと状況を整理していたところに少女が放ったであろう矢が脇すれすれに飛んでいく。
　眼帯の男と一緒にいた男――カッツは即行で無力化されていたりする。
（逆に追い詰められてやがる！？）
　そこにまた矢が飛来してくる。真上から
「真上ぇ！？」
　眼帯の男が真上を見ると、そこには弓矢をこちらに向けて構えながら壁を蹴って跳躍(ちょうやく)し、上空から弓矢を射ろうとしている姿。まさに軽業師と言える。
（何者だよあの女ぁ！？）
　そこから身を守るために眼帯の男はとある屋台へと飛び込む。そこには――
「ひぃっ！？」
　とある老人が眼帯の男を見て悲鳴を上げていた。
　それは眼帯の男が一矢報いる手駒であり、それを見た眼帯の男はニヤリと笑った。

第九話　その女、無情（後書き）

まだ続きます、収穫祭。
次で収穫祭終わりなんで気長に待ってくれると嬉しいかも。

第十話　面倒事は終わらない（前書き）

なんかいつの間にやら総合評価ＰＴが１０００を超えてたり。
皆さん、ありがとうございますよ。

第十話　面倒事は終わらない

ルストが少女と合流するために来た道――と言うほどのモノでもないが、元の場所に戻ってきた。

（ここで嬢ちゃんと別れたから……嬢ちゃんは向こうかいな？）

ルストが自分が居た所とは別の場所を見てそう思い、ルストはそのまま予想を立てたところへと向かって走り続ける。

港町でもないのに新鮮――とは言いがたい魚が置いてある屋台を通り過ぎ、山菜らしき物を石で作った板を熱して野菜炒めのような物を作っている――そのまま放置したのかおもいっきり焦げていて独特な臭いと黒い煙を放っている――の屋台の傍を駆け抜けると、そのすぐ傍に鋼鉄の鎧を着た男が肩と足に鎧の隙間を狙ったように矢が刺さっていて地面にうずくまっている。おそらく――つか絶対に少女にやられたのだろう。

ルストはその男にご愁傷様、と哀れみながら一瞥（いちべつ）して止まらずに走り抜けると、ルストの耳にタタタンッと何かを蹴ったような音が立て続けに聞こえる。

しかし、ルストはすぐに判別した。

この音は紛れも無く足音。地面では無く、木でできた壁――家屋の壁を蹴って移動している音だ。この足音の主は非常に身軽なのだろう。

その足音の主がルストの真後ろにトンッと着地すると同時にルストは振り向きながら抜刀し、野太刀を横薙ぎに振るう。

そして相手もこちらに振り返りながら弓矢らしき物をこちらに向けようとしている。

その襲撃者の容姿は、年の頃は十五歳ぐらいで赤い髪のボブショートに切れ長の目、皮のジャケットに短パン、そして脛（すね）あたりまであるブーツと動きやすさを重視した格好の少女――

「ってぇ！？」

ルストは無理矢理横薙ぎに振るった野太刀を少女の喉元に振れる寸前で止める。

しかし、少女は矢を射出してしまい、ルストは反射的に小首を傾げるように横に倒して避ける。が、矢に髪の毛を数本持っていかれて、背後にある屋台に、綺麗に置いてある果物に突き刺さる。

「なんだおまえか」

「あっ、危ないやないかぁ！！？」

さらっと涼しい顔をしている少女に怒鳴るルスト。

「いきなり出てくるおまえが悪い。それに変な訛だな？」

そんな下手すると死んでたかもしれないやり取りをした後だと言うのに少女はシレッとしている。

「変な訛って……アンタ結構失礼な――」

「いや、それよりも眼帯の男を見なかったか？　こっちに逃げていたと思うんだが……」

「……見てへんけど？」

変な訛と言われてちょっと傷つくが、少女は何事も無かったように流して状況を聞いてくる。ちょっとイラッとしたルストだった。

だが、今は戦いの最中なのですぐに頭を切り替える。だが、一応ここに来るまでは周りを警戒しながら来たのに地に伏してる――戦闘不能な奴ら以外は見かけなかった。

と言うことはどういう事だろう？　あの眼帯の男が逃げたのか、または隠れたのか。

だが、あの男は逃げても後が無いと言っていたために逃げる事はないだろう。

「隠れた、か……」

ルストの答えを聞いて瞬時にそう判断して呟く少女。ルストもその結論に達して頷いた。

そんな時だった。

「おい、ガキ共！　動くんじゃねぇ！！」

野太い男の声――あの眼帯男の声が聞こえて、二人揃って声の聞

こえた方を見ると、眼帯の男がニヤニヤ笑いながら立っていた。ただし――

「ヒッ、ヒィッ！！　助けてくださいですじゃ！！？」

眼帯の男の左腕で首を拘束され、右手に持つ短剣を老人――チェルスの喉元（のどもと）に突きつけられている。

要は眼帯の男はチェルスを人質をとっていた。

「な、なにやってんのチェルスさん！？　逃げたんやなかったかい！？」

「い、いやー、普通に逃げるよりもあのまま店に隠れていた方が安全かなー？と思ったりなんかしちゃったりして。テヘ☆」

「黙れ、ジジイ。ぶち抜くぞ」

ルストがこの光景にいの一番にツッコミを入れ、チェルスはチロッと舌を出して言い放ち、そんなチェルスの態度にブチ切れ寸前の少女がドスを効かせながら言い放つ。

にしてもこんな状況なのに緊張感がない。

「いや。おまえら今の状況わかってんのかよ！？」

「わかっている。要はそこのふざけたジジイごと貴様を殺（や）れば万事解決だ」

「「「いやいやいやいやっ！！」」」

眼帯の男の怒声に少女が堂々と弓矢を二人に向けながら言い放ち、男三人が悲鳴混じりの声で否定し、少女は弓矢を構えたままるで疑問符を浮かべたようにコクンと小首を傾（かし）げる。この少女、マジだったようだ。

「いや、あんなんでも知人なんでぶち殺すんはちょっと……」

「むぅ、仕方ないな」

申し訳無さそうなルストにそう言われて少女はむくれながらも弓矢の照準をチェルスから外すために下へと向ける。

（この嬢ちゃん、マジやったんやな。まあ、気持ちはわからんでもないけど）

（ここで逃げたら金盗まれるんじゃね？　と、思ってましたなんて

言ったらあの嬢ちゃん、マジで撃ってくるんじゃろな。だから絶対言わない）

ルストとチェルスはそんな事を同時に思う。にしてもチェルスのケチはここまで来たら大したものだ。

「よし！　ならクソガキ共！　このジジイの命が惜しかったら武器を捨てろ！」

チェルスの首を絞めてナイフの刃を喉元（のどもと）に突きつけてルスト達に怒鳴る。が、やっとまともな雰囲気になったと喜びからか、口元（くちもと）が緩みまくっている。

ルストと少女は内心キモいと思いながらもできるだけ遠くの方へと納刀（のうとう）した野太刀と弓と矢筒（やづつ）、それから短剣を放り投げる。

「よしよし。じゃあ、そこの女とこのジジイを交換だ」

ニヤニヤしながら眼帯男が言い放ち、少女が本当に嫌そうな表情を浮かべる。

ここで少女と眼帯男が知らない事実がある。

それはルストがメイジだと言う事だ。

だからこそルストは相手が知っている野太刀のみを放り捨てた。

起死回生の杖は今もルストのズボンの裾（すそ）に挟まっている。

問題は使用する魔法だ。

地面から手が生えるアース・ハンドという魔法も足を掴むだけで、両手はなんの拘束もされていないためにチェルスが殺（や）られる可能性がある。

ちなみに、石の槍は突くとういう点での攻撃なため、狙いをつけるのが非常に難しい。下手をするとチェルスごと貫いてしまう可能性すらあるため、最初から論外だ。

なら、ここで使える魔法は一つしかない。

というのがルストが野太刀を捨てた時に立てた作戦である。問題は使うタイミングだった。

しかし、その瞬間はすぐに訪れる。
ゴトンと、何かが落ちた音の後に幾つも同じような音が聞こえてきた。
それはさっき少女が射た果物が地面に落ち、続けて同じような果物が次々と落ちていく音だった。
眼帯男がそれに反応して目を向けた瞬間、気で強化した腕で素早く杖を引き抜き、唱え慣れた錬金の呪文(ルーン)を唱える。
「なに！？　メイジだと！？」
眼帯男だけでなく少女も驚いているが、眼帯男はすぐさまナイフでチェルスの首――厳密に言うと首にある動脈を斬ろうとするが、パシッとナイフを持つ腕が何かに掴まれる。
「……」
眼帯男の腕を掴んでいたのは素朴よりも品性が無く、無骨でいて貫禄がある物言わぬ土人形。
そう、ルストが選んだ魔法は錬金によるゴーレム生成(クリエイト・ゴレーム)だ。旅に出る前に何度も練習した魔法でもある。
だが、ルストは未だに明確な設定は思い浮かべてはいない。
例えば、ゴーレムには手動操作(マニュアル)、自動操作(オート)、半自動操作(セミオート)の三つがあるが、ルストは半自動(セミオート)である。命令をすればそれに従って動くが、自分で動かす事もできるのが半自動(セミオート)だ。ただし、大雑把(おおざっぱ)にだが
現在は半自動(セミオート)だが、ゆくゆくは全ての操作を状況によって使い分けたいと考えている。それに再生機能をつけるか？数はどの程度が良いか？大きさは？そう考えただけで選択肢はいっぱいある。
だからとりあえずは半自動(セミオート)、できるだけ頑丈で外面(がいめん)は二の次、大きさも標準の動ければ良いや、と言う考えの下に生成されたゴーレムである。
今は剣があるため、ゴーレムは今後ゆっくり考えようと先送りにしていた物をこの場で使う事になるとはルストとて思わなかった。
だが、それに感謝する。
ルストはゴーレムにナイフを取り上げた後、拘束しろと命令する

と、ゴーレムが腕を動かし、グググッと段々とナイフがチェルスから遠ざかっていく。
「畜生！　この土人形が！！」
眼帯男が悪態を吐き、その間に……
「ゴーレムだけに意識を向けていて良いのか……？」
「クッ……！？」
少女が自分の短剣を拾い、眼帯男の目と鼻の先に近づいていた。
この少女が大きな隙を見逃す訳がない。
そしてあまりの事に眼帯男の顔が引き攣る。だが、少女はそのままチェルスを拘束している腕へと短剣を突き刺してチェルスを開放する。
「おお！　ありがとう、お嬢さん！！」
「うるさい。さっさと消えろ」
嬉し涙を噴水のように流すチェルスに、少女は若干イラッとしながら言い捨て、更に眼帯男を追撃しようとしたが――
「ぐふぁ……！？」
その前にゴーレムによって羽交い絞めにされている眼帯男の腹部に気を纏った拳を叩き込んでいるルスト。武器も何も拾わずにそのまま瞬動で一気に近づいたのだ。
眼帯男はグルンと白目を向いて脱力すると、ゴーレムが拘束を解き、そのまま顔面から地面に倒れ伏す。
「……甘いな。殺せば良いものを」
少女が倒れ伏した眼帯男を一瞥した後、不機嫌そうな視線をルストに向けてくる。
「まあ、甘いんやろね。でも、血生臭い事件があった後で、ここの人等は純粋に祭りを楽しめるやろか？」
「……何にせよ助かった。私の名はシェルティ。おまえは？」
少女――シェルティは少し言葉に詰まったようだが、そっぽを向いて礼を言って名乗った。
「俺はルスト。家名は捨てた」

「だろうな。でないと、メイジがそんな格好をしてここにいる訳がない」
ルストはシェルティの態度気にした様子もなく名乗ると、何を今更といわんばかりに言い捨てるシィルティ。
「で、この人達はどうすんの？」
「この騒ぎを聞きつけた衛兵達が連行してくれるさ。……さて、私は面倒な事になる前に行くとしよう」
ルストが周りの倒れている男達を見回しながら聞くと、シェルティが即座に答えた後、一旦放り捨てた弓矢を拾ってからチェルスにそう切り出す。
「チェルスとか言ったな。これは迷惑料に貰っていく」
「へ！？　は、はぁ、構いませんですじゃ」
チェルスは完全にシェルティが放つ雰囲気に呑まれ、ついついそう返事をしてしまう。
（迷惑料って、シェルティに巻き込まれへんかったら何も無かった気ぃするから迷惑料を払うんは筋違いやと思うんやが？）
そんな中、ルストは根源的な事を思った後、まっ、チェルスさんが良いなら良いか、と思い直して傍観していると、シェルティがじゃあな、と言って去っていった。
そんなシェルティの背中を見送っていると、遠くの方からガチャガチャと重そうな鎧を纏った人達が走ってくる音が聞こえてくる。
「わしらも一時退散しますぞ！」
これ以上は面倒事はごめんだと逃げる準備をするチェルス。
（流石に衛兵は金を盗る――なんて真似はせんじゃろ）
と、内心思いながら。とにかく筋金入りの守銭奴（しゅせんど）である。
（そやな。なんか戦ってる途中で屋台を幾つか壊した気ぃするし。このままやったら弁償とかさせられそうやし）
ルストはそう結論を出すと行動は速かった。
「逃げんで！」
自分の野太刀を拾い上げてそう告げると、チェルスも頷いてガシ

ャガシャ聞こえない方へと全力で走り出した。
チェルスは泣きそうな表情をしているが、ルストは心底楽しそうに笑っている。
（こういうハプニングも旅の醍醐味（だいごみ）やし、やっぱ旅はええなぁ！）
そう思いながら――

あれからしばらくはチェルスと共に事件が起こったところと別の通りで祭を楽しんでいたが、チェルスはそろそろ大丈夫だろうと自分の店へと帰っていった。
その後もルストはできるだけ金を使わずに一人で祭を楽しんでいると、いつの間にか日が沈みかけていた。
だからそのまま宿屋へと戻る事にした。凄く楽しみましたー！と言わんばかりのホクホク顔で
「お、いらっしゃー――って坊主か。どうだい楽しんできた――ようだな、顔見りゃわかる」
「わかりますー？」
完全に苦笑いの宿主にも気にした様子もなく、にまにま笑顔で聞き返す。宿主が完全にドン引きだ。
「ま。疲れただろ？ゆっくり休めよ、なんか騒ぎがあったっぽいけど」
「そやね。そうするわ」
宿主の言う騒ぎにルストが関わっているとは思わずに気軽に声をかけ、ルストもまさか自分が関わったアレの事だとは思わずにそのまま自分の借りた部屋へと向かう。
収穫祭は終わった。だが――
「む？」
「え？」
自分の部屋に向かってる途中、自分の部屋よりガチャッと手前の扉が開いて見知った少女――シェルティが出て来た。

まさかこんなところで会うとは思って無かったのか、二人とも素っ頓狂な声を上げて驚いている。

だが、まだ面倒事は終わらない。

第十話　面倒事は終わらない（後書き）

収穫祭は一応これで終わりです。
まだ街は変わりませんけどね。
長かったなぁ（笑）

第十一話　話し合い（前書き）

今回はほとんどタイトル通りの会話だけになります。

前のはＮＧっぽかったので修正しました。急遽なので変なところがあるかもしれませんが。

第十一話　話し合い

ルストが自分が泊まっている宿でおっかない嬢ちゃんことシェルティと再開し、とりあえず下の酒場になっているホールまでやってきて適当に空いている――と言うか、ほとんど空いているカウンター席に着く。

「何か飲むか？」

「じゃあ水」

シェルティに注文を促されるが、ルストは真顔で即答する。

ハルケギニアでは飲酒の年齢制限なんてモノはないが、やはり未発達の体で飲酒する事で健康が損なわれるのは剣士として今は避けておきたいものだ。そして何より――

（俺は西洋酒が苦手やねん。日本酒やったら相応の歳になったら飲んでもええねんけどな）

と、ルストは思考して、シェルティを見ると常に不機嫌な顔を更に不機嫌にする。

「つまらん奴だ」

そう呟いてドボドボ自分のグラスに平民用の安物ワインを注ぐ。

「にしてもおまえがメイジとはな。驚かされたよ、魔法よりも剣をメインに戦うメイジがいるとは思わなかった」

「俺は魔法よりも剣で戦う方が合ってるんよ」

二人が自分の飲み物を飲みながら笑いあう。

「だが、旅をするなら自分がメイジだと前面に押し出した方がいい」

「え？なんで？」

「簡単だ。メイジは力の象徴。メイジだと言うだけで数多くの仕事が受けられるようになる」

グラスを傾け、ワインを覗き込みながら薄っすら笑うシェルティ。

ハルケギニアでは平民とメイジを犬と狼に例える事がある。
犬と狼は同じ種で見た目もほとんど同じだが、体も力も狼の方が大きく強いため、犬が平民、メイジが狼と例えられるのだろう。
現にそれ程――否、それ以上に力の差があるのだ、平民とメイジは。
だからこそ害のあるモンスター討伐や、要人の警護や暗殺等の主に戦う仕事では平民よりもメイジが重宝されるのだ。
しかもメイジ全体の人口はハルケギニアの三割未満しかいない。
その中で貴族くずれは更に少なくなるだろう。
これらの理由でシェルティはルストにメイジを前面に出せと言っているのだ。

「君は旅をして何年になるんだ？」
「昨日からやけど？」
ルストの答えを聞いてシェルティは唖然とする。
（なるほど、新人か。通りでメイジなのにマントも纏わず、杖も隠し持ってる訳だ。なら、使えるかもしれないな）
シェルティは何やら結論を出してニヤッと笑う。
それを見たルストは少し悪寒を感じた。
「私はトレジャーハントをしているんだ」
「は？」
突然の話題転換にルストは首を傾げる。
「ゴーレムを作った事から君は土のメイジだと推測するが？」
「え？そや、土のラインやけど？」
ルストの答えを聞いてますますシェルティの薄ら笑いが濃くなっていく。
（土のラインか。上々だな）
「せやけど、所詮ラインや」
シェルティの笑みを見なかった事にしてルストは苦笑しながらそ

う告げると、再びシェルティが唖然とする。
「おいおい、わかっているのか？　君はラインだ。メイジの多くがラインのままその人生を終えると聞く。今君はその年齢でラインなのだからもっと誇っても良いんだぞ？」
　シェルティがワインを一口飲んでから、説得するように言う。
（へぇ～、そうやったんか。家じゃトライアングルだとかスクウェアだとかうるさかったから知らんかったわ）
　と、こちらも水を一口飲んで心の中で感想を言う。
「……まあ良いだろう。とりあえず話を戻す。私はトレジャーハンターなんてものをしているために、遺跡等の罠（トラップ）が非常に厄介だ。そこで――」
「土メイジである俺が魔法で罠（トラップ）の索敵や解除をして欲しいってとこかいな？」
　シェルティの説明を引き継いでルストが言うと、シェルティはフッと笑う。
「話が早くて助かる。もっと簡単に言えば私と組まないか？　と、言う事だ、ルスト」
　シェルティの笑いながらの言葉言葉を聞いて、うーんと悩む。
（遺跡でトレジャーハントとかもう旅っちゅうか冒険の代名詞やん？　ええなぁ、魅力的やな。遺跡かてあちこちある訳やし？　世界見聞にも調度ええかもしれへん）
「まあ、すぐにとは言わん。じっくり考え――」
「ええよ」
「――って、早っ!?　良いのか!?　そんな簡単に!?」
　自分が言い切る前に答えを出されて驚愕するシェルティを他所にルストがニコニコ笑う。
「そういう旅っぽい事に憧れてたんや。調度良いと思うし、それにやる事はトレジャーハントだけやないいんやろ？」
「あ、ああ。トレジャーハントも金目の物がなければ無理だ。つまり、不発続きという事も有り得るし、モンスター討伐だってやる時

はやる。まあ、それ以前に遺跡にもモンスターが巣くってる場合もある」

「上等。むしろドンと来いや」

シェルティの説明を聞いて、既にやる気満々になっているルスト。

（まったく。子供みたいな奴だな。だが、頼もしいのは事実）

そんなルストを見て、シェルティは優しく微笑む。

「では、これからよろしく頼む」

「ああ、こちらこそよろしゅうな！」

二人はそう言ってパンッと握手する。

「あ。そういやシェルティさん、追われとったと記憶してるけど？」

「私達はもう仲間だ。呼び捨てで構わない。それから追われてた事に関しては大丈夫だ。少なくとも今日はな」

「え？　なんで……」

「奴らは憲兵（けんぺい）に連行された。だから奴らを遣（つか）わせた奴に情報が行くのは明日ぐらいだ。だから今日ぐらいはゆっくりできるのさ」

「なるほど」

シェルティの説明にルストは頷いて水を一口飲む。

対してシェルティは再びドバドバと、平民用のワインを注（つ）いでいる。

「問題はおまえのマントだな。杖も旅をしていると折れる事もあるだろうし、後数本必要だな」

「杖とマント、ですか」

「理由は先程話したな。当分はその杖で構わないが、問題はマントだ。そこらにある布切れを適当に纏うというのはナンセンスだ。それなら誰にでもできる。……まあ、魔法を使ってみろと言われれば終わりだが、それすら手品（トリック）でどうにかなってしまう事がある」

その説明を皮切りにガブガブとワインを飲むスピードを上げるシェルティにそれを見てあきれるルスト。

「そ、それやったら、チェルスさんに見繕ってもら――」

「あのジジイか」

ルストがあきれた顔を何とか修正させて愛想笑いを浮かべて言うが、シェルティの嫌悪感が篭もった呟きと共にシェルティの持っているグラスに罅が入った。

それを見たルストの愛想笑いが引き攣り、宿主からも「弁償だからなー」と注意を受ける。

だがその注意を聞いたシェルティは吹っ切れたのか、「そうか」と呟いた後に握力だけでグラスを握り潰す。

「……あ、あー……でも他に頼れる人おらんし……」

「……確かにそうだがな。あのジジイがそれ程役に立つようには見えないが？」

と、語尾を強めてからヤケクソ気味に言い放った後、宿主から新しいグラスを引っ手繰って勢い良く注ぎ、溺れる様にワインを飲みだす。

ルストは宿主の方を見るが、肩を竦められ――

「何か食うか？」

「オススメ」

同情された。

今はもう完全に深夜の時間帯で、外から鈴虫の鳴き声が聞こえてくる。

（とりあえず俺の方針はできたし、仲間もできて万々歳や。にしてもそこまで杖とマントが大事やったとはな。こらぁ、家紋だけ外して持って来ればよかったなぁ。あ、家に取りに帰ればええやん！――って、もう回収されとるか……。やっぱチェルスさん頼りやな。また命助けたんやからちょっとはまけてくれる筈や）

多少黒い事を考えつつ、宿主に出された軽食に手をつけた。

こうして夜は更けていく。

ルストがそろそろシェルティの飲酒を止めようと思い立った頃、ドゥルク領とは別の領のとある屋敷のとある一室で一人の男が扉の側に立ち、ベッドがある方を眺めていた。

「どうだった？　奴らは帰って来たか？」

月明かりしか光のないくらい部屋で男の声が響く。声からして中年の男だろう。しかし声の主は扉の側に立っている男からではない。

「いやぁ、帰って来ませんでしたね、彼ら」

今度はお少し冷静でいて若い感じの声が響く。声の主は今度こそ扉の側にいる男だ。

「くそう！　また取り逃がしたかっ！」

中年男が怒鳴ると、パリンッとガラスが砕けるが聞こえてきた。月が先程より雲から顔を出したのか、ベッドの上が少し照らし出される。

微妙に渦巻きがかっている髭と眉毛を持った三十代後半の男がベッドに腰掛け、憤怒の表情でワイングラスだったであろうガラス片が床に散らばって月光によりキラキラ輝いている。

ベッドに腰掛けている男の奥にも何かがいるのがわかるが、扉側の男からではそれがはっきり確認できない。

が、その男にはそれが何かわかっている。

（またヤってるよ。まったく、何人目かねぇ……）

その予想――というより確信に扉の側にいる男が内心、ため息をつく。

このベッド上の男はこの辺りどころかこの国にも名が轟く程の女好きなのである。これで予想できない方がおかしい。

そして扉の前にいる男も月光に照らされてその姿をはっきり現す。ボブショート呼べる長さの緑色の髪に茶色い瞳の垂れ目が軽薄さを出しているが整った顔立ちがそれを相殺どころかおつりまでくれる。

背は少し低いが、黒のローブの上に濃い緑色のマントを羽織っており、その手には指揮者の指揮棒のようなワンド型の杖が握られている。つまり彼はメイジだ。

「……ふん、所詮は平民の傭兵と言う事か」
ベッドの上の男はイライラしながら乱暴に奥にいる何か――いや、どこかを掴み、くぐもった女性の悲鳴が微(かす)かに聞こえてきた。
(ああ、やっぱりね)
その悲鳴に今度こそため息をつく。が、ベッド上の男はそれに意に返した風もなく、ただただ乱暴に何かを扱っている。
「まあ、私は主(おも)に屋敷の警護なので詳しい状況は入ってきてませんが……相手も平民の女性なのでは?」
扉側の男はベッドの上の男に気づかれないよう肩をすくめて――
(あーあーいいねー。私も久しぶりにしたいよ。まったく、一人だけ楽しんでないで私にも紹介しろよ、雄豚。性欲吐き出すだけなら、家畜で充分だろーがよ。私はもっと優しく愛(め)でるけどね!――って言えたらいいなぁ。流石に依頼主にんな事言えば即クビだけど)
自分の内心を悟られないように努めている。
彼がベッド上の男に反抗できないのは仕事の依頼主(クライアント)だからだ。

依頼主(クライアント)とは、読んで字の如く自分の依頼に見合った人物を金で雇(やと)う者の事だ。
扉側の男はベッド上の男に雇われているらしい。
本来、雇われる者も自分の意思で仕事を選べる筈なのだが、仲違(なかたが)いをせずに我慢していると言う事は物凄く好条件なのだろう。

「そうだ。美しく、気の強そうな女だ」
「へぇ、何故そのような女を?」
ベッド上の男の声から若干苛立(いらだ)ちさが抜け、優越感が姿を現す。
「当然。気の強そうな女を屈服させるためだよ」
(性格悪っ!? そんな事のためにたった一人の平民の女を追い回してるのか!? いや、確かにその気持ちがわからない訳ではない

けど）

　扉側の男がやれやれとため息をついていると、ベッド上の男がとうとう行為に移る。しかもかなり乱暴なためか悲鳴しか聞こえない。もし見えていたならかなり悲惨な事になっているのだろう。そんな行為しながらニヤッと笑うベッド上の男にドン引きする扉側の男。

「……で。屋敷警護の私とその話に関係が？」

「大有りだ。次は貴様に行って貰う」

「行って貰うって、その平民の女を捕まえに……ですか？」

「そうだ。最初の傭兵メイジから逃げ仰せ、平民の傭兵部隊を投入しても捕まえれん女だ」

　ベッド上の男が一旦行為をやめて扉側の男へと視線を向ける。

（私を警護から外してでも捕まえたい女……それはそれで興味が出てたなぁ。技術は家畜動物並みとは言え、見る目はあるからな、この依頼主）

　扉側の男もそう思考し、互いに沈黙するが、ベッドの上の男より奥にいる女性が酷いくらいに息切れしているおかげで静寂にはならない。

「頼めるか？」

「お任せあれ」

　沈黙に耐えれずベッド上の男が先に口を開き、それに扉側の男がすぐさま応える。

「確か、現在はドゥルク領に？」

「おそらくは、だ。エンドリス領の方へと逃げているやもしれん」

「ふむ。まあ、なんとかしますよ」

「ほう？　何か手があるのか？」

「ええ。私の勘はよく当たるんです」

「……」

　扉側の男のニッコリ笑顔での回答に、ベッド上の男が押し黙る。

「……まあ、ともかくこの件は任せる。風刃のヴェントよ」

「ええ。明朝出立致しますので、朗報を期待していてください、ジ

ユール・ド・モット伯」

ベッド上の男――モット伯に応えながら扉側の男――ヴェントが退室する。

すると、再び女性の悲鳴が大きくあがり、廊下まで聞こえてくる。

「あーあー。私も久しぶりに良い女を抱きたいねぇ。優しく、愛でるように」

と、本音をポツリと漏らして廊下をゆっくり歩いて行くヴェント。

月光が照らし出すヴェントの表情は、楽しそうだが非常に獰猛だった。

第十一話　話し合い（後書き）

今回は次の事件の序章みたいな感じでしたので、こんな感じになっちゃいました。

第十二話　刃風襲来（前書き）

前から見ている方はお久しぶりです。初めて読んだ方は初めまして。

いつの間にか物凄い時間が空いてた事にビックリですよ。私もそれなりに忙しかったので。

と、そんな事はどうでも良いので本編をどうぞ

第十二話　刃風襲来

シェルティと飲み明かした翌日、ルストは朝早くからチェルスを探していた。ちなみにシェルティはチェルスに会いたくないようで、宿屋で待機している。

もしかしたら既に出立してしまっているかもしれないが、まだいると信じて町の中を走り回る。いや、あのチェルスだから絶対まだいると確信していた。

何故ルストがチェルスを探しているかと言うと、昨日のシェルティとの話し合いで話題に出た杖とマントだ。

杖はどうかはわからないが、マントらしき物は初めて会った後に物色させてもらったあの時に見つけていた。

「やっぱー、もう行ってもうたんか？」

少し広い通りのど真ん中に立ち止まって後頭部をガシガシ掻きみしる。そんな時――

「おや？　ルスト殿じゃないですかの」

「チェルスさん！？」

今から村を出て行くだろうチェルスが馬車の手綱を持ってとぼけた顔を向けてくる。

「ちょうどよかったわ。探しとったんよ」

「わしをですかい？」

「いや、チェルスさんの荷の中に丁度マントによさそうな布があったやん？」

「ああ、布――ああ、シルクでございますか。確かにメイジの方の多数がシルク製のマントやローブを身に纏っていますじゃ」

そう言って積荷をごそごそと漁り出すチェルス。

貴族は皆（みな）メイジだが、メイジは皆（みな）貴族ではない。それは貴族であ

ったが家を勘当されたか、取り潰しになった等、理由は様々だ。
だがそれ故に貴族であったメイジもその頃の見栄で、最低でもシルク製のローブやマントを身に着けている。自分はメイジだと。平民とは違うのだと言いたげに。当然、シルクは平民が簡単に買える代物ではない。
そんな理由からシルクはその人が本当にメイジなのかどうか見分ける目安になった。もちろんそれはただの目安で、シルクよりも質の悪い物を身に着けている場合も当然あるのだが。

「お？　ああ、ありましたぞありましたぞ」
チェルスは積荷から目的の品――シルクの布を引っ張り出してにバッと広げる。布は真っ黒な生地過度な刺繍はされていない。むしろ地味と言える。
「そう、それ。いやー、これから旅してくんやったら剣士よりもメイジを前面に出した方がええって聞いたもんで」
「なるほど……そういう事でしたらこれは差し上げますじゃ」
チェルスはやんわりと微笑んでシルクの布をルストへと差し出す。
「え？　いや、でも野だ……あの剣も貰った事やし……」
「なに、昨日は迷惑をかけてしまいましたからのう。お詫びの印じゃよ」
元からまけてもらおうとは思っていたルストだったが、まさか貰えるとは思ってなかったのか戸惑う。だが実は――
（シルクとは言え粗悪品の安物じゃし、これ一枚くれてやっても大した損害にはならんじゃろ。しかもそれで人質に取られた事がちゃらになる……良い事づくめじゃのう、うへへへ）
と、いった打算が多分に含まれていたりする。やはりチェルスはチェルスだった。
「そ、そうなんか？　じゃあ、ありがたく貰っとくわ」
あまりにも爽やか過ぎるチェルスの笑みに若干薄気味悪さを覚え

るルストだが、とりあえずはシルクの布を受け取った。
そしてチェルスはルストから見えないところで小さくガッツポーズを作る。
「それではルスト殿、わしは行きますんでの」
「あ、そうやね。また」
「ええ、また会いましょうぞ」
チェルスは気のいい笑顔を浮かべた後、手綱を振るって馬車を進ませる。
「ほななーーっ！！」
ルストは去り行くチェルスへと大きく手を振って見えなくなるまで見送った。

「あんのクソジジイッ！　安物掴ませやがったなぁッ！！」
いきなりそう吼えたのは宿屋で待っていたシェルティだ。
ルストがシルクの布を持って帰って来たことに驚いて、経緯を聞いた後にトレジャーハンターとしての目利きで鑑定したところ、粗悪品という事が判明したためである。
そしてシェルティが吼えたところで宿屋の一階である酒場に屯（たむろ）していた連中が何だ何だとルスト達を眺める。
「べ、別にええんちゃうん？　旅しとったら汚れたり敗れたりするやろし」
「確かにそうだが、そういう問題ではない！　足を引っ張った癖にこの程度の品で釣り合いをとろうとするその性根が気に食わん！」
「あー、うん、そーやねー」
熱くなっているシェルティに苦笑いして適当に相打ちする。
そんな騒いでいる二人を眺めて昨夜みたいに備品を壊さないか宿主がビクビクしていたりする。弁償してもらうとは言え、一時的でも備品の数が減るのは痛いものだ。

（案外……と言うか絶対守銭奴やね、この娘）

宿主の状態を目の端で捉えて把握しながらちびちびと水を飲む。

現在は朝食中だ。

「まあ良い。今度会った時に請求してやる」

「と言うか、そんなんやったらシェルティも一緒に来れば良かったんちゃうん？」

「……そうだな。軽率だった」

その後悔を拭い去るように安物の平民用ワイングイッと煽るように飲む。

「さて、これからどうするか、だが……」

（切り替え早いなぁ）

落ち着きを取り戻したシェルティが空になったグラスを静かにテーブルの上に戻してそう切り出す。

「君はエンドリス領から、私はモット領から来た。追われているなら本来はさっさと別の領に移って振り切りたいと考えるものだが、それはおそらく向こうも考えているだろう。ならばこのままドゥルク領を南下する。そもそも私はドゥルク領の最南端にある遺跡が目的だったのでな。流石にこちらの事情は知らんだろう」

「なるほどなぁ。相手を撒くと同時に目的も果たしてまう。一石二鳥やね。せやけどその遺跡にはなにがあんの？」

「そうだな。何かがある――と言う可能性は低いだろう。とりわけ誰も近づかない場所でもないからな」

「え？　ほな、なんでそないなとこ行くん？」

シェルティの予想外の返答に呆気にとられるルスト。

「人によってはゴミに等しく見える物が、実は歴史的価値がある物かもしれない。まあ、そんな物があるのかもわからないが、そんなものを求めるのもロマンだろう？」

「確かに。で、そないな事をしてて生活費とか大丈夫なん？」

「昨日話したはずだ。モンスターの討伐もしていると。ルストから言い出した事だろう？」

「あ、せやったね」
忘れてたわ、と恥ずかしそうに笑いながら頭をポリポリ掻くルスト。
「……さて、こうして話していても埒があかない。そろそろ出立した方が良いだろうな」
「そやね。いつ追手が来るかわからへんしな」
「その通り。後は道すがら話せるだろう。互いに準備して再びここに集合だ。良いな？」
「ＯＫや」
「おーけー？　聞きなれない言葉や訛を遣うな、君は」
とは言うものの、シェルティは訝しげな表情ではなく、こんな奴もいるんだな、と言う優しげな微笑みを浮かべていた。
そのすぐ後に二人は同時に席を立ち、準備をするためにそれぞれの部屋へと戻っていった。そんな二人が部屋に戻ったのを確認した宿主は、備品が壊されなかった事にホッとため息をついていたりする。

準備を終えた二人は早速村を出て南へと歩みを進める。村を出てからの景色は草原に切り開かれたような一本道で、遠くにちらほらと林が見える。花の匂いと草の青臭い匂いがいっそう長閑な雰囲気を醸し出し、まさに旅と言った感じにルストは口元を緩ませた。
「なかなか似合っているじゃないか。……少し奇抜だが」
「ホンマ？　どの辺が？」
その中でルストの服装が話題になる。
「平民の服の上にローブみたいにマントを羽織っているところか」
「そう？　ホンマはマントとか動き辛くてな。これでも妥協してんねんで？」
ルストは身につけたマント――チェルスから貰った布――を掴ん

で鬱陶しそうにヒラヒラさせる。
ルストは今、元々着ていた平民が着る動きやすい服とズボンにフード付――特に裁縫も必要無い布の端同士を結んだ簡易なもの――のマントと言う井出達だ。これではただの平民が貴族――メイジごっこでもしているのかと思われても仕方がないだろう。
「だからもっと気にして欲しいのだが……」
「でも本格的なローブとかってめっちゃ動きにくそうやん？　そんなん嫌やで俺は」
「だがそれでは貴族ごっこに――待て」
シェルティが文句を言おうとしかめっ面で口を開いた瞬間立ち止まり、神妙な表情で前方を睨みつける。前方と言っても数メートル――数メイル離れたところに雑木林が立ち並んでいるだけだ。
だが――
「なんかおるね。これは……人の気配やね」
「ルストも気づいたか」
「そら、な」
二人は頷いて、数ある木々の中の一本を睨みつける。
「やれやれ、ばれてましたか」
ははは と笑いながら首を横へと振りながら二人が目に付けた木の影から一人の男が出てきた。
その男は、緑色のボブショートと呼ばれる長さの髪で軽薄さが滲み出ている垂れ目とニヤケ顔。しかし同時に整ってもいて軽薄さを打ち消している。
体格は線の細い長身でどこかひょろっとしてはいるが、服の上からでもそれなりに鍛えている事がわかる。
そしてなによりその男は黒のローブとマントを、そして右手にはオーケストラを率いる指揮者が持つタクトのような短い杖。紛れもなくその男はメイジだった。
「始めまして。と、言っておきますか」
「誰だ貴様。何故私達の前に――」

「モット伯――と、言えば私の目的がわかりますよね？」
警戒心剥き出しのシェルティの言葉をわざわざ遮って、自分の目的を晒す軽薄そうな男。男の目的を聞いてルストとシェルティが得物を取り出して構える。
「なぁ、シェルティ。俺らの行く先めっちゃバレとるやん」
「言うな。私も驚いている」
目の前の男を油断なく見据えながらも言い合う二人。
「いやぁ。私の直感はよく当たるんですよ。エンドリス領ではなく、ドゥルク領を南下するのでは、とね」
「たいした直感やなぁ」
「いえいえ、大したのは直感だけではないですよ？」
男はワンドを持っている右手を振り上げる。
「魔法もです。デル・ウィンデ」
その男はにっこり笑って杖を振り下ろす。
ルストは旅にでる前に自分の系統以外の魔法を予習してきた甲斐があったのか、その呪文で相手がどんな魔法を理解し、突っ立っているシェルティを軽く突き飛ばし、自らもその逆へと身を翻す。
その瞬間。
二人の間をゴウッと、風と共に見えない何かが翔け抜ける。否、風と共にではなく風そのものだ。それが通った跡は地面にくっきりと残っている。何かに切り裂かれたような痕が――
「な、なんなんだ！？」
「エア・カッターや！　風の刃を作り出して飛ばす魔法！」
突然の出来事にシェルティが動揺するが、ルストは落ち着かせるためにその正体を教える。
「つまり、奴は風のメイジか……」
「いかにも。刃風のヴェント。さあ、我が風の魔法で舞踊れ！」
忌々しげに吐き捨てたシェルティに意も返さないヴェントは二人へと杖を突きつける。
ここにルストにとって、初めての対メイジ戦の火蓋が切って落と

された。

第十二話　刃風襲来（後書き）

びょ、描写があまり無い……何か会話ばっかりな気がしてしょうがないですよ。

第十三話　林の中の逃走劇（前書き）

タイトルあまり関係ないですｗ

うーん、急展開過ぎたかもしれんです。

第十三話　林の中の逃走劇

目的の遺跡に向かっていると、ジュール・ド・モットの命令で刃風のヴェントと呼ばれるメイジが襲撃してきた。

とりあえず、見通しの良い場所では不利と判断して目前の林の中へと飛び込む。しかし――

「あんま意味あらへんなぁ」

「冷静になってる場合か！？」

この状況でルストがぼやくと、シェルティに怒鳴られる。そこでゴォッ！と、突風が吹くと同時にスパパーンと周囲の木々が綺麗に切断されていく。

そう、ヴェントが繰り出すエアカッターと呼ばれる風の刃によって隠れ蓑になる木々が片っ端から排除されているのだ。

「にしても風系統はやっかいやね。攻撃が見えへんわ」

「おまえもメイジだろう！？　なんとかしろ！」

「無理言うたらアカンって。土メイジと風メイジは相性悪いねんで？　属性的に」

と、互いに言いあいながらも幾つもの風の刃が襲い来る中、林を駆け抜けていく二人。

こんな世界にも一応相対性的なモノは存在する、水は火を消し、火は風で燃え上がり、風は土を削り、土は水を塞き止める。

とは言え、最終的に威力が強い方が勝つのは当然だ。水は土を崩し、土は風に耐え、風は火を吹き消し、火は水を蒸発させる事もあるのだから。

つまり、相性はあれど結局決め手はメイジの腕次第という事だ。

その点、ルストとヴェントの系統は互いに相対する。が、ルストは最初の一撃で見極めたのだ。魔法はヴェントの方が上だと――

「余裕ですね。なら、もっと数を増やしましょうか？　男の方は任務上どうなっても良いんですし」
二人の遥か後方でにっこり笑って――目は笑っていないが――連続でエアカッターを唱えて放つ。
その内の一つがルストに直撃するコースで飛んでいくが、ルストはひょいと体を半歩跳んで避ける。
「ちょ！？　俺はどないなってもええんかい！？」
「はい♪」
ルストが逃げながら文句を叫ぶが、返ってきたのはにこやかな笑顔と共に即答だった。
（まあ、ええわ。もともと林ん中に逃げ込んだんが間違いやったんや。魔法の腕は向こうが圧倒的に上やろうしな。こんな林ん中やったら刀もよう振り回されへんっちゅーねん。でもまあ、魔法で一発逆転も――）
ルストは走りながら杖を取り出し、錬金を唱えて杖を振る。すると――
「うおっ！？」
二人を追尾していたヴェントの真正面に石の槍が一本出現し、突き殺そうとするが寸前で杖の周りに緑色の光が纏わり、一閃。
すると、石の槍が綺麗に切断される。
「うわーお、ブレイドかいな。接近戦もできんのね……」
「君こそ、マントを身に付けているとは言え、本当にメイジだったとは思いませんでしたよ。これは手加減はいりません、ねっ！！」
今度は今までと違い、ヴェントは薙ぎ払うように杖を横へ一閃する。
（またエアカッター……いや、ちゃう。エアカッターやけどこれは……）
ゴウッと突風が吹くのは変わらないが、今度は地面を切り裂いて

いない。先程までは縦に杖を振っていた。今度は横に――
（さよか）
その事に結論を出したルストは気で自らを強化する。
そして自分の横を走るシェルティを抱えてその場から跳躍し、眼前しある木の枝へと着地する。
その次の瞬間、爆発でもしたかのような音と共に何十本もの木々が扇状に切り倒され、土埃と粉塵が辺り一帯に舞い起こる。
当然、ルスト達が乗っている木も切り倒されており、シェルティを抱えたまま軽やかに着地している。
「な、なんだ、今の……」
「今のもエアカッターや。せやけど威力も範囲も洒落にならんレベルや。ただ横に振っただけでこうも変わんねんな」
シェルティが今起こった事に驚愕するが、ルストはシェルティを見ずにヴェントがいるであろう方角を油断なく見据えたまま説明する。
「本来、縦切りのエアカッターを横切りにすれば範囲が広がるのは当然でしょう。まあ、威力の方は私が
少し本気を出したと思ってもらって構いませんよ」
ヴェントが粉塵の中からゆっくりと歩いて現れる。
「にしても今のエアカッター……下手したらシェルティごと、たたっ切ってたんとちゃうん？」
ルストは現れたヴェントを思いっきり睨みつけて聞くと、抱えられてるシェルティが息をのむ。
「そうですねぇ。でも、貴方がどうにかすると思ってましたからね。まあ、想像の斜め上を行く回避でしたが……」
そんなルストに怖気づかずに、やんわりと笑って――やはり目は笑っていない――告げる。
（なるほどなー。今の攻撃は俺の力量を測るためかいな。今の発言からすると、フライもレビテーションも使っとらん事は見抜いとるな。まあ、奴は風のメイジやし当然か）

先程の会話でそう判断するルスト。このルスト、学問的な事はバカがつくほど頭が悪いが、戦闘での駆け引きでは頭の回転が速いと言う都合の良いお頭をしていたりする。

「それよりいつまで私を抱えているつもりだ、馬鹿者」

「おごふっ！？」

ずっと、現在進行形でルストに抱え――所謂お姫様抱っこ――られているシェルティが羞恥で顔を赤らめさせながら、ルストの顎に切れの良いアッパー――体勢が体勢なためにそれ程威力は無い――を打ち込む。

体勢を崩したルストからスルリと逃れるように自らの足で立つシェルティ。

「ちょ！？　自分何すんの！？」

「うるさい黙れ」

打たれた顎を押さえながら文句を言うルストに、シェルティはプイッとそっぽを向く。

（ま、まま、まさか年下どころか男にあんな事をされるとは……夢にも思っていなかったぞ……）

そんなシェルティの顔がまだ羞恥で赤い事をルストは知らないし見えない。

「まったく何やねんな……」

「いやー。実に青春しているところ悪いのですが、私の存在を忘れてもらっては困るのですがねぇ？」

「「どこが青春か！？」」

シェルティの態度をため息をつきながらジト目で見ていると、ヴェントニコニコと笑い――今度はちゃんとした笑み――ながら自らを主張する。

「ま、なんにせよここは戦場なんですよ。気を抜いてもらっては困りますね。でないと、一瞬で終わってしまいますからね」

「じゃあ、なんで終わらせへんかったん？」

ルストの発言にヴェントの表情が、ピクッと反応する。

「ジュール・ド・モットからの命令なんやろ？　確実に、損害無く終わらせるんやったら、声なんかかけんと一瞬で終わらせたら良かったんとちゃうの？」
「そ、それは……」
「見るからに戦闘狂や殺人狂でも無い。金のためだけやったら、さっき言ったみたく隙突いて一瞬で終わらせたらええ。いや、魔法の実力でもそっちが上や。でも決めにけぇへんかった。……おまえ、ホンマはジュール・ド・モットの事嫌いやろ？」
「っ！？」
　ここで初めてヴェントが張り付けたような笑顔が崩れ、ルストを忌々しげに睨みつける。
「図星、やな。おかしいと思っとったんや。おまえみたいな実力者がなんで噂じゃ屑みたいな貴族のジュール・ド・モットに仕えてんのか」
「君にもわかるでしょう？　行き場の無い――貴族崩れのメイジにはこうやって生きていくしかないんですよ。貴族崩れには、平民みたいに農作物を育てる土地も技術も無い。だから自らの力を振るい、こうやって命がけの戦いをするしか無いんですよ」
　フッと自嘲気味に笑うヴェント
「それは逃げやな。土地も技術もない？　土地が無かったら借りたらええ！　技術が無かったら教えてもらったらええやんけ！　わざわざ嫌いな奴んとこで働かんでもええやろが！」
「確かに。私はとある貴族の次男でした。次男故に家督は継げず、親の引いた道の上を歩かざるを得ないかったでしょう。私はそれが嫌だったんです。これからは自分の思うようにやるんだと、自分の道を歩くんだと！　希望を持って家を出たのです」
　ルストの言い分に頷きながらも納得はしないヴェントが柔らかく微笑みながら身の上話を始めた。
「ですが、外の世界はそう甘くはなかった」
　そう言って暗い表情を落とす。

「普通の貴族として生きてきた私には絶望しか待ってませんでした。貴族としての誇り（プライド）が平民に媚（こ）びる事を許さず、メイジとしての力が平民を恐れさせる。だから私は――」

「もうええわ」

ヴェントの話を打ち切るようにルストは冷たく言い放つ。

「よう、わかったわ。おまえが甘ちゃんやっちゅう事がな」

「なに……？」

ルストの言葉にヴェントの顔が歪む。

「何が貴族の誇り（プライド）や。おまえはただ、自分がかわええんやろ？　やから、ジュール・ド・モットの元から離れられへんねん。報酬が高額なんやろ？　要は、自分が楽（らく）したいだけや」

「黙れ！　おまえに何がわかる！？　おまえみたいな――」

「わかるかいな。ただ、旅ってもんは良い事ばっかやない。苦しい事も、辛い事も、悲しい事も、むかつく事もあるもんやろ。そんな覚悟もない癖に、ただ家から逃れたいからって旅に出て勝手に絶望して何ほざいとんねん」

「クソガキがぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

ルストの言葉にヴェントがぶち切れ、とある呪文（ルーン）を唱えて杖を振るとヴェントの周りに竜巻が巻き起こる。

その魔法はカッター・トルネード。真空の層に挟んだ竜巻を発生させる風系統のスクウェアスペルである。その竜巻は触れたモノ、その全てを切り刻む。

今までにない暴風が林を蹂躙（じゅうりん）し、倒れていた木々と、残っていた木々を細切れに変えていく。

「ルストっ！？」

その暴風の余波がルストとシェルティを襲うが、ルストはとっさにシェルティを範囲外まで気を使って突き飛ばす。

あくまで自分は逃げない。その意思表明のごとく、ルストはカッ

ター・トルネードに切り刻まれていく。服が破れ、チェルスから貰ったマントが裂け、皮膚から血を吹き出そうともその場から逃げない。

「なめんなや……」

血に塗(まみ)れながらもルストは自らの腰にぶら下げた野太刀を手に取る。

「その甘ったれた根性……この俺が叩き直したらぁな！！」

血濡れのまま抜刀と同時に気を解放し、周囲の風をたたっ斬る。

「神鳴流がルスト、参(まい)る！」

見た目はボロボロだが、覇気全開のルストがヴェントへと突撃した。

第十三話　林の中の逃走劇（後書き）

後半、シェルティ影薄ｗｗｗ

ま、まあ、彼女は平民なので逃げる術はあれど、戦う術は今のところ持ってないので……

だって、風相手に弓矢って完全に詰んでません？

第十四話　刃　ｖｓ　刃（前書き）

ヤバイなー。のらりくらりと書いてるから展開が遅い……（汗）

第十四話　刃　ｖｓ　刃

刃風のヴェントが作り出したカッター・トルネードと言う全長３０メイルを超える竜巻が、周囲の木々を飲み込んでは粉々に切り刻んでいく。

そんな人工的な自然災害に野太刀片手に突撃するルスト。それに対してヴェントは憤怒の表情でその光景を眺め、カッター・トルネードの威力を強める。

「調子に乗るなよクソガキが！」

「ハッ！　最初の余裕そうな敬語はどこに行ったんやぁ！？」

ルストはそのカッター・トルネードを気を纏わせた刀一つで斬り裂いて突き進む。その際に気を纏っているにも関わらず、ルストの体を確実に傷つけていく。

「死にかけの分際でよく吠える！」

「あぁ！？　誰が死にかけやねん！　目ぇ腐っとんのとちゃうかワレェ！」

互いに相手を罵(ののし)りながら、一方は放ち、一方は突き進む。しかし、突き進んでいる方の口調が典型的な不良っぽいものになっている。

そんな二人の戦いを見つめる者が一人、その者はこの戦いにしてこの事件の渦中(かちゅう)である少女――シェルティ。

そんなシェルティは今――

（私が狙われ、この事件の中心にいると言うのになんだこの疎外感(そがいかん)は！　あいつ等、完全に私の事を忘れて好き放題しているだろ！　あぁ、ルストの奴怪我し過ぎだろ！　この後どこに行くかわかっているのか！？）

――物凄く不機嫌だった。色々な事で。

暴風に突っ込んで切り傷を徐々に増やしていくルストを見て、更

に眉間の皺(しわ)がより、ギリギリと握り拳に力が入っていく。
「とは言え、私の力では逃げ延びる事はできても、倒す――いや、まともに戦う事すらできん。これがメイジと平民の差、か。……と言うかアイツがバカみたいに突っ込まなければ普通に逃げ延びれた気がするんだがなー」
と、吹き荒れる暴風が木々を薙ぎ倒す音をＢＧＭにして、面倒そうに腕を組みながらシェルティは二人の戦いを見守るのだった。

ところ変わって二人の戦いだが、それ程展開していなかった。
何故ならカッター・トルネードという魔法の特性上は竜巻と変わらないのだ。竜巻は中心点に向かえば向かう程、その風は勢いを増し、鉄筋コンクリート構造や鉄骨構造の建築物を一瞬で崩壊させる事もある程だ。
とは言え、メイジとて一人の人間な訳で、流石に鉄筋コンクリートを一瞬で崩壊させれる事はできない――が、このハルケギニアに鉄筋コンクリート等、そんな物は存在しない。
ハルケギニアでもっとも多い建築物は木材で作られたものであり、その木材を完膚(かんぷ)なきまでに粉々にしているヴェントは明らかに凄腕のメイジだと言える。
もっとも、それに耐えて軽度の切り傷程度で済んでいるルストは異常と言えるのだが。
「どうしたクソガキ！？　足が止まってるぜぇ！？」
先程から前に進んでいないルストを見てほくそ笑むヴェント。
「うっさいわ！　今そっち行ったるから首洗って待っとれ！」
そう叫びながら一歩を踏み出すと、ズシリと風圧が増してルストの頬の皮膚を切り裂く。
（とは言ったものの、ちとマズイなぁ。このままやとジリ貧やし、かすり傷が無数にあったとしてもダメージを負っとる事に変わりはあらへん。……やったら、腹ぁ括ってやるしかあらへんな。神鳴流

青山宗家の真髄――弐の太刀を――）

そこまで考えてルストは更に力を入れて野太刀を握り締める。

（この世界に来て初めて使うから、ちっとばかしできんのか自信ないけど……なっ！！）

その場で気を纏わせた剣を一度振り、そこから切っ先をヴェントに向けて構える。

「行くで。コイツは俺の――いや、神鳴流のとっておきや」

ルストの雰囲気が変わったのを感じて、ヴェントはほくそ笑むのを止めて油断無くルストを見据える。

「神鳴流奥義――」

ルストはスッと目を閉じてイメージすると、構えた野太刀に莫大な気が集束していく。

イメージするのは過去の自分、弐の太刀を使いこなせていた自分、仲間内では異端の自分、そしていつか世界を旅するという夢を叶えようとした自分の姿を――

「斬魔剣・弐の太刀っ！！」

そしてルストはカッと目を見開き、そのイメージ通りに野太刀に纏わりついた莫大な気を解き放ってヴェントへと振るった。

神鳴流・弐の太刀――神明流の宗家である青山家のゆかりの者にしか扱えない秘剣にして退魔（たいま）の真髄（しんずい）。それは人を守り、魔を狩る退魔の剣と化して悪霊に憑かれたモノを傷つけずに悪霊のみを斬るといった芸当すら可能。

その極みは剣士自らが斬るモノを選択できるという。

そう、例えば、相手が放つ魔法――または障壁（しょうへき）を無視して相手を斬る事ができるのだ。

「なっ……っ！？　ばっ……っ！？」

ヴェントは突然、自分の右肩が切り裂かれて血を噴出した事に驚愕する。

（なんや？　今の手応え……）

それに対してルストはヴェントを斬った感触に疑問を抱いて眉を顰める。

だが、ヴェントが負傷した事でカッター・トルネードの威力が緩んだ事は事実。そのチャンスを見逃すほど、ルストは甘くない。

ルストは先程の疑問を頭の隅に置いてトンッと軽く跳ぶ。だが、それだけでルストがいた足元が弾け飛ぶ。ルストが使ったのはただの瞬動だ。ただし、オーク鬼の時とは違い、かなり本気の。

瞬動による猛烈な速さで一気にヴェントとの距離を詰めてルストは斬りかかる。

「チィッ！！？」

ヴェントは咄嗟に杖を右手から左手に持ち替えてブレイドを使ってルストの斬撃をなんとか受け止める事ができた。

「魔法はそっちが上――」

互いに鍔迫り合いして睨み合っているところでルストが口を開く。

「せやけど――」

徐々にルストがヴェントを押し出し、ヴェントは苦悶の表情を浮かべる。

「剣技――いや、接近戦は俺のほうが上や」

その言葉と同時にルストの刀がヴェントの杖を退ける。

体勢を崩し、致命的な隙を与えてしまった事にヴェントは目を見開いて焦り出す。それに対してルストは振り切った手を即座に返して再び斬りかかった。

それをヴェントは無様と呼べるように後方へと転がり、肩から血が噴出すのも構わず右手で大地を突いて即座に立ち上がり、杖を振るう。

「デル・ウィンデッ！！」

唱えるはヴェントが得意な横薙ぎのエアカッター。

「神鳴流――」
それに応えるようにルストは気を纏った刀を振り降ろす。
「斬空閃っ！！」
風の刃と気の刃がぶつかり合い、強烈な衝撃波が互いを仰け反らせて吹き飛ばした。それがちょうど距離をとる形となる。
「その剣は一体なんだ？　魔法を貫通させたり、今まで生きてきて見た事がない！」
「剣やない。技や」
ゼェハァと息切れをしながら問うヴェントに、刀を見せつけながら答える。
「神鳴流は魔を調伏するんや。それは魔法とて同じ。なんせ『魔』法やねんからなぁ」
言葉遊びやけど、と付け足してルストはクカカと笑いながら補足し、ヴェントは驚愕すると同時に歯軋りする。
そんな剣術は聞いた事が無い、と。
「ほれから俺がメイジやって事、忘れんといてや」
ルストは左手に持った鞘を腰のベルトに挿し、代わりに杖を持って振るう。
すると、ヴェントの眼前に石の槍が現れ、貫かんと襲い掛かる。
それをヴェントは寸でのところで躱す――が、そこに影が差す。
ルストが野太刀を振りかぶりながら飛び掛ったのだ。
「ぬおっ！？」
ヴェントはブレイドでそれを受け止めるが、勢いで押し切られる。
そうして体勢を崩させたところで更に体を回転させて遠心力を使った二撃目を放つルスト。これ以上は避けられないと判断したのか、ヴェントは横に跳んで避ける――が、そこにルストの石の槍が襲い掛かる。
それを頭から地面に突っ込むようにして避けるヴェント。カッター・トルネードから一変、防戦一方に追い込まれた。
（馬鹿な……！？）

ヴェントは必死にルストの斬撃を避けつつ焦燥する。
（俺は魔法の腕は良い方だと自負している。兄に負けないように鍛え続け、旅に出てからは更に磨きがかかった筈だ！）
ルストの喉を狙った突きを、ヴェントはブレイドでなんとか軌道を逸らす事に成功する。が、ギリギリだったためにヴェントの髪が数本切れて舞い落ちた。
（だが、魔法の腕では勝っている筈なのに、奴の動きとシンメイリュウとやらに圧倒されている――奴は、メイジにしてメイジ殺しと言うふざけた存在だとでもいうのか……！？）
「どうしたん？　全然、手ぇ出てへんやん。甘ちゃん野郎」
「うるさい！」
ルストのからかうような言葉にイラつき、エアカッターを近距離で放つが、ルストは瞬動で距離を取り、余裕を持って避ける。
（クソっ！　奴の動きが速過ぎる！）
距離をとったルストを忌々しく睨みつける――が、すぐに頭を振る。
（もっと冷静になるんだヴェント、奴の口車に乗ってはならない。私は風のメイジ――他の系統とは違って器用な真似ができるんだ。ならば――）
深く息をしながら頭を冷静にしていくヴェント。カッと目を見開いて杖を振る。
「デル・ハガラース」
ヴェントはそう唱えると、自分の体が軽くなるのを感じた。

ヴェントが唱えたのは軽量と呼ばれる呪文だ。
軽量は自分の体を名前通りに軽くすると言う効果が得られる。
効果は一時的だが、メイジの腕によって時間も効果の高さも変わってくるのは当たり前だろう。
そして、スクウェアメイジであるヴェントが使ったのなら、その

効果も絶大と言える。

「ウインド」

ヴェントが風系統の基本魔法を唱える。ただの風を吹かすだけの魔法を。

だが、使ったのは誰もいない背後へと、だ。

ゴウッ！　と、突風が吹き、軽くなったヴェントの体を高速で前方――ルストの方へと吹き飛ばした。

「はぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

ヴェントはウインドのすぐ後に唱えたエアニードルで突きを繰り出し、土煙を巻き上げながら突貫する。

「んなアホな！？」

瞬動並の速さで突撃してきたヴェントに驚き、ほんの一瞬だけ対応が遅れた。

そして、その一瞬が選択肢を無くす。

一瞬、出遅れたせいで瞬動でも避けるのが難しくなった。つまり、受け止めるか、ダメージ覚悟で反撃するしかない。

ルストは即座に受け止める方を選択した。

地にしっかりと踏ん張り、ヴェントを見据えて気を纏わせた野太刀を上段の構えから一気に振り下ろす。

言葉にし難い爆音が辺りに響き渡り、風の刃と気の刃が再び激突し、辺り一帯の空間を揺らした。

そんな二人の戦いを見守って――飛んでくる木の破片や衝撃波を避けながら――いたシェルティは、呆然としていた。

「私は……思いもしない拾い物をしたのかもしれない……」

いや、呆然していた訳ではなく、感動して鳥肌が立っていた。

その鳥肌を抑えるようにシェルティは自分の体を抱きしめる。

出会った時には気楽な甘ちゃんのガキかと思っていた――が、違った。平民とメイジの力の差は比べるべくも無い。そしてメイジの中にも格差が存在し、ラインとスクウェアではスクウェアが圧倒して本来戦いにすらならない。

だが、ルストは平民の牙とメイジの力の象徴の両方を持ちいてスクウェアと互角以上に渡り合っている。

メイジにしてメイジ殺し――相反する二つが合わさったふざけたような存在だが、シェルティは既にルストの腕を認めていた。

「ルスト、無事でいてくれ。……これからおまえをこき使わねばならないのだからな」

シェルティは結構酷い事を呟きながら――しかし優しく微笑んでこの戦いの行く末を見守るのだった。

第十四話　刃　ｖｓ　刃（後書き）

ヴェント戦はまだ引っ張ります（笑）
次回で終わりかなー？

第十五話　再出発（前書き）

今回はちょっと長いです。が、やっとヴェント戦終了です。
急展開過ぎるような気もしないでもないですが……。

第十五話　再出発

ヴェントが使用した全力突貫のエアニードルと、咄嗟に繰り出したルストの気を纏わせた野太刀がぶつかり合い、空間が振動するような衝撃波が生まれる。

そんな現象を生み出した二人の力は拮抗していた。

「あぁ、やっぱ強いなぁ！　せやからこそわからへん。何故、逃げんのか」

「なん、だと……？」

ギチギチと牙と力の象徴が全力でぶつかり合う中で、問答をする二人。

ルストはヴェントが行った奇抜な行動におもろいと純粋に笑い、ヴェントは眉を顰めた。

「それだけの力があんねんからジュール・ド・モットのとこで現状維持んために働かんでもええ食い扶持が見っかるやろが！　なに現状で満足しとんねん！？」

「君にはわからんよ！　旅、と言うものがどれ程辛い経験を生むか――！」

「んなもん知るかいな！」

ルストはそう叫ぶと徐々にヴェントを圧して行く。

「俺は旅に出たんが今が始めてや！　これから辛い経験をするかもせぇへんよ！　けどなぁ――」

地にめり込む程に踏ん張っている足を引っこ抜き、力強く一歩を踏み出すルスト。

「楽しい事やおもろい事もあるかもしれへんやろ！？　辛い事がある『かもしれへん』なんてあるかもわからんもんに怯えて足止めとんちゃうぞ、このドアホがっ！！！」

そして全力で野太刀を振るうと、何かが弾けるような音と共にヴェントの手から杖が遠くへと飛んでいく。

そんな現状にヴェントは目を見開いた。殺られる、と。
ルストは即座に手を返してヴェントへと斬りかかる。
メイジとしての力の象徴が手に無い今、ヴェントはただの人間――無力な平民と何も変わらない。
（ああ、そうか。杖が無ければ私も平民と――いや、ただの人と変わらないのか……。私は、傲慢だったんだな。それに確かに旅をしていた時も楽しかった事があった。ただ一度、死に掛けただけでその記憶に苛まれ、全てが塗り潰された。こんな子供に悟らされるとは、確かに私は甘いのだろうな）
走馬灯を垣間見るようにスローモーションに感じる速さで迫り来る野太刀を見ながらそんな事を考える。
（太刀筋ははっきり見えているのに体が動かない、か……。私の完敗です、少年。戦いも、心の強さも……）
ヴェントは腹を括ったのか、目を閉じた瞬間にルストの野太刀が直撃して何か硬い物が折れたような音と鳴り、ヴェントを宙へと吹き飛ばす。
「安心せい」
ルストはそんなヴェントを見ずに腰のベルトに挿された鞘に野太刀を納刀していく。
「峰打ちや」
キンッと完全に納刀すると、ヴェントが勢い良く地面に落下して力無く横たわり、そのまま大の字になって空を見上げる。
「……殺さなかったのですか？　君も、存外に甘いですね」
やんわりと微笑みながら元の口調に戻ったヴェントが多少苦しそうに問いかける。
「まあ、そうやろな。けど、訴えかけた相手を殺すとかないやろ」
「……確かに」
ルストの言葉にクツクツと二人で笑い合う。そこへ――
「トドメは刺さないのか？」
少し離れたから場所からようやく終わったかと言う雰囲気を全身

から発しながらシェルティが歩いてきた。
「まあなー」
「ふむ、ならば私が刺しておこう」
ルストが気楽に応えたのもつかの間、シェルティは素早く腰から短剣を引き抜いて逆手に構える。
「ちょ、空気読もうや、シェルティ！？」
「ええい、離せ！　ここで殺っとくべきだ！」
そんなシェルティを羽交い絞めで抑え込むルスト。先程までの雰囲気がぶち壊しである。
「別に構いませんよ？」
そこでヴェントが発した言葉に二人の動きが止まる。
「私はユビキタスですから」
「ゆびきたす……？」
にっこりと告げたヴェントの言葉にシェルティが小首を傾げる。
「なるほど、ユビキタス――偏在か。んなら、斬った手応えが変やったんも、俺らの居場所がばれたんも頷けるわ。……まあ、ばれたっちゅーか、虱潰しやから見っかるのは当然やなぁ」
「どういう事だ？　教えろ」
「やからって、そんな胸ぐら掴まんでも教えたるから」
一人で勝手に理解して頷くルストにイラついて乱暴に胸ぐらを掴むシェルティ。
そんなシェルティの態度にルストはため息をついた。

ユビキタスとは、風系統のスクウェアスペルであり、通称は偏在と呼ばれている。
偏在は自分の分身を作り出す事ができる魔法であり、各々が意思を持ち、杖まで再現しているために魔法も使える。
術者の意志の強さによって分身との距離や数が変わり、術者との意思疎通も可能というとんでも魔法だ。

この偏在のために風メイジの一部が風系統最強主義者になっていたりする。例えばどこかの魔法学園の教師とか。

「なるほど、な。つまり、コイツが私達を見つけたのは偶然や勘でもなく、偏在を複数使ったたった一人の人海戦術と言う訳か」

「ま、そういうこっちゃ。偏在は風のスクウェアメイジの強みやからな。あん戦いで使わん方がおかしかったんや」

ルストの説明にシェルティがなるほどなーと頷く。が、それと同時に一抹（いちまつ）の不安が残る。

今まで戦ってきたヴェントは偏在――つまり分身体だった。しかもルスト達が向かいそうな場所全てに向かわせていたのだろう。

つまるところ、このヴェントを倒したとて、残る分身体達とオリジナルのヴェントをこれから相手にしなければならないと言うことだ。

一人でこれ程苦戦したのだから、それが複数で一気に攻めてきたら流石のルストでも一溜（ひとた）まりもない。

偏在が偏在を使う事はできない。あの戦いでカッター・トルネードを使った時点でヴェントがスクウェアだとわかっていたのに、偏在を使って来なかった事に気づくべきだった。

そこまで頭を整理したルストはちとマズイかなと思った。それはシェルティも同じ結論だった。

「あー。これから私の本体達と戦わなければいけない事を想像しているのですね？」

ヴェントの言葉に二人が思考の海から出てきて、未だに仰向けで倒れているヴェントを注目する。

痛みに慣れてきたのか――いや、そもそも偏在なのだから本来は痛みが無いのかもしれない――先程より顔色がよくなっていた。

「安心してください。私はもう貴方達を襲う事はありませんから」

「ほう、どういう風の吹きまわしだ？」

ヴェントは警戒しているシェルティの態度にフゥとため息をつく。
ルストはシェルティの言葉を聞いて、風メイジ相手だけに上手い事言うなぁ、という言葉は飲み込んだ。流石に空気は読める。
「私も以前、彼と同じように旅をする事を夢見ていました。その時の熱い――と、言いますか、そんな想いを思い出しましてね。色々とやり直してみたいんですよ。それになにより――」
ヴェントは悪戯が成功した時のような笑みを浮かべる。
「私はジュール・ド・モットが嫌いなんです」
そう告げられた二人はブフッと吹き出した。
「やっぱ嫌いやってんね」
「当たり前ですよ。あの雄豚、領土統治を臣下に任せて性欲を吐き出してるだけですからね。毎回毎回、情事を見せつけられるんですよ、まったく。酷いもんでした」
「それは……ご愁傷様だな」
これ幸いとヴェントがジュール・ド・モットに対しての不安をぶちまける。シェルティはそんなヴェントをかわいそうに思った。ちなみにルストは情事と聞いて、ボンッと顔を赤くしていたりする。どこまでも初心なルストだった。
「そうなんですよ。ホント、見せつけるんなら私も交ーぜーろーよばらっ！！？」
そんな発言をしたヴェントを無言で踏みつけるシェルティ。ヴェントが今までジュール・ド・モットに弄ばれた女達に悔いているのかと思いきやのこの発言である。シェルティはなんだか裏切られた気分になり、弄ばれた女達に謝れと踏みつけたのだ。ルストはルストで、偏在だしもう良いやと割り切っている。
「な、何をするんですか！？」
「貴様こそ、何を言ってるんだ？」
ヴェントの訴えにシェルティは火竜も逃げ出しそうな形相で睨みつける。今のシェルティならそこらにいるスクウェアメイジにも勝てるかもしれない。

そんな表情で睨みつけられたヴェントは一瞬だけ押し黙り――
「ま、まあ、それはともかくジュール・ド・モットは私がなんとかしますので大丈夫です」
話を逸らした。
あの話題のまま会話を続ける度胸はヴェントにはなかった。このスクウェアメイジ、甘ちゃんと言うかヘタレであった。
「信用できるん？」
ルストもヴェントの話題転換に乗っかる。シェルティはマジで怒らせんとこと思いながら。
「ええ、私が口を割らなければ雄豚は貴方達の居所がわかりませんし、話すつもりもありません。まあ、それどころか少し懲らしめてやろうかと」
「大丈夫なのか？　雄豚は腐っても伯爵家だぞ？　手を出せば――」
「わかってますよ。手はあります。あの雄豚の弱味はそれなりにありますので」
「そうか、わかった。なら私の分も雄豚を懲らしめてやってくれ」
「わかりました」
「なんや、もう完全に雄豚が定着しとるな」
クックックと黒い笑いをする二人にルストは苦笑いするのだった。
ふとルストが見上げた空には太陽がちょうど一番高いところに位置していた。

ヴェントの偏在が雄豚――ジュール・ド・モットにお灸をすえるために消えて、ルストとシェルティは当初の遺跡へと向かっていた。
「随分とボロボロになったな」
「せやなー。せっかくチェルスさんにマント貰ったのにもう年代もんみたいになってもうたわ」
ルストは所々破れたマントをヒラヒラさせながら口を尖らせる。
（いや、マントだけの問題ではないのだがな……）

そんな子供っぽい仕種をするルストを見て苦笑いする。さっきまで異常な程の動きをして死闘を繰り広げていたとは到底思えなかったからだ。

しかし、今のルストはまだ一四歳の子供だ――中身は初心なおっさんだが――そのためにルストの肉体は未だ成長途中。それ故に生前の青山影春という絶頂期の動きには程遠いと言う事を、シェルティはまだ知らなかった。

「後どのくらいで目的の遺跡に着くん？」

「何、後もう少しだ」

そう話しながらも足は止めない二人。

ルストは遺跡が待ち遠しくてワクワクしている。無邪気な弟でもできたような気分になり、口元が緩むシェルティ。

コイツなら盾どころかお釣りがくるな、と多少黒い事を考えながら。

しかし二人が遺跡に着くのは日が落ちた後だったりする。

ところ変わって、ジュール・ド・モットの屋敷へと帰ってきたヴェントは、趣味の悪い煌びやかな装飾品が所々配置されている廊下を足早で進みながら主の部屋へと赴いて扉をノックした。

「入れ」

どこかしろ貫禄がある男の低い声が扉越しに聞こえた。それと同時に女の喘ぎ声も。

「失礼します」

またか、この雄豚と思いつつも冷静に取り繕ってヴェントは扉を開けて中に入る。

「ふむ、どうだった？」

ジュール・ド・モットはヴェントの方を見もしないで聞いてくる。どうやら弄ぶ事に夢中になっているようだ。

それを見てヴェントはやれやれ、頭を振りながらジュール・ド・

モットの方へと歩み出す。
「いやー、ダメでした。手強いですね、彼女達」
「なに……？」
にっこり笑いながら告げると、ピタリとジュール・ド・モットの動きが止まり、ヴェントを睨みつける。
「貴様ほどの腕を持つメイジですら捕まえられんとは到底思えんな」
「とは言え、私にも絶対はありませんよ。そう――」
ヴェントはにっこり笑顔から人をあざ笑うような笑顔に変わる。
「貴方も、ね」
そのまま、ヴェントは懐から杖を取り出して振ると部屋の中で突風が舞い起こり、机の上や引き出しの中にある羊皮紙の書類や、ベッドのシーツ、その他部屋に飾られた趣味の悪い装飾品が乱れ飛ぶ。
「な、なにをするのだヴェント」
「いや、なに、そろそろお暇を貰おうかと思いまして」
乱れ飛ぶ物の中から目的の品々を見つけたヴェントはレビテーションを使って手元に引き寄せる。
手元に引き寄せたのは、数枚の書類。内容はモット寮の納税額や、出費記録のような物である。
ヴェントはパッと見てもうんざりするぐらいの納税額と用途不明の出費が何十件と存在していた。
「いやー、儲かってますね。定められた税の五倍以上せしめてるじゃないですか」
「き、貴様は何をしているのかわかっているのか！？」
「わかってますよー。これは立派な反逆だ、とね」
突風が止むと、全裸のジュール・ド・モットがヴェントに詰め寄ろうとするが、汚物を見るような眼で睨むと、ジュール・ド・モットは動かなくなる。
そしてその奥にいた女性がシーツを引っ掴んで自分の肉体を隠している光景にヴェントはニヤニヤ笑いだす。まるでジュール・ド・モットなんぞ目に入っていないように。まあ、誰も中年男性のブラ

ンブランしている裸体なんぞ見たくは無い。
「ぐぬぬっ……出合え出合えっ！！」
ジュール・ド・モットが時代劇の悪代官――事実、悪代官だが――のような台詞を吐くと、部屋に傭兵やメイジが雪崩れ込んでくる。
ヴェントはそれらを一瞥してぷふぅと気の抜けたような溜息をついた。
そして杖を振るう。唱えるは刃風の名にふさわしい真空の刃を持つ最強級のスクウェアスペル――カッタートルネード。
何かが爆ぜるように部屋を再び突風が――暴風が巻き起こり、家具を、装飾品を、壁を、天井を、そして人を飲み込んでは切り刻んで舞い上がる。
「貴様ぁ！！　こんな事をしてただで済むと思うなよっ！！」
「ええ、分かっているつもりです」
血管がはち切れそうな程に怒鳴るジュール・ド・モットに対して、ヴェントは吹き荒れる竜巻の中心で髪が乱れ、ローブが己の体を打ちつけるのも気にせずに静かに告げる。
「これから私には苦難が立ちはだかるでしょう。まあ、貴方に対する牽制は、これらを城に提出すれば事足りるかと……思いますが？」
「なぁっ……！？」
ヴェントは先程レビテーションで手元に引き寄せた書類の束をヒラヒラとチラつかせて勝ち誇ったように笑う。
「ですが、まあ、これが無くても今の私なら大丈夫ですよ」
と、言いつつもしっかりと書類の束を懐に入れている。
「何故なら、彼らと出会う前と後とでは、心の強さが違うからです」
そう告げた瞬間、更にカッター・トルネードの威力が増し、周囲にいた傭兵やメイジ達の大半が戦闘不能に陥った。
ヴェントは辺りを見回して、既に相手の戦力が無い事を悟ると、カッター・トルネードを止める。ジュール・ド・モットの寝室は、既に廃墟も同然と言える程にボロボロになっており、趣味の悪い煌びやかな装飾品や、豪華な刺繍が施された絨毯も、部屋にあった物

全てがゴミと呼べる残骸に変わり果てていた。
「ヴェントォっ！！」
ヴェントは聞こえてきた怒声の方を見ると、全裸のまま自分の杖を持って突きつけてきたジュール・ド・モットがいた。
「へぇ、まだやるんですか？　自分の周りを金で雇った奴らに守らせてるだけかと思ったのですがねぇ。……来いよ、水のトライアングルメイジ――波濤の雄豚」
「貴いいいいいい様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
ヴェントの嘲笑うかのような台詞にジュール・ド・モットがリミットブレイクした。ジュール・ド・モットは叫んだ勢いのままに呪文を唱えてがむしゃらに杖を振るう。
すると突如、虚空から津波のように大量の水が出現した。
「見よ！　この水のスクウェアスペル――タイダルウェーブこそが波濤の由来よぉっ！！」
ジュール・ド・モットがブランブランさせながら得意気に叫ぶ。

タイダルウェーブは文字通り津波の名を冠するトライアングルスペルにして、水系統の数少ない攻撃魔法の一つである。
圧倒的な水量で敵へと押し寄せる。それは押し流したり、溺れさせたり、あるいは水圧で圧死させたりする事も可能と一見汎用性があるように思えるがやっている事はただ水を大量に出すだけの魔法だ。

それに対してヴェントは猛烈な勢いで迫り来る津波を冷ややかに見つめ、ただ一言。
「デル・ウィンデ」
そう呟いて杖を振るう。すると刃風の名にふさわしい風の刃――エアカッターが杖から放たれ津波を縦に真っ二つに切り裂き、その

ままジュール・ド・モットの杖さえも切り裂いた。
だが、やはりトライアングルとスクウェアには絶対的とも言える精神力の差が存在する。戦いなれたメイジなら戦い方次第で変わってくるかもしれないが、年がら年中情事に明け暮れているジュール・ド・モットでは戦闘特化のスクウェアに勝てる訳が無かった。
「ばか……な……。私のタイダルウェーブが……私の杖が……」
「杖がなければ貴族もまた唯(ただ)の人。彼らに出会って学んだ事です。……そこで指でも咥(くわ)えて見ていろ、雄豚」
床に膝をついて茫然自失するジュール・ド・モットを、ヴェントが見下して吐き捨てるように言い放ち、杖を振る。すると風のロープが現れてジュール・ド・モットの体を拘束した。
ヴェントが使用したのは風のドットスペル――拘束(バインド)だ。読んで字の如(ごと)く、風のロープで相手を拘束する魔法である。
「さて、そこのお嬢さん、大丈夫ですか？」
裸体の中年男を拘束した事実に吐きそうになりながらヴェントは弄ばれていた女性に話しかける。とりあえず吐き気のする光景を記憶から抹消して美しい女性の艶(なまめ)かしい姿で上書きしようという魂胆(こんたん)だ。
「は、はい……」
あんな激闘の後だと言うのに傷一つ負っていない女性が戸惑いながら答える。天然のウェーブがかった茶髪に未だ幼げが残っている顔立ち、女性というより少女と言っても良い。しかも体は出るとこはそれなりに出てくびれてるところはしっかりとくびれている。流石はジュール・ド・モット、女を選ぶ目はある――が、このような美少女を好き勝手に弄んでいた事に吐き気を覚えた。
（美少女はもっと優しく愛でるべきだ）
だが、ヴェントも同じだった。ただ、鬼畜(きちく)か優しく愛でるかの違いなだけで。
「君は――いや、君たちは自由だ。これから、どことなりとでも行くといい。――ああ、故郷が知られているなら肉親と一緒に故郷を

出ると良い。もう二度と捕まらないように。さあ、行け」
　コクコクと慌てたように頷くと、足早に部屋とは呼べなくなった部屋から出て行った。おそらく同じ境遇の女達の所へと向かったのだろう。
「貴様、このような事をして唯で――」
「済むとは思っていません。さっき言いましたよね？　なので本来なら、貴方をここで殺しておくべきなのでしょうねぇ」
　ヴェントはジュール・ド・モットに絶対零度の視線を送り、杖を突きつけながら言い放つと、ヒィッ！？　とジュール・ド・モットは悲鳴を上げた。
「ですが、私もやり直すチャンスを与えてくれた身。ですから、貴方にもチャンスをあげます」
　だがすぐに杖の先からジュール・ド・モットを外して身を翻(ひるがえ)して壊れた壁から廊下に出る。
「このチャンスを生かすも殺すも貴方次第です。まあ、殺してしまったその時こそは覚えていてください。――ああ、その拘束(バインド)はしばらく経つと勝手に消えますのであしからず」
　流し目でジュール・ド・モットを一瞥(いちべつ)した後、今度こそヴェントは寝室から立ち去った。

　ヴェントは屋敷から出ると、多少沈みかけの太陽がサンサンと少し眩しいくらいに照っていた。
「さて、これで私も追われる立場ですか」
　そんな夕日を見てしみじみと呟く。
（この手札も立場的には平民とそう変わらない私にとって使えるかどうかわかりませんし）
　懐にしまった書類の束をローブ越しにポンポンと叩いてため息をついた。
　しかしすぐにキリッとした表情になり、前を向いて歩き出す。ま

るで何も後悔していないかのように、吹っ切れたように清々しく一歩を踏みしめる。

その時、屋敷からかなりの数の女性達――美女達が飛び出してきた。その中にはさっきの美少女もいて、ヴェントに気づくとペコリと頭を下げて皆と一緒に駆けていく。

それを見てヴェントもハーレム目当てであの集団に混ざりたい衝動にかられながらも押し留まる。そっちの方が男としてカッコいいから。

「さて、ここから再出発ですね」

ヴェントは去り行く美女達を一瞥して、自分の夢だった自分の道を歩む旅へと再出発した。

さて、どこに行きましょうか、と考えながら自分の目を覚ませてくれた彼らにもう一度会えると信じて歩き出した。

第十五話　再出発（後書き）

はい、ヴェント戦ならびにモット編終了です。
え？　モットを倒すのは主人公の役目だろって？
なら、その幻想をぶち（ｒｙ
いやー、まるでヴェントが主人公のように書いてしまいましたｗ
今回の話の半分ぐらい持って行きましたからね、彼。地味に今までで最長だったりします。
これでやっとシェルティは安心して遺跡巡りができる訳ですね。

ちなみにヴェントの口調ですが普段は敬語、感情が昂ぶると荒くなるという設定です。今更ですが。

第十六話　遺跡発掘の前に……（前書き）

うーん。どうにも話が進まない。この遺跡発掘編が終わったら数ヶ月ぐらい進めてみようかな？

第十六話　遺跡発掘の前に……

日が暮れたために一端野宿して過ごした二人。その際にやけにウキウキしていたルストを見てシェルティは優しく微笑んでいたりした。ちなみにルストがウキウキしていた理由は野宿と言う旅の醍醐味を味わえるからである。

二人は互いが見張りを交代し合いながら共に夜を過ごしたのだった。

そして日が昇り、何事も無く朝を迎えた二人は保存食である燻製された肉を串のような物でぶッ刺して、焚き火で炙って焼いて食べた。

朝から肉を――とは思うが、彼らは旅人であり、長時間動きっぱなしなために消費カロリーがハンパないのだ。例えば昼飯時とは言え、その時にちゃんと食事にありつけるとは限らない。戦っている時なのかもしれないし、罠に嵌って行動が取れなくなったりと、食事が取れない状況になっても活動できるようにしておく事が大切なのだ。それ故にこってりした物だろうが食べて温存しておく。

――と言う事をルストは今知った。

「君はホントに無知だな」

「いや、旅の初心者やねんから仕方ないやんか」

苦笑いするシェルティにルストは口を尖らせる。

「そうだな。知らなければこれから知れば良いだけの話だ」

「そうやんなぁ」

そんな和やかな雰囲気のままに目的地へと歩く二人だったが、目的の遺跡についた途端にルストは開いた口が塞がらなかった。

「えっと、これホンマに遺跡？」

唖然としたまま、遺跡に人差し指を向ける。

指の先には教会を古くさせたような――というか完全に老朽して壁の一部が腐って崩れている――建築物が森の開けた場所にポツン

と建っている。
「正真正銘の遺跡だ。君は何か？　遺跡は石造りでできたバカデカイ建築物や、罠満載の洞窟や何かを想像していたのか？」
「うぐぅ……」
図星だったのだろう、ルストは声を詰まらせながら一気に視線を彼方へと向けた。
だが仕方ないのだ。前にいた世界ではルスト自身がそう言う物が遺跡だと言う認識が強かったのだから。
「遺跡と言うのはな……」
そう切り出してシェルティ先生の遺跡の説明が始まった。

遺跡というのは古い時代に建てられた建築物、工作物や歴史的事件のあったために何らかの痕跡が残されている場所を指す。
種類上げれば集落遺跡、都市遺跡、祭祀遺跡、宗教遺跡、墓地遺跡――等、数多くの遺跡が存在する。
それは現代における寺や神社も――特に文化遺産も当然遺跡だ。
まあ、それは常識の範囲なのだが、剣を振るしか能のないルスト――影春は常識と言う物が欠如している。兄の詠春は常識があると言うのに。
いや、そんな事は今はどうでも良い。

「つまるところ、今回の遺跡は宗教遺跡であり、始祖ブリミルを奉る施設だった訳だ。数百年前まではブリミル教が所有していたのだが、この損傷だ。切捨てなければ自分達の予算が危ない。だが、これでも数千年も前にできているにも関わらずにたったこれだけの損傷だ。この遺跡がこの程度の損傷で済んでいるのは、建てられたその時に固定化の魔法をかけられたためらしい。流石は魔法――おい、聞いているのか？」

「はいはい聞いとるよー」
シェルティが長々と説明するが、途中からちんぷんかんぷんなルストは話半分に聞き流していた。ただ、知識として使える部分は自分なりに努力して理解しようとしていたが。
そしてまだまだ続くシェルティの薀蓄(うんちく)話を理解しようとしてオーバーヒートするルストだったが――
「っ……！？」
――ナニかの気配を察知してルストは目を鋭くさせる。
（何かおんな。それも複数。……一〇……二〇……いや、もっと、か？）
「どうした、ルスト？」
ルストの雰囲気が変わったのを感じ、薀蓄(うんちく)の披露(ひろう)を止めて眉を顰(ひそ)めた。
そんなシェルティを手で制し、そのまま腕を掴んで草むらの影へと引き込み、ルストは老朽教会の崩れた壁や開きっぱなしの扉を注視する。
「一体どうしたと――」
「シッ……ちょう黙って」
文句を言おうとしたシェルティを、ルストは一言で黙らせて神経を研(と)ぎ澄(す)ませる。
「来おった」
ルストがそう呟いた瞬間、崩れた壁と扉から巨体が複数出てきた。その巨体達はブホブホと独特な鳴き声で辺りを警戒するように見回している。
「オーク鬼……」
出てきた巨体はルストが以前、出くわしたオーク鬼。豚を無理矢理人型にしたような、脂肪なのか筋肉なのか丸々と太らせた二メイルを超える亜人であり、その名の通りの強さでオーク鬼は一匹で人間の戦士五人分の戦力を持つと言われている――にも関わらず、少数で群れを作るとされている。

だが、以前は六匹程度の群れだったのだが、今回は二〇匹を優に超える群――いや、もう大群と呼べる多さだ。まあ、それは見えるだけの数で、まだまだ中にいるとルストは感じ取っている。
「チッ。住み着いているのか。あの数は厄介だな」
「まあええやん。いくら数がおっても動きがとろいんじゃ負ける気はせぇーへんよ」
と、カカッと笑いながら言って、草むらから飛び出そうとするが――
「待てい」
「うぐぇっ！？」
――シェルティがルストのマントを掴んで止める。言うまでもないが、ルストのマントは端と端を結んでいるだけの簡易な物なので、引っ張られると丁度結び目が喉を絞める事になる。
「ちょ、何すんの！？」
「奴らを退治する前にやらねばならない事がある」
シェルティがあまりにも真剣に言うものだから、ルストは怒るのを止めてコクリと頷く。ルスト自身も己が無知と言うのは自覚しているため、判断はシェルティに任せたのだった。
「……では、頼みましたぞ」
「ああ、任せておけ」
「……」
ルスト達はいったん老朽教会から離れて近隣の村に立ち寄った。その村は、決して裕福そうには見えず、むしろ寂れているように見える。
それはその筈で、この村は老朽教会に住み着いたオーク鬼達に何度も襲撃されては食料を奪われ、家畜は殺され腹の中へ、ついでに数人の村人も犠牲になっているのだ。
領主にオーク鬼達を退治してくれと直訴したものの、流石に数が

多くて手の出しようがないそうだ。オーク鬼は人間の戦士五人分の戦闘力を誇る。腕の立つメイジなら問題は無いだろう。だが、領主自身は戦闘型ではなく、むしろ内政型だ。

モット伯の様にメイジを雇ってはいるが、ヴェント級でないと小数で立ち向かえないが、ほとんどのメイジはラインでその生涯を終える。平民を連れて行くとしても先程述べた通りに五倍の戦力が必要になるのだ。

それ故に今、戦力を整えている最中だったりする。

だが、その間にも村に被害が出てきているのは当然で、村としてはできるだけ――とは言わずに早急に退治して欲しいのだ。

そんな時にルスト達が立ち寄った――否、そうだろうと予想したシェルティが懐を潤そうと思い立って来た訳である。

（そこまで計算しとったんかい）

ルストは、村長と契約を交わして握手するシェルティに呆れ――を通り越して感心する。守銭奴、ここに極まれり、と。

契約を交わしてさっさと村から出てオーク鬼の退治に行こうとしたが、周りの村人達の様子が気になった。もう心身共々に疲弊していて瞳に生気が宿っていない。

戦闘者ならばやり方次第でどうにかなるものだが、ここにいるのはただの力無き平民。これがその現状なのだろう。

「姉ちゃん達、ホントに奴らをやっつけてくれるのか？」

その時、後ろから声が聞こえたために振り向くと、茶色い髪をショートカットにしているが、今は薄汚れてくすんだ色になっている。それと同じくボロボロの服を着た一〇歳くらいの子供がルスト達を睨んでいた。

「ああ、私達がオーク鬼を退治してくる」

「嘘だ！　あのオーク鬼達に挑んでどれだけの人が死んだと思ってんだ！　何人も……何十人も殺されてんだ！　なのにたった二人だけでそんな事できる筈もないだろ！？」

シェルティが断言するが、子供はイラついたように怒声を上げる。

その言葉に村人の何人かがこちらを見るが、即座に視線を逸らす。おそらく、子供と同意見なのだろう。

今までに何人も殺されたのに、たった二人だけで勝てる訳がない。そう考えるのは当然と言える。それでも村長が契約を交わしたのは、いち早くこんな状況を脱したいからだ。それが例え、小さ過ぎる希望だろうとも。

そして小さかろうが希望は希望。希望を抱いてしまえば、絶望した時の精神的ダメージが大きくなる。だからこそ、この村の人たちは否定する。

「そんなら諦めんの？」

「え……？」

そんな子供――いや、この場にいる全員に聞こえるように言うルスト。

「何もせんと、ただ蹂躙されんのか、この土地を出て行くのかの二者択一でええのん？」

ルストは膝をついて子供と目線を合わせて、ポンッと頭に手を置いて優しく撫でる。

「別に戦え言うてる訳やない。ただ、信じて欲しいんや。俺らが絶対、アイツらやっつけたるからさ」

そう言ってルストはニカッと笑った。

「でも……」

「大丈夫やて。俺ら、めっちゃ強いし」

居心地が悪そうに目を逸らす子供に尚、笑いかける。その時――

「オーク鬼だぁぁぁぁぁぁっ！！！」

村の男が悲鳴じみた大声を上げると、村人達が騒然となり、バタバタと家屋の中へと入り、厳重に鍵をかける。

「あ……ああ……」

ルストの目の前にいる子供も恐怖で呆然としてしまっている。

「大丈夫や」

そんな子供をルストは優しく諭す。

「俺らが絶対に守ったる」
そう言うとルストは立ち上がり、シェルティと頷き合うと、子供の返事を待たないでオーク鬼がやってきた方へと駆けていった。
本来なら、子供を安全な場所へと避難させるものだが、ルストはあえてそうしなかった。
何故なら、オーク鬼達を一匹たりともこの村に入れるつもりは無いからだ。

ルストとシェルティが村の端まで来ると、オーク鬼達が群れを成してぞろぞろ森から出てきた。その数、およそ十匹。人間の戦士、五〇人分の戦力である。正直、そこらの賊よりも戦力は上だ。
「どうするつもりだ？」
「援護は任せるわ。ちょっとしか見とらんけど、弓が得意なんやろ？」
そんな戦力を目の前にして二人は堂々と作戦を立てる。
「そんなん、俺が斬り込んで、シェルティがここから弓で狙撃すりゃええ話やんけ」
「まあ、それ以上の作戦を立てる余裕を与えてくれそうもないな。それ以前にこれが作戦かどうかも怪しいが」
余裕の表れなのか、村へとゆっくり近づいてくるオーク鬼達を見て、ルスト達も行動を開始する。
ルストは、シェルティよりも五歩前に出て、野太刀を鞘に入れたまま、切っ先を地面に降ろす。そのままブンッと思いっきり野太刀を真横へと振るうと土を抉って、ゴウッと大量の土煙が巻き起こる。
その光景にオーク鬼達の動きが止まった。
しばらくして土煙が晴れると、地面に長い線を引かれていた。まるでここが最終防衛ラインだと言わんばかりに。
「理解できへんやろうけど一応言っといたるわ」
ルストは引いた線よりも前に出て、オーク鬼達にゆっくり歩き出

す。その表情は前髪に隠れて見えない。
「この線より向こう側にお前等を行かせるつもりはあらへんから。そのつもりでな？」
そう宣言すると同時に家へと避難している人々達や、窓からルスト達の様子を伺っている人々の視界からルストが消失した。
そして次の瞬間にオーク鬼達の内、二匹から悲鳴が上がる。その背後にはルスト。そう認識したすぐ後に上空からオーク鬼の左右の腕が一本づつ落ちてきた。
よく見ると、悲鳴を上げた二匹のオーク鬼の腕が一本づつ無くなっていた。
「さぁ、死合いを始めよか……」
どこまでも無表情のまま冷徹に野太刀の切っ先をオーク鬼達に向ける。その無表情の瞳は、神鳴流を扱う者特有の、本来は白い筈の部分が黒く染まっていた。
この後、村人だけでなくシェルティすらも目にする事となる。魔を殺す神鳴流の真の戦いを。

第十六話　遺跡発掘の前に……（後書き）

またシェルティが説明役だけに……（泣）
次こそは必ず活躍させないと……

第十七話　オーク鬼、迎撃（前書き）

やっぱりあまり進まない……。
まあ、これが私の限界だということですなw

第十七話　オーク鬼、迎撃

黒く染まった無表情のルストの目がオーク鬼達を射抜く。その目を直視してしまった何匹かのオーク鬼は、怖気づいたように数歩後退する。村の方へと。

その瞬間、再びルストの姿が掻き消え、後退したオーク鬼の体が何度も切り刻まれたような傷が現れ、噴水のように血が噴き出した。

「行かせへん言うたやろ」

ズズンと倒れて絶命した三匹のオーク鬼に哀れみを込めた目で一瞥し、すぐに他のオーク鬼達に視線を向けて、はたと気づく。

ちょうど、残ったオーク鬼達に包囲されている場所に立っていた。だが、何の脅威も感じない。いや、脅威どころか感情すら沸かない。

ルストは驚いていた。自分の行動にではなく、自分の感情が冷めている事に。ルスト自身、微妙に戦闘狂だと言う事を自覚している。だが、今回はその戦いにおける楽しさが全くもって沸いてこない。

無表情のままオーク鬼達を見据え、何故こんな事になっているのかを必死に思考する。

（ああ、なるほどなぁ）

そして気がついた。今までの自分には守るもの等何も無かった。いや、関西呪術教会という組織しか無かった。だがそれは自分だけで無く、他の何千何万という人数で守ってきたモノだ。

それに比べて今回はどうだろう？　シェルティと二人だけで一つの村に住む数十人を守るために戦うのだ。

なるほど、この重圧では戦闘なんて楽しめる筈もない。だが、決定的な事がもう一つある。

それは、オーク鬼達がルストより遥かに格下だと言う事だ。

自らよりも弱いモノを倒して何が楽しいのか？　ルストはそう結論し、一気に意識を戦闘に集中させた。

仲間が殺された事で怒声のような鳴き声を上げながら右側と左側

にいたオーク鬼が同時に棍棒を振りおろす。ルストはそれを冷ややかに見つめた。避ける素振りも、大技を出す素振りも見せない。ただ行動で言ってのける。お前達の攻撃を避けたり、大技を繰り出す労力が勿体ない、と。

その直後にガンッと、堅い物がぶつかり合う音が二重に響き渡る。ルストは右手に持つ野太刀を逆手に持って棍棒を受け、もう一方を素手で受け止めている。もちろん、気を纏い、身体能力を向上させて、だが。

「ま、こんなもんか」

ルストが呟くと同時に体から膨大な気が溢れ出し、更に強化される。

その際に、左手で受け止めた棍棒を気を用いた握力で握りつぶす。

「神鳴流は武器を選ばず……」

更にそう呟いて左手を、棍棒を潰されて茫然としていたオーク鬼の腹に添え――

「破岩掌・裂」

――押し出すと同時に気を送り込むと、オーク鬼の体が風船のように膨れ上がっていく。

留まる事を知らずに醜く膨れ上がるオーク鬼の体がとうとう耐えきれなかったのか、背中が裂けて大量の血と共にズタズタに引き裂かれた数々の内臓が勢いよく噴き出した。言わずもがな、絶命である。

そんなオーク鬼を死に様はわかっていると言わんばかりに見向きもせずに右側にいたオーク鬼を――

「斬空脚・翔」

脚を振るい、気の刃を脚から発生させてオーク鬼を斜めに真っ二つにした。

「さて、次はどいつが死ぬんや……？」

そう呟いて、無表情に佇むルストは、まるで修羅のようだった。

破岩掌・裂は、本来、棍棒や大槌等の打撃系の武器での斬岩剣と同系の技だ。一撃で大岩を粉々に破壊すると言われている。

斬空脚・翔は簡単に言えば蹴りで斬空閃を繰り出す技だ。斬空閃は気の刃を飛ばして遠くの敵を斬る技である。

ちなみにルストは斬岩剣等の奥義を技だと思っている。もっと言えば奥義を奥義と思っていない。武術においての奥義とは極みを差す。

斬岩剣等の奥義だけでも五十は超える。それなら神鳴流は一体どれだけ極みがあるのかと、ルストは常々思っていたのだ。それ故にルストにとって奥義はただの技でしかない。奥義は大技では無い。

そんなルストの様子を離れた地点で見ていたシェルティは息を飲む。シェルティが見た限りではルストは一度とて殺した事が無い。いや、ちゃんと殺した事はあるのだ。まだ一人だった時に森で会ったオーク鬼達や賊達を。

だが、シェルティは初めて見たのだ。弟みたいだと思っていた少年が何の戸惑いも無く殺す様を。それも無感情に、無表情に、そして機械的に。

ルストを殺す覚悟の無い甘ちゃんだと思っていた。だが――

「そんな事ははなかった、と言うことか」

本来ならば嬉しく思える筈なのだが、シェルティは素直に喜べなかった。

（まさか私は、ルストに殺しをして欲しくなかったのか？）

普段の無邪気に笑う子供っぽいルストを思い浮かべてシェルティは思慮するが、すぐに首を横に振る。

（旅をしていて何も殺さないなんて言うのはナンセンスだ。旅をし

ていたらいずれ何かを殺す時が来る。これで良いんだよな？　ケイト……）

シェルティは脳裏に過ぎった少年を思い出して無理矢理に結論を出した時、ルストに群がっていたオーク鬼の集団から数匹こちらに向かって来る。ルストは他のオーク鬼を相手取るので手一杯のようだ。

（さて、ヴェントの時は活躍できなかったからな。働くとしよう）

シェルティは持っていた弓を構えて矢を幾つも手に取って弦を引き絞る。

風メイジ相手では矢は風に払いのけられる――が、今回は力が強いだけの唯の鈍足だ。ならばいくらでもやりようはある。

例えばいくら力が強く、タフだろうとも――

「数の暴力には勝てんだろう？」

そう言い放つと同時に数十本の矢を連続で解き放つ。

それをオーク鬼は棍棒で振り払う事で数本の矢を叩き落とす。そう、数本だけ。

残りの矢がオーク鬼の足に、腕に、肩に、腹に、胸に、目に、首に次々と突き刺さる。まるで矢の豪雨。だが、それでもシェルティは矢を射る事を止めない。標的が確実に絶命し、地に伏すその時まで止める事は無い。

何故ならシェルティは人間だ。それも力が弱い女の部類である。そんな彼女が蹂躙を代名詞とするオーク鬼と真正面から近距離で戦う事なんぞ、できる訳がない。だからこその遠距離攻撃なのだから。

シェルティの矢に倒れ伏すオーク鬼達。

そんな光景を見ていたオーク鬼達は尻込みする。これはなんだ？　なんの冗談だ？　今まで蹂躙されるしかなかった人間達が、自分達に牙を剥き、打倒してみせた。しかもたった二人で。それ故に未だに生きているオーク鬼達は恐怖した。まるで未知の生物と出くわしたような……。

まあ、オーク鬼達にそんな思考回路が存在する筈も無く、ただの

本能でそれを悟った。このままでは確実に殺される、と。
だから逃げ出した。村なんてものはどうでも良い。腹が減ったならどこか別の場所で探せば良い。とりあえず生き延びたかった。だが――
「なんや、逃げんの？」
オーク鬼達が地響きを立てながら走っている進行上に、いつの間にかルストが立ってオーク鬼達を静かに見ていた。
更に後ろから大量の矢が飛んできた。最後尾にいたオーク鬼がまともに矢の豪雨をその身に浴びて、崩れるように地に伏して息絶える。もう、オーク鬼達に逃げ道は存在しなかった。
「ほな、蹂躙される側の気持ち。味わってみよか？」
今回の戦いでルストは初めて笑顔を浮かべる。だが、それはとても冷酷な笑みだった。
そして程なくしてオーク鬼は全滅した。ルストの予告通り、村に一歩も踏み入る事すら無かった。

村人達は恐怖した。オーク鬼はもちろんだが、それを何匹も殺し尽くす少年が、だ。自分達の常識が通用しない存在。自分達には決して真似できない存在。だからこそ恐怖する。自分達が理解できないモノ程怖いものは無いのだから。
だが、村人達は知っている。戦いに赴く前に子供にかけた言葉と、優しそうな笑顔を。
だからこそ、村人達は恐怖すると同時にその少年が神々しく思えた。まるでイーヴァルディの勇者と言う物語上の英雄が降臨したかのように思えた。
思えたのだが――
「うっわくっさぁっ！？　なんやねんこの臭い……！」
「オーク鬼の体液だ。まあ、君は最前線で戦っていたから仕方ない」
ルストがオーク鬼の返り血塗れになったマントと服から発せられ

る悪臭に顔を顰める。そんなルストに対して遠距離から矢の豪雨を浴びせていたシェルティは返り血一つない。
「とか言いつつ俺から距離を取ってんのはなんでや！？」
「わかるだろう？　臭いんだ。鼻がもげそうなんだ。私から五〇メイル以内に近寄るな」
「んな無茶言わんといてんか！？」
シェルティは辛辣に告げると、ルストから距離をとる。が、距離をとった分だけルストが近づくので、更に距離をとると言ういたちごっこが始まった。
――思えたのだが、村人達の目の前で仲の良い姉弟のようなやり取りをしていたら、さっきの修羅のような光景が嘘のように思えてくる。しかもシェルティの対応が辛辣なので心なしか涙目になっている。まあ、悪臭がきつ過ぎると言うのもあるのだが。
いくら自分達の常識が通用しない異常な強さを誇っても、幼さの抜けない少年――中身はおっさんだが――に変わりない。
そして彼の態度から自分達に害はないと言う事と、小さすぎると思った希望が本当の希望だと言う事を悟った。
「ありがとうございます！　これで村も――」
「いや、まだや」
それ故に生気の無い目をしていた村長が二人に礼を言おうとしたが、ルストに遮られる。
「まだ、教会の方に今の二倍くらいのオーク鬼がおった。あれはたぶん、調達係かなんかやろ」
ルストの発言で村人達が震え上がる。アレの二倍以上？　あれだけでも充分に脅威だと言うのに更に倍。
村人達はオーク鬼の住処はわかってはいても、その数だけは把握していなかった――いや、できないのだ。何の力も無い平民がオーク鬼の住処を偵察するなんて自殺行為に等しい。そんな所に好き好んで飛び込むバカはいないだろう。
「そうだな。契約では教会に住むオーク鬼の掃討。まだ達成できて

いない。謝礼を貰うのは全てを終えてからだ」
　そうでないと信用に関わるからな、とシェルティは付け足してルストから距離をとりつつ冷静に告げる。
「ほんじゃ、今すぐの方がええな。せやないと調達係が帰ってけぇーへんのを不審がってまた来るかもしれへんし」
「そうだな。すぐにでも向った方が良いだろう。今なら奇襲できるかもしれない」
　と、村人そっちのけで作戦会議を行う二人。
　村人達も自分たちでは何も力になれない事を分かっているから口を出さない。が、やはり後ろめたさと言うものは存在する。確かに二人は強い。かと言って（見た目）子供の二人に任せっ切りで自分達に何かできる事はないのか、と。
「な、なぁ、俺たちに何かできる事は……」
「ない」
　村の中でも若い方の男が声をかけるがシェルティにばっさりと即答されて押し黙る。
　それもその筈。この村は何度もオーク鬼に襲撃されて食糧不足に陥っている。普段の――食糧不足に陥っていなければ屈強な体つきになっていただろうが、それは無い物ねだりだ。今は線の細いヒョロっとした頼りなさげの男に過ぎなかった。
「まあ、強いて言うならば報酬に期待する、と言ったところか」
（この娘、鬼やな）
　フフン、と誇らしげに笑うシェルティだが、その言葉で村人達の表情が引き攣る。この寂びれた村にどれだけの報酬を期待すると言うのか。だが、そうで無ければ命を懸けるに値しないのは事実なのだ。
　だが、ルストは金とか誇りとか、そんなものを懸けて戦うのではない。ただ純粋に自分の剣を更なる高みへ昇華するために戦っているのだ。まあ、その四割ぐらいは強者との戦いが楽しいからではあるが。

「ほな、行こか」
「ああ。さっさと終わらせて本来の目的を達成したい」
そう。二人の目的はあくまで遺跡の発掘だ。オーク鬼が遺跡に住み着いているので排除と共に小遣い稼ぎを兼ねているに過ぎない。こんな仕事はさっさと終わらせるに限る。
そうして、二人が村を出ようとしたところで――
「なぁ」
――声をかけられた。
二人が振り返ると、そこにいたのはオーク鬼迎撃前に話していた子供だった。
「……さっきは、疑ったりして……ごめん」
と、見るからにションボリした子供がペコリと頭を下げる。
「ええよ、ええよ。俺が君の立場やったら同じ事言っとるやろしな。もう信じてくれたんやったらええんや」
気にするな、と言う想いを込めて子供の頭を撫でるルスト。
「私のお父さん、あいつ等に挑んで殺されちゃったから……」
子供のその言葉でルストはピタっと撫でるのを止める。そして子供の顔を覗き込むように見て――
「奴らが憎いか？」
無表情に問いかける。
「当たり前だ！　あいつ等のせいで……。でも、私には力が無くて……」
その問いに、子供は悔(くや)しそうに唇(くちびる)を噛み締めて涙を流して答えた。
「そうか。ほんなら、俺が仇(かたき)を討(う)ったる。君の変わりに奴らをこらしめたるから……。せやから、お母さんと一緒にここで待っとり」
ルストは安心させるように子供を抱き締めて背中をさする。
ルストは知っている。この世は綺麗事では解決しない事を。復讐と言うのをルストは否定しない。例え、被害者がそれを望まないかもしれないが、そう言う問題ではない。これは自分の精神的な問題なのだから。奪われた、だから奪い返す。殺された、だから殺す。

世の中、負の連鎖を断ち切るために復讐しない人間も中にはいるだろう。

だが、自分の心を奪われた悲しみと怒りを癒すために復讐するのだ。そこに理屈なんてモノは存在しない。それをルストは知っている。

自分も遥か昔は復讐者だったのだから。

青山宗家だからとて、全員に血の繋(つな)がりがある訳ではない。宗家にも弟子がおり、その弟子に詠春と影春が当てはまる。そして、実力がついた者は、『青山』を名乗れるのだ。

そして詠春と影春はとある魔を討ち払うために、復讐者として神鳴流青山宗家の門を叩いたのだ。

そんな昔の自分とこの子供を重ね合わせて、その想いを受け止める。

「私の名前はリザ。じゃあ、待ってるからな、兄ちゃん」

しばらくして泣き止んだ子供――リザが頬を赤らめ、自分の名前を名乗りながらにっこりと笑って母親の元へと駆けて行った。

「ほな、今度こそ行こか」

ルストはずっと見守っていたシェルティに告げると、先に歩いて行った。

その顔は少し思いつめたような、そんな神妙な表情をしていたのを思い出し、シェルティは少し不安になるのだった。

第十七話　オーク鬼、迎撃（後書き）

今回はダーク・ルスト降臨ｗｗｗ
楽しめない戦いは大体あんな感じになる極端な子ですｗ

そして破岩掌・裂は完全なオリジナル技です。
神鳴流は今でこそ野太刀がメジャーですが、どこかで神鳴流は全ての武器に通ずると聞きましたので、打撃武器用の技をアレンジして体術化した、という設定です。

そして青山宗家の話や詠春の過去等は私が勝手に作った設定なので鵜呑みにしないでくださいなｗｗｗ

第十八話　オーク鬼、討伐（前書き）

やっぱりあまり話が進まないや……
もっと文字数増やしてみようかな？

第十八話　オーク鬼、討伐

オーク鬼討伐のために教会のような遺跡までやってきたルスト達。
二人は様子を覗うために適度な大きさの茂みの中へと身を潜める。
相変わらずどこか思いつめた神妙な表情をしているルストを横目で確認しながらシェルティは心配する。
そんなシェルティを露知らず、ルストは己の過去を思い出していた。
（あれからもう五年――いや、この世界のも入れるともう一八年か……時が経つのは早いなぁ、玉藻御前）
ルストは、今は亡き美しき仇を感懐しく思う。
玉藻御前――または玉藻前と呼ばれる妖狐――九尾の狐である。
玉藻御前は平安末期から存在し、絶世の美女に化けて鳥羽上皇に見染められるが、とある陰陽師にばれて姿をくらまし、なんやかんやで現代まで生き残ったという正史とは違う生涯を送っていた。
まあ、彼女の事は追々語ろうと思う。

ルストは玉藻御前の事を思い出しつつも、目の前でわらわらと気持ち悪い程に群れているオーク鬼達を眺める。
（まあ。奴らは複雑な思考能力を持っとらんさかい、あんな事にはならん思うけどな）
フゥとため息をついて頭を切り替える。
「で、どうやって駆逐すんの？」
「当然、私は遠距離からだ。奴らの体液は女として浴びたくはない」
（キッパリ言うなぁ）
胸を張って堂々と本音を言うルストは呆れを通り越して関心した。

いや、もう納得した。これがシェルティという人物なんだと。
「はいはい。もうこれだけ浴びとったら後どんだけ浴びても変わらんし、突っ込んだらぁ」
言葉とは裏腹にやけくそ気味のルストは吐き捨てる。が、そんな行動にシェルティがわずかに微笑む。
（ふむ、一時はどうなるかと思ったが、どうやら大丈夫のようだな）
ルストの様子が元に戻った事に、だ。
「ほな、背中任せんで、シェルティ」
「ああ、任せろ」
シェルティはそう応えると、近くにあった木を軽々と登って行く。まるで壁でも走っているかのように。
（ホンマに軽業師やね）
おそらく、木々の葉に紛れて姿を隠して狙撃するつもりだろう。そうなると、彼女を見つけられるとマズイ。つまり、シェルティを見つけようと探す余裕すら与えずにルストへと注目させなければならない。
だが、奴らの数は自分達の想像以上に数が多いようだ。見渡す限りでも先程、リザの村へとやってきた調達係の軽く三倍はあろうかと言える数だ。
（一体、どっから沸いてくんねん、マジで）
ルストはその数を鬱陶（うっとう）しがる。流石に三〇匹は超えるだろう数を一人で引きつけるのは無理がある。
――普通の人間ならば。
「はな、ちょいと狩るか」
ルストはその場で跳躍（ちょうやく）し、上空へと踊り出る。自分達に影が差し、上を見上げた一匹のオーク鬼が次の瞬間には降ってきたルストに斬り殺された。
「さて、こっからは一方的虐殺（ワンサイドゲーム）やけど、やる気……ある？」
斬り殺したオーク鬼の死骸を踏みつけながら言うと、他のオーク鬼達が怒ったようにブホブホと鳴く。

「うん、やる気満々やね。……その意気や良し」
ルストがそう呟くと同時に近くにいたオーク鬼がこちらへと駆けてくる、が――
「遅いっちゅーねん」
その前に瞬動で一気に近づいたルストによってその内の一匹が斬り倒される。
それに構わず、オーク鬼がルストの背後から襲いかかる。だが、ルストは見向きもしない。気づいてはいる。だが、見ない、避けない、防がない。何故なら彼は信じているからだ。
なんせ、背中を任せたのだから。
背後から襲いかかったオーク鬼の背中に幾つもの矢が突き刺さり、そのまま力無く地に伏す。言わずもがな、シェルティの援護射撃だ。
ルストは自分の信じていた事が現実となった今、背中を完全に任せて斬りこんで行く。一匹、また一匹と斬り、突き、殴り、蹴り、と攻撃を加えて狩って行く。そしてその中で生まれた隙を埋めるようにシェルティの援護がオーク鬼達を射抜いた。
だが、一向に数が減らない。教会の中からうじゃうじゃと沸いて出てくる。
（うざ……。一匹一匹はめっちゃ遅いし隙だらけで弱いけど、数が数やな。やるか？　まだ体がついてけぇへんかもしらへんけど。神鳴流の混成技……）
そう決意すると、ザッと踏ん張って立ち止まる。今まで瞬動で捉えれんばかったオーク鬼達がこれ幸いと一斉のルストへと群がりだす。
だが、それが彼らの命運を分けた。
「神鳴流……」
立ち止まったままできるだけ多くのオーク鬼達を引きつけて野太刀を振るう。
「百花絢爛斬空閃っ！！」
ルストが叫んだ刹那、ヴェントが放ったカッター・トルネードと

同等の暴風が巻き起こり、周りにいた二〇にも及ぶオーク鬼が細切れの肉片へと変貌した。

百花絢爛斬空閃は百花繚乱と斬空閃を混成させたルスト独自の神鳴流である。

刹那と呼べる時間で一〇〇度殺す事ができる連撃と共に気の刃を飛ばして辺りへとばら撒く凶悪な大技だ。

これは百花繚乱を最も得意としているルスト――影春だからこそできる大技なのだろう。だが、腕のある神鳴流剣士ならば見様見真似でできるだろう。詠春とか。

「痛っ……！？」

だがやはり体が成熟しきっていない一三歳と言う年齢では百花繚乱は反動が大きすぎたようで、ルストは痛みが走る肩を押さえる。

肩を痛めた代償に二〇匹以上のオーク鬼共を葬った。だが、まだまだオーク鬼が教会から姿を現す。

（ホンマ、切りないなぁ）

連戦で少し疲弊してきたルストの元へとゆっくりと間合いを近づけるオーク鬼達だが、次の瞬間には空から降ってきた矢の豪雨の餌食になった。

「こっちも数があったらどうにかなんねんけど……ん？　数？」

ルストは戦場のど真ん中でボーっと突っ立って色々考える。数が無ければ増やせば良い。他のメイジにはできないが、増やす事は土メイジには可能なのだ。戦力になるかはわからないが。

そういう結論に至ったら即座に行動。ズボンのベルトに挟んでいた杖を引っ張り出し、代わりに鞘をベルトに挟む。

「イル・アース・デル」

唱えるは錬金の呪文。造り出すは兵隊達。それすなわち――

「ゴーレム・クリエイト」
ルストの周りに土から生まれた鋼鉄の鎧武者達が八人程、姿を現した。初めっからこうすりゃよかったんやな、俺のアホとルストは心の中で愚痴る。
「神鳴流は武器を選ばず……」
だが、気を取り直して更に錬金を発動させると、鋼鉄の鎧武者達の足元から、野太刀、大槌、戦斧、斬馬刀、小太刀二刀、槍、薙刀、棍棒、とそれぞれ違う獲物が造り出された。

神鳴流は主に野太刀を使う。だが、野太刀だけではない。当然、神鳴流の野太刀に合わなかった者達も少なからず存在する。その者達のために野太刀だけではなく、他の武器での神鳴流を開発した。
その代表が破岩拳――または破岩打だ。
それらの技は野太刀を扱う者だろうが、そうでない者だろうが関係なく、一通り教えられる。それで自分に合った武器を選ぶのだ。まあ、大多数が野太刀を選ぶのだが。
それは自分が扱う獲物以外の扱いには長けてはいないが、技の基本は同じと言う事である。
そしてルスト――影春はより強きを求め、野太刀以外の武器に手を出した経験があるのだ。

「ほな行くで、野郎共！」
ルストの掛け声と共にゴーレム達がそれぞれの獲物を持って散開し、相対したオーク鬼共を撃破していく。
（いつかゴーレム達に神鳴流使わせたいなぁ。と言うか、ゴーレムを気で強化できたらええのに……）
ルストはそんな光景を見つつ、自分もオーク鬼を斬り伏せながらそんな事を考える。

そんな事を考えていたためか、戦斧を持ったゴーレムが、五匹のオーク鬼達に取り囲まれて殴られ蹴られ踏みつけられ、貪られるように無残に破壊された。

そんな哀れなゴーレムの仇と言わんばかりに斬馬刀を持ったゴーレムが一太刀で、五匹のオーク鬼を纏めて一刀両断する。

残り七体のゴーレムが奮戦し、できた隙をついてどこからともなくシェルティが放った矢が飛来してオーク鬼達を殲滅していった。

（あり得ない……）

そんなルスト達の奮戦を離れた木々の上から援護していたシェルティが、焦燥する。

（いくらなんでも数が多すぎる。これだけ多ければあの村は一溜まりもない筈だ）

シェルティは忌々しげに教会を見つめる。

そう、オーク鬼の数が明らかに異常だ。本来は群と言っても数十匹程度の少数で構成されている筈なのだ。だが、これだけ居ればあの寂びれた村だけでなく、他の村も纏めて蹂躙できる戦力は優にある。だが、そうしない。

（あの中にあとどれだけのオーク鬼がいると言うのだ……？）

離れた所にいるからこそ、状況を客観的に見れて何が原因かを突き止められる。

だが――

（離れているからこそ、手が出せん。それに矢にも限りがある。さて、どうする？）

現在はルストがゴーレムを生成したおかげで比較的に楽にはなっている。だが、オーク鬼の数が全く減る様子がないのだ。まるで今、生まれてきたかのような……

（バカな。そんな事はある筈がない。生態的にあり得ないだろう。ならば……）

シェルティがそこまで考えた瞬間、石の壁を重機で粉砕したような轟音が辺りに響き渡った。

「何だ！？」

シェルティは自分が隠れている事を忘れて叫んでしまう。だが、轟音のおかげでオーク鬼達がシェルティに気づく事は無かった。

しかし、そんな事は気にしていられない。シェルティは轟音の正体を探ろうと、生い茂る木々の葉の間から覗き込む。

教会が建っているところが粉塵が舞い上がっているため、正体は教会の中にいるのだろう。だが、正体は粉塵で見れないが、ルスト達の様子を覗う事ができた。

ルストはマントをたなびかせて教会の――正体の方を静観している。オーク鬼達も教会の方を見ているが、心なしか若干怯えているようにも見えた。その時――

「ヌハァ……」

そんなため息のような音と共に、壊れた教会の壁に巨大な手がかけられる。

その手は、オーク鬼――二メイル――を鷲掴みにできる程に大きく、人が着けるようなガントレット――腕に着ける鎧――を装着していた。

「なんだ……あれは……？」

あまりの巨大さに――ーあまりの威圧感にシェルティは震える体を抱いて抑え込む。あれはダメだ。戦ってはならない。人では荷が重過ぎる。そんな弱音が瞬時にシェルティの脳裏を駆け巡る。

そしてそれは姿を現した。

オーク鬼の七倍はあろう巨体。むしろ教会のどこにいたのかわからないぐらいの巨体。その巨体に鎧を装着し、その背中にはこれまた巨大な西洋風湾曲刀を二本背負っている。

そんな異質にして異常な大きさのオーク鬼が教会が粉塵を突っ切って姿を現した。

「人間ごぉおおおおとぉおおおおおおおきぃいいいいいいいいに

いいいいいいいいいい、なぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁに梃子摺(てこず)ってんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ぁぁぁかなか歯応えがあるようだなぁぁぁぁぁぁぁ」

地響きを起こしながらルストへと近づいていく巨大オーク鬼は、歩きながら二本の巨大な西洋風湾曲刀(ファルシオン)を抜刀する。ただそれだけで衝撃波が引き起こされ、周りにいたオーク鬼達が人形のように吹き飛んでいく。

その光景を見てシェルティは本格的に危機感を感じた。

力無き平民にとってただのオーク鬼だけで脅威となりえるのに、そのオーク鬼を人形のように吹き飛ばす化け物が相手なのだ。金がどうとか言う問題ではない。命あってのモノダネだ。ならば――と思慮したところで――

「なんや……」

ルストが呟く。だが、ただ呟いただけなのに何故かシェルティの耳まで届いた。

「ちったぁ、手強そうな奴がおるやんけ」

野太刀の峰で自分の肩を軽く叩いて、カカカッと笑うルスト。明らかに巨大なオーク鬼を挑発している。

「小僧ぉぉぉぉぉ、口の利き方に気ぃぃぃぃぃをぉぉぉぉぉぉぉぉつけろ」

目の前で高らかに笑うルストに向かって威圧感と殺気を撒き散らす巨大オーク鬼。

「さぁぁぁぁぁぁぁぁぁもなくばぁぁぁぁぁぁぁぁぁ、このグランオォォォォォォォォクが、虫けら一匹、踏ぅぅぅぅぅぅぅみ潰すぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！？」

巨大オーク鬼――グランオークが咆哮すると、空間が振動する。

それほどまでに圧倒的な威圧感。絶対的な存在感。その前には誰もが平伏(ひれふ)す。事実、そうしてグランオークはこの群れを作ったのだ。

だが――

「ええねぇ。おもろいわ。ほんなら俺と死合いしよか？」

ルストは平伏さない。むしろ、戦いを煽(あお)っている。流石は戦闘狂と言ったところか。

ルストとグランオークが、互いの間合いの中にいる。いつでも互いに斬りかかれる状態にあり、それは必殺の可能性があると言う事だ。

そんな緊迫した状況だと言うのにルストは笑っていた。それはもう、子供が新しいおもちゃを手に入れたように。

そして、戦いの火蓋が切って落とされた。

第十八話　オーク鬼、討伐（後書き）

色々とツッコミどころ満載なのをついつい出してしまったｗｗｗｗ
まあ、もっとツッコミどころ満載なのがこれからどしどし登場する予定ですけどね！ｗ

第十九話　憤怒の暴走（前書き）

今回はいつにも増してルストがえげつないです。
自分で書いててなんでこうなったかわからんとです。

第十九話　憤怒の暴走

朽ちかけた教会の中からオーク鬼の七倍程大きいオーク鬼――グランオークが姿を現した。

しかもグランオークは他のオーク鬼達とは違い、複雑な思考能力を持ち、人の言葉を話す。更には、どう制作加工したのかわからないが、人と同じ――当然、大きさは段違いの――鎧をその身に纏っていた。

そんなグランオークとルストが互いの間合い内で睨みあう。その光景は端からみると、巨人と小人が啖呵を切っているように見えた。

その二人の動向をシェルティや他のオーク鬼達は黙って見守るしかできない。

「どないしたん？　そっちから来ぇへんの？」

野太刀の峰でトントンと肩を叩きながらルストは挑発する。

「ぬぅぅぅぅぅぅあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……。余ぉぉぉぉぉ程、命が要ぃぃぃぃぃらぁぁぁぁぁぁぬぅぅぅぅぅと見えるぅぅぅぅあぁぁぁぁぁぁぁ。なぁぁぁぁぁぁぁらぁぁぁぁぁぁばぁぁぁぁぁぁ……」

グランオークは眼光を鋭くし、緩慢な動きで二本の西洋風湾曲刀を振り上げる。ただ、それだけの動作なのに、死と言う概念をチラつかせ、オーク鬼達は恐怖した。なんせ、蹂躙を得意とするオーク鬼を力だけで掌握した大鬼なのである。

「ぶるぁぁぁアァァァ

そんな中、ルストは歯を剥きだしにしてカカッと笑っていた。
これは楽しい死合いになるかもしれへん、と思いながら。
思いながらルストは行動に移す。気をっ纏った体で衝撃波の中を突っ切り、二振りのファルシオンの隙間をすり抜けるように跳躍した。
グランオークの二振りのファルシオンが地面に激突し、大地を揺るがすどころか粉塵と共に一部が隆起して自然の槍となってオーク鬼達を貫いていく。
「カカカカカカカカっ！！！！　ホンマに規格外やなぁ！？　ええわぁ、こんな奴と死合いすんのは、随分久しぶりやで！！」
ルストは本当に楽しそうに高笑いしながら、グランオークのファルシオンの峰の上に乗っている。
「ぬぅぅぅぅぅ……。貴ぃぃぃぃ様ぁぁぁぁぁぁ、どうやって……」
「どうやって避けたか、って？　どうやって、ってものでもあらへんよ？　オマエん動きが遅いだけや」
グランオークの峰の上を体勢を崩さずにバランス良く歩きながら告げる。
「正直言うとな、力はそっちのが上や。体デカイし当然やろけど……」
ルストは歩くのをピタリと止めて、野太刀の切っ先をグランオークに向ける。
「それがどないした？」
そのまま、体ごと回転させて勢いをつけ、野太刀を横一文字に振るって斬空閃を放つ。が、それはグランオークの頬を皮一枚を切り裂く程度に終わった。
「ほぉぉぉぉう……？」
（なんや、思いのほかタフやねんな。結構、本気で撃ったんやけど――いや、ちゃうな。タフやなくてこの感じは……なんや……？）
ルストはグランオークの纏う異質さに違和感を覚える。

「しょおおおせんは人間かぁあぁぁぁぁ。大おおおおおお口を叩こうがぁぁぁぁぁぁぁ、この程度よぉおおおおおおっ！！！」

ルストが乗っていない方のファルシオンで、もう一方のファルシオンの峰をこそぎ落とすかのように振るい、ルストは即座に跳躍して避ける。

そこに更にファルシオンの凶悪な一撃が放たれる。苦虫を噛み潰したような表情をルストは浮かべた後、杖を振るってフライの魔法を使い、紙一重で避ける事に成功した。

「ブゥゥゥゥゥゥゥゥンブンと羽虫のように飛びおってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ、うっとぉおおおおおしいぃぃぃぃぃわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

グランオークがそう吼えた瞬間、二振りのファルシオンの動きが数段速くなった。残像が発生する程に。

（なんや、巨体のくせにこの速さは！？）

ルストは見える範囲でファルシオンの軌道を読み、できるだけ最小の動きで避けていく。こんなもの、くらったら一溜まりもないからだ。

だが、それでも尚、グランオークの腕の速さは増して行く。

「マズッ……！？」

とうとうフライで対処しきれなくなったルストはファルシオンの軌道から外れる事ができなくなった。ならばと、最小限のダメージで済ませようと野太刀を盾にして野太刀と体にできるだけ気を回し、防御力を高めた。

「ガハッ……！！！？」

そして衝撃。その一撃は気の防御ごとルストに牙を剥いた。野太刀の盾など意味はなく、体ごと弾き飛ばされて大地に叩きつけられ、爆音と粉塵を辺りにまき散らした。

脳を揺さぶるような強い衝撃、ルストは気を失いそうになりながらもなんとか保ち続ける。体が痙攣したように震えているが、手のひらを閉じたり開いたりしてなんとか動ける事を確認する。どうや

ら気のおかげで真っ二つなんて事にはなっていないようだ。
（全く、ちょう嘗めとったな。あっこまでタフで馬鹿力やったとはな……。いや、なによりも予想外なんは……）
野太刀を杖のように地面に突き刺して立ち上がる。その時、腰の辺りからパラパラと何かが零れ落ちた。それは何かの破片の様だ。
よく見ると、ルストの腰にあった物が無くなっている。厳密に言えば、ベルトに挿していた鞘が先程の地面に叩きつけられた衝撃で粉々に砕け散ってしまったのだ。
だが、今は鞘が砕けた事よりも優先すべき事がある。先程の一撃でグランオークの異質さにルストは気がついたのだ。
（魔力で己の身体を強化しとる事や！）
ルストは目の前のグランオークを睨みつけながら野太刀を地面から引き抜いて構える。

本来、この世界では――ハルケギニアではあり得ない戦い方なのだ。この世界では魔力を精神力と言い、それは人の――それも貴族の家系にしか持つ事ができない力だ。
エルフ等の亜人も先住魔法と呼ばれる魔法――人がそう呼んでいるだけで本来は精霊魔法――を使う事はあるが、それとは根本的に違う別物であるため、精神力は関係ない。
むしろ、オーク鬼と言う思考能力の低い亜人が精神力を――魔力を持っている事自体がおかしいのだ。
そして何より、この世界の誰もが精神力を用いて己の身体を強化して戦うという発想、概念そのものが存在しない。
だが、目の前のグランオークはオーク鬼の癖に高い思考能力を持ち、そしてルストが――影春が生きていた世界での戦い方と酷似した戦い方を用いている。
これは明らかにおかしい事なのだ。
そもそもグランオークなんて生き物が、人里の近くにいる事自体

がおかしい。なんせ、グランオークなんて生き物はハルケギニア中のどの書物にも載っていないからだ。いたとしても未踏の地だろう。
突然変異だとしても、ここまで変異したものはいない筈だ。明らかにオーク鬼とグランオークは見た目は似ていても別の生き物としか言いようがないのだ。
だが正直、ルストは相手がどんな力を振るおうが関係なかった。

『強者』

ただそれだけわかれば相手がどんな力を使おうが、どんな出自だろうが知った事ではなかった。
相手が強ければ強い程、それに打ち勝つ事ができれば自分は更に強くなる。そう考えていた。
「さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁすがは玉藻様よぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……。この我にいいいいいいいい、こぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉれ程まぁぁぁぁぁぁぁぁでぇぇぇぇぇぇぇぇの力を授けてくれるとはなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
この言葉を聞くまでは――
ルストは『玉藻』という言葉――いや、名前を聞いて一気に思考能力が無くなり、目を見開いて呆然と立ち尽くした。

玉藻――玉藻御前はルストの――影春と詠春の両親の仇である。
玉藻に両親を殺され、仇を討つために影春と詠春は神鳴流の門を叩いた。
そして生前より五年程前、詠春と影春は互いに協力して見事、詠春が玉藻御前を討ち取った――筈だ。だが、この世界で玉藻と言うハルケギニアでは珍しい発音の名前を持つ同名の存在がいるらしい。
ルスト自身、転生と言う奇妙な体験をして今ここにいる。ならば、他の存在――玉藻も転生し、この世界に存在していてもなんら不思

議はない筈だ。むしろ、玉藻の方が影春よりも先に転生したのだろう。

そんな複雑な事情なんてものはルストは知らない。その玉藻が本当に影春の知る玉藻なのかルストは知らない。

ただ、親の仇である玉藻がこの世界で生きている。そしてその恩恵で目の前のグランオークは強力な力を手にした。

ただ、それだけを悟った。それだけ悟れば充分だった。

「そうか……、そうかいな……。玉藻の奴、この世界におるんやね……」

ルストは乾いたような笑い声を上げながらゆっくりと顔を上げる。その表情は憤怒だった。更に目が黒く染まっている。怒りと憎しみで無差別に殺気を撒き散らす。

殺気に当てられ、オーク鬼達は少し後退する。本能的に近づいた瞬間、殺されると分かってしまったためだ。

グランオークはほう、と受け流して関心している。

そして木陰に隠れているシェルティもまた、ルストの殺気に当てられていた。

（これ程の殺気を放つとは……、アイツは本当に年下なのか？　いや、それ以前に旅は三日程前に始めたと言っていたのに、何故これ程場慣れしている？　明らかに異常だ……）

年下の殺気に当てられて震える体を無理やり抑えつけながらシェルティは考察する。

（私はおまえの事がもっと知りたくなったぞ）

未だに体は震えるが、それでも薄く笑ってこの戦いを見守るのだった。

憤怒の感情に囚われたルストの行動は速かった。

完全本気全力全開の瞬動を行い、一瞬にてグランオークとの距離を零にして脚へと、感情のままに野太刀を振るう。

先程は皮一枚程切り裂いただけに終わったルストの斬撃は、今度は真っ二つとはいかないまでも完全に肉を切り裂いた。
「ぬぉおおおおおおおおらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！？」
グランオークは切り裂かれた痛みに悲鳴を上げつつ、ファルシオンで足元にいるルストへと斬りかかる。
だが、そこにはもうルストはいなかった
「こっちや」
いつの間にかルストはグランオークの顔の真正面にいた。そしてルストのどす黒い目と視線が交わり、一瞬だけ怯んだ。
その怯みの隙にルストは斬空閃を近距離で放ち、グランオークの両目を切り裂いた。
「――――――――――――――――――――――――っ！！！！！！！！！」
聞き取れない程の莫大（ばくだい）な声量での絶叫。グランオークは痛みでつい、ファルシオンを手から離して両目を押さえる。完全に切り裂かれ、失明した目から涙の如く血が流れ出ている。
「あー、臭いわぁ」
憤怒の表情とは裏腹に、かなりのんびりした声で呟くルスト。
「ホンマ、狐臭いわ」
どすの利いた低い声でもう一度呟くと同時にルストがこの場にいる全ての者の視界から消えた。
次の瞬間にはグランオークの左肩が切り裂かれた。その次には右腰が、そして瞬く間に右腕が、左足が、左足首が、右太股が、腹が、胸が、背中が、左腕が、右肩が、それ以降も同じ部位だろうがお構いなく、まるで鎌鼬（かまいたち）にでもあったかのように次々と切り裂かれて我が血で我が身を染めていくグランオーク。
突然、目が見えなくなった者に、目にも映らぬ速さでの連続斬撃を対処できる訳もなく、ただただ切られて鮮血が飛び散るのみ。
ルストが行っているのは瞬動で移動して斬鉄閃を連続で繰り返しているだけだ。

ただし、使っている瞬動はいつものような一直線軌道のものではなく、瞬動中に旋回していて変則的な瞬動だった。

それは虚空瞬動と呼ばれるモノだ。それは瞬動と何が違うのか？瞬動は地を蹴って一歩で移動するため、移動中は地から足が離れているために方向転換できない。

虚空瞬動は、宙――虚空を蹴る事により一歩で移動するのだ。宙を蹴る――その行為を移動中に更に行うことで、方向転換できるのが、瞬動と虚空瞬動の違いだ。

それ故に虚空瞬動は瞬動の上位に位置し、発展型とも言われている。

ついでに斬鉄閃は、鉄を容易く切り裂く神鳴流の奥義――技だ。

ルストが連続斬撃を終えて地に降り立つ。

ルストが振り返って見ると、グランオークは己の血で塗れ、満身創痍ながらもフラフラと立っていた。

「なんや、まだ立てるんかいな。タフやね」

少しは頭が冷えたのか告げたその表情は憤怒ではなく、無表情――いや、冷酷だった。

「に、人間風情がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！！！！！」

今度は死に体ながらも怒声混じりの咆哮をして自ら鼓舞するグランオーク。

「うっさいわ。黙っとれ」

その言葉と共にフラフラのグランオークへと突撃した。ルストの残り七体のゴーレム達が。

小太刀二刀を持ったゴーレムが素早く足元を駆け抜け、人間で言うアキレス腱辺りをすれ違い様に斬ってバランスを崩し、そこに大

槌を持ったゴーレムが腹を打ち付け、殴り飛ばして転倒させる。大騒音と粉塵を立てて転倒したグランオークに残り五体のゴーレム達がそれぞれ行動に移す。

野太刀、棍棒、槍、薙刀をそれぞれ持ったゴーレム達がグランオークの手足に得物を突き刺し、斬馬刀を持ったゴーレムが腹に突き刺して地面に縫い付ける。

そこにトンッと軽い音を立ててグランオークの胸元に着地したルストが、心臓があるべき場所に野太刀を突きつけた。

「玉藻御前がおる場所を知らんか？」

「知らぬぅぅぅぅぅぅぅぅぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！！？」

グランオークの言葉を遮るように、ルストは心臓のすぐ隣を躊躇（ちゅうちょ）なく突き刺した。それと同時に斬馬刀を持ったゴーレムが傷口を広げるようにグリグリと斬馬刀を動かしたため、途中から悲鳴に変わっている。もうどっちが悪役かわからないが、怨敵（おんてき）である玉藻御前が絡んでいると手段を選んでいられないのだった。

「じゃあ、玉藻とどこで会ったんや？」

「……知っていたとしぃぃぃぃぃてぇぇぇぇぇぇぇぇもぉぉぉぉぉぉぉぉぉ、貴様には死んでも喋らぬぅぁぁぁぁぁぁぁ……」

「さよか。じゃあ、死んどけ」

グランオークの答えを聞いた途端、ルストはグランオークの胸部から野太刀を引き抜く。

「神鳴流決戦奥義――」

そう呟くと、野太刀の刀身からバチバチッと尋常じゃない量の稲妻が迸（ほとばし）り、帯電しだす。気を雷に変換したのだ。

「真・雷光剣ッ！！」

帯電して白く光り輝く刀身をグランオークの心臓へと突き刺した。

すると、グランオークの体内から白い光が溢れ出し、そのままグランオークの肉を、内臓を、骨を、存在そのものを蒸発させる。そしてグランオークだけでは飽き足らず、周囲のオーク鬼達や朽ちか

けの教会すら白い光が塗り潰していく。
シェルティはそんな光景を木陰から出て、避難しながら目撃した。

ルストが使ったのは神鳴流決戦奥義、真・雷光剣だ。
莫大な気を雷へと変換させ、そのエネルギーを爆発させて広範囲を破壊する神鳴流の奥義中の奥義だ。この奥義は百花繚乱と同じく影春が認めた奥義の一つだ。
ただ、この奥義は広範囲高威力なために消費する気の量も半端ではない。そのために撃てる回数は一日に一度が限度だ。
更に言えば、ルスト自身、まだ体が未熟なためにそうほいほい撃てる代物では無いのだ。

光が収まると、そこは最初から何も無かったかのように荒地になっていた。
なんとか巻き添えを食わなかったシェルティは逃げ延びた森から出てきて辺りを見回す。
当然、何もない。ただ、土と石が転がっているぐらいで、生命を一切感じさせない風景がただただ広がっていた。
（凄まじいな……）
シェルティはあの光に巻き込まれていたらと考えてゾッとした。
あれは完全にスクウェアメイジの魔法を凌駕（りょうが）している。いや、魔法とは根本的に違う物だとすらシェルティには思えたのだった。事実、あの光は魔法ではなく技術なのだが。
（っ――――！？）
そこでシェルティは見た。見てしまった。
爆心地跡みたいな荒野の中央に佇（たたず）む一人の男を。
一言で言えば、その風貌（ふうぼう）はこのハルケギニアでは異質だった。
黒い短髪をオールバックでキッチリと整え、胸元がはだけるよう

な左右の襟みたいなモノがそのままワンピースのように下半身まで覆っており、袖口はローブのように広がり、胴の辺りを布で巻いて留めているような民族衣装――日本で言う着流しを着た二〇代前半の男を。

それこそがルストの生前の姿――青山影春だった。

しかし、風が吹いて砂埃が舞い、その姿が見えなくなった。だが、すぐに砂埃が晴れるがその男の姿は無い。その変わりにマントをたなびかせて神妙な表情をしたルストが立っていた。

（ルスト……君は一体何者なんだ……？）

ルストの神妙な――どこかもの悲しそうな表情を見てシェルティはそう思ったのだった。

第十九話　憤怒の暴走（後書き）

ダーク・ルスト再臨ｗｗｗｗｗ
えげつない、実にえげつない。
というか当初はこんなえげつないキャラじゃなかったんですけどねぇ。どうしてこうなった？

ちなみに今回、影春だった頃の容姿を初公開。……と言うかプロローグで書いてなかった事にビックリしてみたりｗｗｗｗ
まあ、簡単に言えば詠春から眼鏡を取って着流し着せたような感じをご想像くださいな。

第二十話　旅の目的・九尾の狐（前書き）

しっちゃかめっちゃかな日常パートですw

第二十話　旅の目的・九尾の狐

グランオーク共々、オーク鬼達を討伐してあの寂れた村へと帰って来たルストとシェルティ。

村長からそれなりの報酬を貰おうとしたのだが、こんな寂れた村にそんな物がある筈もなく、現在は領主に今回の事を伝えて報酬が届くのを村で待っている状況だ。

シェルティは領主がそんな報酬を払うとは思えなかったが、今回のオーク鬼討伐のために戦力を整えていたところなのだ。つまり、戦力を整えるという事は、それなりに金が掛かるという事であり、その金に比べれば、今回の報酬なんて安いものだったりする。

それを聞いたらシェルティがどういう反応をするかは言うまでもないだろう。

そうしてシェルティは報酬が届くは半信半疑のまま、ルストと共にこの村で待機している。

だが、待機とは言え、吉報が向こうへ届き、準備したりで報酬が届くのは一週間以上かかるそうだ。それはもう暇で暇でしょうがない。

暇な二人が今、何をしているかと言うと――

「すみませんでした。いや、ホンマ、やり過ぎました」

――ルストがシェルティに向かって全力で土下座していた。

「ほう。本当に反省しているのだろうな？　まさか本来の目的を滅却されるなんて夢にも思わなかったぞ」

土下座しているルストの前に、シェルティは腕組みしながら仁王立ちして見下ろしている。

シェルティの言葉通り、本来の目的は遺跡――あの朽ちた教会の発掘だ。さらに言えばそこで目ぼしい物を見つけて売っぱらう事だった。

だが、今回のオーク鬼討伐の折、神鳴流決戦奥義である真・雷光

剣によってグランオークごと朽ちた教会を消し飛ばしてしまったのだ。

その事についてルストを説教していたところである。

あのグランオークを鬼畜のごとく倒したルストだったのだが、今のシェルティの状態――発掘（金儲け）できないためにかなりのご立腹――には、グランオーク以上の恐怖を感じていた。なんせ――

（そんなどっかの魔王みたいな目ぇで睨まんといてんか……）

神鳴流の白黒逆転眼を棚に上げて、シェルティの目つきの悪さに心の中で愚痴る。正直、どっちもどっちなのだが。

「おい、止めろよ！　兄ちゃんだって悪気があってやったんじゃないだろ！？」

そこに突然の介入者が現れた。

一〇歳ぐらいの小さな子供がシェルティの服の裾（すそ）を掴みながら睨んでいる。

「リザ！」

その姿を確認したルストが歓喜の表情を浮かべる。やっと説教が終わると思ったからだ。この時、ルストにとってリザが救世主に見えたのだった。

「当たり前だ。悪気があってやったのなら、尚の事悪質だろうが」

だが、そんなリザに一切退く気無しのシェルティが間髪いれずに言い返す。

「そりゃそーだろうけど、もう終わった事だろ？　それにあそこには何も無いし。人の出入りが無かったからあそこまでオーク鬼が住みついたんだろ！」

「人の出入りが無いからこそ、まだ掘り出し物がある可能性もあった訳だが？」

「う～！」

「あぁ！？」

と、言いあいを始めて睨みあう二人。にしても一〇歳に一歩も退かないシェルティは大人げない。実に大人げない。

「この強欲女！」
「ふん、言葉遣いに気をつけろ、ちんちくりん」
更に低レベルな子供の口喧嘩みたなモノに発展してしまう。
「まあまあ、ちょっと落ち着こ――」
そこでルストが二人を宥めようとするが――
「おまえは黙っていろ！」
「兄ちゃんは黙ってて！」
「おおぉう……」
ヒートアップした二人には火に油でしかなく、縮こまってしまうルストであった。

「なんやもー、めっちゃ疲れたわー」
心なしかゲッソリと頬をこけさせて村の外れまでやってくる。
ちなみにシェルティとリザは未だに言いあいを続けており、ルストが何を言っても止まらなかったためにこっそりと抜け出したのだった。
抜け出した後は村の人達に英雄扱いされているために揉みくちゃにされた。ルストは基本、褒められる事に慣れていない――関西呪術協会では在り方が否定され、この世界の家庭では生きている事自体が否定された――ため、それを瞬動で振り切ってここまで来たわけである。まあ、褒めてくれた人達ももちろんいるが、それはエンドリス家の使用人達ぐらいだった。
そんな事より、ルストはただ一人になって考えたい事があった。
言わずもがな、玉藻御前の事である。
ルストはため息をついて木々の隙間から見える空を見上げる。
（アイツが……生きとんのかもしれへんのか）
ルストは素肌の上に着流しのみという艶めかしい服装の白髪の美女を思い出す。だが、触るとポッキリ折れそうな程に細い腕から繰り出されるとは到底思えない程の凶悪な拳や、細身故の尋常ではな

い速さの脚力をルストは今でも覚えている。
　再びため息をついてルストはそのまま後ろに倒れこんで寝ころぶ。
（もし、アイツがこの世界におんのやったら、俺は――）
　アイツは俺が殺す。ルストはその言葉を掻き消した。
（アホアホ。まだアイツやと決まったわけやない。同名の魔物の事かもしれへんやんけ。グランオークん時みたいに冷静さを失ったらアカン）
　グランオーク戦での行動を反省する。ちなみにルストはキレればキレる程、冷酷になる性質なのだ。無表情になるのもキレる一歩手前と言った具合だろうか？
　そしてキレた証拠が目が黒く染まる事である。まあ、それは大概の神鳴流門下の人達にも言える事なのだが。
（そーやな。グランオークが言ってた玉藻がホンマにあの玉藻やとわかるまでは気ままな旅をしとこかな？　やりたい事も一杯あるし、なにより俺の夢やからな）
　頭の後ろで手を組んで枕にして空を見上げながらカカッと笑う。
　とりあえずなるようになると楽観的な結論を出す。事実、どこにいるのかわからないし、同一存在なのかすらわからないモノを探して見つけるなんて事はどう考えても不可能だ。まず、見つける事はできないだろう。
　なら、気ままな旅のついでに探してみるだけの話だ。ルストは旅の目的――あくまで副次的な――を見つけた。
　ルストは気分が晴れたと言わんばかりにグッと体を伸ばす。その表情は神妙ではなく、どこかスッキリしたような晴れやかな笑顔だった。

　そんなルストを木陰から覗く二つの双眸があった。
「兄ちゃんはもう大丈夫だな」
「まったく、世話のかかる弟分だ」

コソコソとルストには聞こえないように小声で話す二人。実は二人、オーク鬼討伐から帰ってきた時からルストの様子がどこかおかしい事に気づいていた。無理をして明るく振舞っていた事に気づいていた。

だからこそ、二人は――いや、シェルティは『タマモ』なる人物――実際は人では無い――が、ルストにとってどういう存在なのか知りたかった。このまま様子がおかしければこちらから『タマモ』について聞くつもりだった。

だが、結局ルストは勝手に気落ちして勝手に立ち直ってしまった。これでは別に聞く必要もないだろう。シェルティはそう考えた。しかし――

（少し残念ではあるな。まあ、自らの過去を語っていないのは同じか。いつかアイツには私自身の事を話すのだろうか？　そしてアイツは自分の事を私に話してくれるのだろ――）

そこまで考えてシェルティはブンブンと勢いよく首を横に振る。

（ま、待て。何を考えているんだ私！？　これではまるで恋する乙女――）

そんな結論が出た瞬間、シェルティの顔が真っ赤に染まった。はっきり言って自爆である。

「なーなー、姉ちゃん」

「ん？　な、ななな何だ？」

リザの一声で、そんな思考の海から脱したシェルティは、どもりながらも聞き返す。

リザはシェルティが何故動揺してどもったのかわからなくて小首を傾げつつ、まあいいかとスル―した。そして――

「姉ちゃんって兄ちゃんの事好きなのか？」

「ブッ……！？」

シェルティにとってタイムリーな質問をするリザ。思わずシェルティは噴き出してしまった。

「な、ななな何を言っているんだお、おおおおおおまえはっ

！？」

さっき考えていた事も相乗して今の質問で少しパニックに陥るシェルティ。

「えー。だって気になるだろ？　もしかして姉ちゃんがライバルになるかもしれないんだから」

「え〝」

リザの言葉にシェルティの表情が凍りつく。

「アタシは兄ちゃんの事、好きだぞ」

そして満面な笑顔を浮かべて宣言するリザ。

まだ一〇歳なために恋とか愛だとかの好きかどうかはわからない。だが、絶望していたところに希望を与え、英雄のごとき活躍をして、父親の仇を討ってくれた人物を憧れの対象にするのは当たり前の事である。

ちなみに今まで明記していなかったが、こんな口調でもリザは立派な女の子だ。まあ、名前でわかるかもしれないが。

「で、姉ちゃんは？」

ニコニコと笑いながらシェルティに答えを促すリザ。

さっきの言いあいとは逆の立場になりつつある。

（ルストと出会ってまだ三日だ。正直、アイツがどういう奴なのかはだいたい把握したつもりだが、それでもまだ恋愛対象にはならないよな？　うんそうだまだ恋愛対象にはならないしというかそもそもアイツは私にとって弟みたいな存在であって恋愛とかそういう対象には見れないっていうか私は年上が好みであってだな――）

と、シェルティの頭がオーバーヒートしそうな勢いで迷走して、またしてもパニックに陥りながらも結論を出す。

「わ、私はだな――」

「うんうん」

顔をリンゴみたいに真っ赤に染めながら言おうとする。が――

「二人して何やってんの？」

モジモジしているシェルティと、どこか期待半分不安半分な表情

でシェルティの答えを待つリザの間にある茂みからヌッとルストが顔を出した。

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！？」

「ちょブラマッ！！！？」

「ちょ！？　姉ちゃん！？」

シェルティはいつものようなぶっきらぼうな感じとは打って変わってちゃんとした女の子のような悲鳴を上げながらルストの顔面へと膝蹴りをかました。ルストの鼻からベキョっと何かが折れる嫌な音が聞こえたが、三度パニックに陥っているシェルティと、それを宥めようとしているリザには些細な事である。

こうして、平和な一時が――若干一名、平和ではないが――過ぎていくのであった。

ところ変わってルスト達がいる村から遠く離れ、別の領地にとある村があった。

そこはルスト達が今いた村よりもずっと豊かで、活気があった。村を真っ二つにするような形で道が開かれ、それは大通りと呼ばれる道になっている。大通りには日本における商店街の様にそれぞれ店を構えている。

その大通りの真ん中を堂々と歩く一人の女がいた。女の容姿は胸元がはだけるような左右の襟みたいなモノあり、双丘の頭頂部が微妙に見えないようにしていて非常に艶めかしい。その襟がそのままワンピースのように下半身まで覆っていてチャイナ服のように際どいスリッドみたいになっており、そこから生足が出ていてこれまた艶めかしきなっている。そして袖口はローブのように広がり、胴の辺りを布で巻いて留めているような民族衣装――日本で言う着流しを着ていてこの大通りでは非常に浮いていた。服装だけ見れば痴女

と思われそうだが、足元まで届くのではないかと思わせる程に長い白い髪がキッチリと揃えられており、どこか神秘的な雰囲気を醸し出していて、女の美しさを際立させていた。

そしてそんな艶めかしい女は大通りにいる男共の視線を釘付けになっていたりする。が、その中にいる所帯持ちは、その相方にフルボッコにされてたりするのだが、そんな事は些細な事だ。

女が履いている雪駄のような物が一歩を踏み出す度にカランコロンと陽気な音を立てている。

「よう嬢ちゃん！　今日も気前がいいねぇ！」

「ふふふ、そういう事は思ってはいても口に出すべきではないぞ？　でないと、女子共にとっての其方の印象が悪くなるだけじゃろうて。なぁ、独り身？」

「グッハァッ！！？」

おちゃらけて女に声をかけた秘薬屋を営んでいる男だったが、女の辛辣な言葉にハートブレイクである。ちなみに気前＝露出の事だ。

このやりとりを見て、周りの人達が、またやってるよ等と呆れながら笑っていたりする。

この会話からわかる通り、女の雰囲気や服装、容姿は完全に浮いているが、この村に何故か溶け込んでいる。

「ねーねー！　お姉ちゃん！」

そこで、女の背後から声がかかる。女が振り向けばそこには数人の子供たちがいた。

「一緒にあそぼー！」

「いーでしょー？」

と、次々と女に群がる子供達。女はこの村では人気があるようだ。

「待て待て。妾にそう一度に押し掛けるでないわ」

少し困ったような顔をして子供達に言い聞かせようとするのだが

――

「おまえか？　この村で話題になっている異邦の美女ってのは」

再び女の背後から声が掛かり、振り返ると三人の屈強そうな男達

がヘラヘラと笑って立っていた。男達はそれぞれ軽装ながらも武装していることから流れの傭兵だと言う事がわかる。

その男達を見た子供達が怯えたように女の背後に隠れた。

「さてな。まあ、自分でもこの村では浮いていると言う事は自覚しておるし、妾の事じゃろうな」

子供達を庇いながら背筋をピンと伸ばし、毅然とした態度で立つ女。

「へぇ、なかなかに良い女じゃねぇか。しかも服も色っぽいし、誘ってんだろ？」

と、そんな女の姿を確認した男達が女に近づいていく。それを確認した女は小声で「お遊戯はまた今度な」と子供達に笑って言い聞かせて逃がす。

男達も子供に興味が無かったのか、追いかけるなんて事はしなかった。

「なるほど、近くで見るとなかなかの美人じゃねぇか」

と、一人の男が女の顎に手を伸ばして触れ、強制的に視線を交えさせる。だが、女は怯えた様子もなく、挑発的に薄く笑っている。

「なかなか度胸あんじゃねぇか」

「この女、俺達が貰っちまいましょうぜ？」

と、女の顎を持つ男の左右にいる男達が女の顔を覗き込みながらニヤニヤ笑う。

「そうか。ならば村はずれまで行こうではないか。あそこはほとんど人が来ん。ゆっくりと遊べるじゃろう」

女がにっこりと笑ってそう言うと、男達は歓声を上げ、そそくさと女を連れて村はずれまで連れて行く。

村人達はその様子を黙って見ていただけだった。だが、あの男達が怖かったのではない。女が無事であるとわかっているからだ。

何故なら、女はこの村で一番――

村外れまでやって来た男達と女。さっきまでいた村とは打って変わり、どこか寂びれた雰囲気のある場所だ。

それは当たり前で、数年前までここも村の一部だったのだが、魔物達によって壊滅的な打撃を受けて放棄したのである。その証拠に、壊れた家だったであろう壁や屋根、そして草木が無造作に生えまくった井戸なんかも存在した。

「確かに。ここなら誰も邪魔は入らねぇなぁ」

「にしてもまさか屋外が好みだとはな。見た目通りスキモノだねぇ」

いやらしい笑みを浮かべる男達だが、女は意に返さない。むしろ勝手に言ってろと言わんばかりに涼しい顔をしている。むしろ、小馬鹿にしているようにも見える。

「さて、それじゃあ嬢ちゃん。遊びましょーかぁー？」

「ふむ。それなら提案なんじゃがの」

手をわきわきしながら迫ってくる男達にとぼけた顔をする女。

「提案？」

「そうじゃ。鬼ごっこ、なんてのはどうじゃ？」

自らの頬に人差し指を当てて少しブリっ子っぽく進言する女。

「ほーほー。逃げる嬢ちゃんを、俺達が追いかけるってーー」

「いやーー」

男達が想像したのだろう、にやけたところで、水を指すように女が言葉を遮る。

「其方等が逃げるのじゃよ」

そう言った瞬間、女の姿が男達の視界から消えた。

三人いた男達の内、最後尾にいた男から赤い飛沫が飛び散り、前にいた男達にその飛沫がかかる。

二人が振り返ると、最後尾にいた男の頭が粉々に消し飛んでいて、首から上が無い状態で未だにそこに立っていた。

その隣にはあの女がいた。だが、頭に獣のような耳が、立派な毛が生え揃っている九本の尻尾があった。

「命を懸けてな」

女はそう言うと、ポンッと首の無い男の背中を軽く押しだす。ただそれだけで胸部に穴が空いて吹っ飛ぶ。胸部の穴から噴水のように血が溢れ出しながら、二人の男達の間を勢いよく通過して廃屋の壁に激突し、肉が弾け飛んで赤いペンキを塗りたくったように壁を赤く染め上げた。

「あ、亜人!?」

「なんで亜人が人と一緒に暮らしてんだぁっ!?」

その事で二人の男が酷く動揺する。女のあの細腕から軽く押し出しただけで人の体に風穴を空ける怪力で殴られたら、軽く死ねる。

「亜人とな？　違うなぁ。妾は亜人ではないぞ？　まあ、其方等の認識がどうであろうと妾には関係ないのじゃがな？」

再び、女の姿が男達の視界から掻き消えた。そして次の瞬間には二人の内、前にいた男の真正面に現れた。しかも、既に互いの息が掛かり合う程に接近している。

女の右手の爪がせり出すように伸び、そのまま振るうと、男は一瞬でバラバラに解体され、血の池を造り出した。

「妾はな？　人に愛されたいのじゃよ」

女が二人目を殺した光景を見て尻もちをついた三人目の男にゆっくりと近づく。あれだけの事をしたのにその身には返り血一つついていない。

「じゃが、お前達みたいなのは御免蒙るよ」

ザッと最後の男の前に立って見下ろし、長い爪を向ける。それが男の見た最後の景色だった。

「やれやれ」

後処理を済ませてため息をつく。

「人に愛されたい、か……」

先程、自分で言った事を思い出して苦笑いする。そして、愛され

続けた自分が初めて愛した男の事を思い出して微笑む。
だが、すぐにその表情が曇った。
「じゃが、あの者だけは妾(わらわ)を愛してはならんのじゃ」
女が初めて愛した男は、絶対に女を愛してはならない。何故なら――
「妾を愛した者は、妾の魔力に当てられ、病を生じていずれ死ぬ」
女はその場を立ち去ろうと踵(かかと)を翻(ひるがえ)す。が、立ち止まって空を見上げる。
(む？　あのグランオークが死におったか？　力のリハビリ程度にちょいと改造してやっただけじゃが、そこらのメイジが束になっても勝てん戦闘力は備えた筈じゃが……ま、良いかの。妾の知る所ではないわ)
頭にある耳と九本の尻尾を仕舞って頭をポリポリと掻く。
今度こそ女――玉藻御前(たまもごぜん)は自らが暮らす村へと帰って行った。

第二十話　旅の目的・九尾の狐（後書き）

初登場、玉藻御前ｗ
あまり強さが際立ってませんけどね。
でも彼女は強いんですってばぁ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5408l/

奔放のメイジ

2011年3月30日16時25分発行